

第14回京都大学全学教育シンポジウム

京都大学の直面する教育課題について

—第2期中期目標・中期計画のスタートに当たって—

報告書

2010

目 次

1. 開催の趣旨	1
2. 日程	2
3. 開会	4
4. 総長基調講演「京都大学の教育－これまでとこれから」	5
5. 問題提起1（理事・副学長 西村周三）	17
6. 問題提起2（高等教育研究開発推進機構長 山本行男）	24
7. 特別講演「全学向初修物理学の教育上のねらい」 （高等教育研究開発推進機構教授 舟橋春彦）	25
8. パネルディスカッション	37
9. 閉会挨拶（高等教育研究開発推進機構長 山本行男）	65
10. アンケート結果について	66
11. 参加者名簿	79
（参考）部局・役職別参加者数	81

※ 部局名・職名は平成22年9月1日現在

1. 開催の趣旨

これまで、本学では全学教育シンポジウムにおいて様々な教育課題を採り上げてきた。特に法人化以降は、教育の質保証や中期目標・中期計画に関する課題が主要なテーマになってきた。

今年度より、中期目標・中期計画の第2期がスタートし、暗中模索といってもよかった第1期とは異なり、中期計画は92項目に絞り込まれ、教育に関する目標を達成するための措置としての計画は23項目に厳選されている。

とりわけ、初年次における教育は学内外共に注目されており、今年度は試行として新入生ガイダンス及び学部入学式の一部に組み入れるとともに、別途新入生特別セミナーを開催したが、次年度以降の実施に繋げるため、今後本学に相応しい初年次教育の在り方等についての議論が必要であると考えられる。また、キャリア教育については、大学設置基準の改正に伴い、学内組織の有機的連携などの措置が求められており、喫緊の課題となっている。さらに、グローバル30として、K. U. Profileのプログラムが本格的にスタートしつつあり、あらためて本学の教育の国際化の必要性が高まっている。

一方、これまで課題となってきた全学共通教育については、研究科長部会に学士課程における教養・共通教育検討会が置かれ、平成22年3月に「京都大学の学士課程における教養・共通教育の理念について」の報告書が纏められ、京都大学未来戦略検討チームのワーキンググループ2では、リベラルアーツ・教養教育について検討が進められている。

これらの教育に関する課題を克服し、目標を達成するためには、就学や学生生活に不安を抱える学生への支援も必要となる。休学・退学等の実態を踏まえ、学生への就学支援体制の強化が望まれる。

こうした学内外の情勢を視野に入れ、第14回を迎える今回の全学教育シンポジウムでは、全体として本学が直面する教育課題についての議論を深めるため、分科会テーマとして次の課題を採り上げた。

- 1) 全学共通教育の今後の展開について
- 2) 教育の国際化について
- 3) 初年次教育について
- 4) 少人数教育について
- 5) 学生の就学支援について

これらの課題以外にも分科会テーマとして採り上げなければならない課題は多々あるとは思われるが、第2期中期目標期間の初年度として最初に取り組むべきであると考えており、教育改善に繋がる実効性のある議論の展開を期待したい。

なお、全学教育シンポジウムは全学的なFD/SDのイベントとしても捉えられており、昨年度まで設定していた職員向けの分科会テーマを設定せず、「FDとSDを峻別することなく」、多くの職員が教員と一緒に教育課題についての議論を深めて頂きたい。

【テーマ】

全体会議：京都大学の直面する教育課題について

－第2期中期目標・中期計画のスタートに当たって－

- 分科会：
1. 「全学共通教育の今後の展開について」
 2. 「教育の国際化について」
 3. 「初年次教育について」
 4. 「少人数教育について」
 5. 「学生の就学支援について」

2. 日 程

9月10日(金)

- ・開会
- ・総長基調講演
- ・問題提起（西村周三理事・副学長、山本行男機構長）
- ・分科会討論
- ・特別講演（舟橋春彦・高等教育研究開発推進機構教授）
- ・パネルディスカッション
- ・閉会

(参考) 全学教育シンポジウム開催一覧

	日程	場所	テーマ		参加者		
			主	副(分科会テーマ)	計	教員	事務職員
第1回	H 8. 8.28 ～8.29	比叡山国際観光ホテル	全学共通科目をめぐる	・一般教育科目の内容、学生集団の変化 ・学生の変化、教育上の難しい点 ・全学共通科目の具体的な問題点	201名	185名	16名
第2回	H 9. 8.19 ～8.20	比叡山国際観光ホテル	教養教育について	・A群科目について ・C群科目について	201名	186名	15名
第3回	H10. 8.20 ～8.21	ラフォーレ琵琶湖	学部教育から見た教養教育について	・少人数セミナーについて ・理科系の教養教育と基礎科目で何をどのように教育するのか ・外国語教育に何を求めるのか	197名	182名	15名
第4回	H12. 8.30 ～8.31	大津プリンスホテル	京都大学における教育評価	特にテーマは設定せず、「京都大学における教育評価」をテーマに討論	125名	102名	23名
第5回	H13. 8.31 ～9. 1	大津プリンスホテル	京都大学における教育評価 (授業評価・成績評価等)の在り方	テーマ:教育実態とその改善 ・文系から見た全学共通科目の現状 ・理系から見た人文・社会・外国語教育の在り方 ・学生による教育評価 ・ファカルティ・ディベロップメントの在り方	178名	149名	29名
第6回	H14. 8.30 ～8.31	大津プリンスホテル	新しい教養教育の在り方 —基本理念・実施機構・教育評価—	・本学基本理念の教育における実現へ向けて ・高等教育研究開発推進機構の発足とその運営 ・成績・授業評価とファカルティ・ディベロップメント(FD) ・全学共通教育のカリキュラム ・教育の達成度の評価「京都大学卒業」とはなにか	240名	207名	33名
第7回	H15. 9. 5 ～9. 6	兵庫県立淡路夢舞台国際会議場、ウエスティンホテル淡路	京都大学における教育の“ミニマムリクワイアメント”をどう考えるか		240名	205名	35名
第8回	H16. 9. 9 ～9.10	兵庫県立淡路夢舞台国際会議場、ウエスティンホテル淡路	京都大学における教育の“質の保証”とは —教育の改善と評価の視点—	・学部教育における教育の達成度とはなにか(文系学部の場合) ・学部教育における教育の達成度とはなにか(理系学部の場合) ・教養教育の質の保証とためのシステム—全学出動制は可能か— ・(特別分科会)国際交流の展開による国際的人材の育成	242名	210名	32名
第9回	H17. 9. 1 ～9. 2	兵庫県立淡路夢舞台国際会議場、ウエスティンホテル淡路	学部教育・大学院教育の質の改善と自己点検・評価	・学部専門教育・全学共通教育のリエゾン:理系の場合 ・学部専門教育・全学共通教育のリエゾン:文系の場合 ・2006年問題を視野に入れた教育課程の改善 ・学力差の拡がりについてどう対応するか ・学部教育・大学院教育の自己点検・評価に向けて ・研究評価をどう考えるか	229名	199名	30名
第10回	H18. 9.14 ～9.15	兵庫県立淡路夢舞台国際会議場、ウエスティンホテル淡路	責任ある教育体制とは何か —京都大学における教育の将来像を問う—	・研究所・センターの教育参加に向けて—教育は権利か義務か?— ・理系教育における6年一貫教育の実現は?—理系における基礎教育科目と専門科目の融合— ・文系教育におけるA群科目の意味は? ・職員の教育支援の在り方は?	240名	193名	47名
第11回	H19. 9.6 ～9.7	兵庫県立淡路夢舞台国際会議場、ウエスティンホテル淡路	京都大学における教育の将来像を問う —第Ⅱ期中期目標の策定に向けて学部、大学院教育の現状と課題を考察する—	・自学自習を根幹とする京都大学の教育の現状と課題—文系学部・研究科における新しい教育のあり方を探る— ・自学自習を根幹とする京都大学の教育の現状と課題—理系学部・研究科における新しい教育のあり方を探る— ・学部教育における研究所・センターが果たすべき役割を探る ・京都大学における英語教育の現状と課題—グローバル化社会における英語教育のあり方を探る— ・学部教育における「国際教育プログラム」の現状と課題—世界的な教育・研究拠点としての国際交流のあり方を探る—	233名	200名	33名
第12回	H20. 9.12 ～9.13	兵庫県立淡路夢舞台国際会議場、ウエスティンホテル淡路	京都大学における教育の現状と将来を考察する —第Ⅰ期から第Ⅱ期へ向けて—	・全学共通教育の現状と課題について ・本学の教育の国際化に向けて ・教育における研究所・センターの役割について ・これからの職員の役割について	262名	211名	51名
第13回	H21. 9.24 ～9.25	時計台記念館	学士課程教育を再考する —第Ⅱ期中期目標・中期計画の実現に向けて—	・単位の実質化等について ・本学における全学共通教育の在り方について ・初年次教育について ・教育の国際化について ・情報教育の在り方について ・学生生活・学習支援の在り方について	235名	189名	46名

3. 開会

鈴木（副機構長・教育学研究科教授） 皆様、おはようございます。ただいまより第14回全学教育シンポジウムを開会いたします。



最初に、松本紘総長から基調講演がございます。続きまして、西村周三学生教育担当理事、山本行男高等教育研究開発推進機構長のお2人から問題提起をいただきます。この後、10時45分から、それぞれ先生方が事前にお申し込みをなさっております分科会の会場に移動していただくことになります。分科会は、10時50分から午後2時50分まで、昼休みを挟んでご議論いただくことになっております。14時50分に一応分科会は終わりますが、その後、休憩時間を30分程度設けてございます。この30分の間に、このホールにおきまして舟橋春彦教授による特別講演が予定されております。14時50分、特別講演は開始となっております。この特別講演が終わりました後、15時20分から17時45分までが全体でのパネルディスカッションの時間となっております。このパネルディスカッションは、各分科会の報告をいただきながら、全体での討議の時間として活用させていただきたいと思っております。パネルディスカッションの閉会の後、情報交換会も企画いたしております。これは、午後6時から、この建物の2階にございます

「カフェレストランきはだ」で行います。これが本日のスケジュールとなっております。

最後になりましたが、高いところから失礼しておりますが、本日、進行役を務めます、高等教育研究開発推進機構の副機構長をしております教育学研究科の鈴木晶子と申します。今日一日、どうぞよろしくお願いたします。

それでは、松本総長から基調講演をお願いしたいと思います。総長、壇上をお願いいたします。

4. 総長基調講演「京都大学の教育—これまでとこれから」

京都大学総長 松本 紘

皆さん、おはようございます。

今日は、「京都大学の教育—これまでとこれから」というタイトルでお話をさせていただこうと思っております。この話をする前に、ご参加いただいた方々にお礼を申し上げたいと思います。日々、教育や研究、その他の業務で忙しい中、こうして1年に1回集まっていたいただき、京都大学の教育を考える場を長らく持ってまいりました。ご参加いただき、大変うれしく思っております。今日、いろいろな話があると思いますが、お帰りにになりましたら、各部署でその話を、ぜひ折を見つけてまわりに広げるようにしていただきたいと思っています。よろしくお願いいたします。

ごく最近ですが、大変大きなショックを受けたことをご紹介します。『カレッジマネジメント』という雑誌がございますが、この164号には、「大学は高校生からどう見られているか」というアンケートがとられていました。



74,000人の高校生にアンケートを出して、回収は12,000、そのうち1万何百人かが大学へ進学しました。つまり、大学へ進学する人が大多数アンケートに答えたということで、1万人以上の統計です。それを見て、私は衝撃を受けました。

まず、関東の高校生の大学のイメージですが、「有名な大学を挙げてください」、「学力の高い大学を挙げてください」、「教養が身につく大学を挙げてください」、「活気がある、あるいはそのような感じがする、あるいは周囲から評判のよい大学はどこですか」というアンケートです。アンケートですので、これが実態をあらわしているとは必ずしも思いませんが、関東ではこのような結果になっています。「京都大学」はかろうじて10位に入っています。ほとんど欄外に落ちそうです。解釈はいろいろあると思います。知られていないと理解するのか、高校の先生に勧められていない、あるいは話題にされていないということでしょうか。「学生の学力が高いと思いますか」という質問では、京都大学は4位です。「教養が身につく大学ですか」という質問では6位です。「活気がある大学ですか」、これも欄外に落ちそうなところにいます。「周囲の人たちから高校生が聞く評判はどうですか」という質問では京大は9位です。

関東では第2集団でも仕方がないかなと思いますが、東海地方でアンケートをとりますと、関東の結果より1つ2つ上がるだけです。

さすがに関西でのアンケートでは京大はそのようなことはないだろうと思って見ました。すると、このような状況です。これが高校生の見ている大学イメージのアンケート結果なのです。正しいかどうかはわかりませんよ。関西で京大は、東大とか早稲田とか関東の大学に遥かに後塵を拝しています。「学生の学力」、これはさつきとあまり変わりませんね。「教養が身につく」は、さすがに3位に位置していますが、注意して見ないといけないのは、東大や早稲田は常にどの分野でもほとんど1位、2位を占めていることです。このような意味で、京大は広報活動が足りないとも考えられますが、それだけが原因でしょうか。それを私どもは考える必要があると思うのです。京大は1番、2番を競う大学であると皆さん思っておられると思いますし、私もそう希望します。しかし、現代の高校生からはこのように見られているということなのです。

そこで今日は、「京都大学の教育—これまでとこれから」というテーマでお話いたしますが、まずはこれまでの話をレビューしてみたいと思います。

我々は、高等教育、特に大学院教育に力を入れている大学ですから、大学院生の数について、日本の置かれた状況をまず考える必要があります。さらに、京都大学は国内でどのような立場か。それらを合わせますと、京都大学は世界の中ではどのような立場かということが分かると思います。量と質、両方の問題があると思いますが、ここでは量の問題をお話してみます。それぞれの国で 1,000 人当たり大学院へはどれだけ進学するのでしょうか。アメリカ合衆国は 9 名、イギリス・フランス・韓国は 6 名、それに対して我が国は 2 名しかいません。つまり、大学院進学率がまだまだ先進諸国の中では少ないということ、まず認識する必要があります。

次に、高等教育費伸び率について。今、財政難で大変なことが起こっています。OECD 諸国における 2005 年までの伸び率ですが、ポルトガル、スペイン、メキシコ、韓国、フランス、ギリシャという順番になっています。ずっと下位の方へ目を向けるとここにアメリカ、もうそろそろ日本かと思いますが、日本は全然出てきません。最後に現れて、しかもマイナス 2.5% です。このようなことをしているせいか、「失われた 15 年」と経済界では言われていますが、アメリカあるいは西欧諸国では、「日本は another decade も活性化できない国になるぞ」と批判されたようですね。これは高等教育への投資率の悪さにも大いに関係あると私は思っています。

そして、高等教育機関への公的財政支出はどれだけ少ないか。先日の新聞に最新のデータが出ましたが、2005 年のデータとほとんど変わっていません。OECD の平均値は 1.1% です。各国割合はいろいろですが、アメリカあたりがちょうど平均ぐらいでしょうか。日本は 0.4% で、OECD 諸国のうち、この 2005 年のデータでは最下位でした。今年出たデータも最下位だったように記憶していますが、もしかするとチリが OECD 諸国に加盟し一番後になったかもしれません。このような状況で、日本は公的財政支出が少ない国なのです。

言い換えると、家庭の支出が非常に大きくて、各家庭は、子どもに大きな影響を与えながら進学すべき大学を選んでいる環境下にあると理解できると思います。我々は今、国立大学協会を中心に、日本私立大学協会と協力して公的財政支出をもっと増やすようにと声をあげているところですが、急には伸びないでしょう。この状態が 15 年間、20 年間続いてきたわけです。ですから、よほど頑張らないといけない。その中でも京都大学はもっと頑張らなければならないと思います。

世界の情勢の中で日本の大学教育はどうなっているかについて、社会から見た大学教育を数例ご紹介します。大学人が見る大学教育ではなくて、社会からどう見られているか。参考意見として我々は真摯に受けとめるべきだと思います。社会との接点は、学生で言いますと就職活動です。これは就職活動の写真です。京都大学でもキャリアサポートセンターを中心に就職支援をしていますが、就職活動は、学生にとって大変重要なイベントです。しかしながら、教育現場では、就職活動で落ち着かない学生にどう対処するかというところがあります。

将来の一つの参考の姿として、中国では就活がどうなっているか。大変な勢いで競争しており、いい学生の奪い合いです。学生にしてみたら、いい企業へ就職するために、この写真のように会場が学生であふれかえる状態になっているのです。ですから、学生が、いかに大学で高い資質を身につけるか、社会で勝ち抜ける教育を身につけるかという観点で大学を見始める一つの象徴ではないかと思います。

社会から大学教育に対していろいろコメントがあります。直接の関係者の意見というわけではありませんが、参考にすべきではないかと思います。いろいろありますが、有名な本では『就活のバカヤロー』とか、総合科学技術会議の意見であるとか、あるいは関西経済同友会で出したものもあります。産業界、国、それから一般市民、評論家、教育に関心のある方など様々です。『就活のバカヤロー』の中では、このようなことが言われています。就活に行きますと、「私は納豆のように粘り強い人間です」と言えと指導されて、ほとんどの学生がそ

う言うそうです。それを企業側は「納豆学生」と呼ぶそうです。それから、「企業は教育のじゃまをするな」と言うわりに、就職実績をやたら気にする「崖っぷち大学」。これは京都大学のことではありません。また、営業のほうも、コンサルティング営業などと言いながら、学生にいろいろ言い寄って、少しでもいい学生をとろうとする「ブラック企業」。今や就活は、だまし合い、憎しみ合いの様相を呈している。嫌悪感と倦怠感が渦巻く茶番劇に成り下がっていると、この著者たちは言っています。これが京都大学の学生に当てはまるとは思いませんし、我々の教育に直接に当てはまりませんが、世間全体はこのような方向に進んでいるという批判が上がっています。

一方、いろいろな公的委員会に私も最近たくさん出席しますが、産業界からは、高度な専門学力だけでなく、社会力を持つ学生が必要だ、という声をよく聞きます。大学に対しては、研究を重視し過ぎて、教育のミッションがよく見えない、組織改革が進んでいない、大学の先生は口を開けると「お金をよこせ」としか言わないと、露骨に産業界の委員は声を上げます。もちろん私どもは大反論をするわけですが、このように言われているのも事実です。

教員個人レベルでは、学生の学力や学習意欲の低下に危機感を持っています。この教育シンポジウムは過去13回行われましたが、近年の数回を見ていると、最近入ってくる学生の学力が落ちたという危機感を多くの先生が持っています。産業界からは、そのような危機感を持っているのはわかるけれど、組織的取り組みは十分だろうか、いや不十分だというご意見があります。我々京都大学は、総合研究大学と称しており、研究ではすばらしい成果を上げていると自負していると思いますが、教育で使命を全うしているかと自問自答した時に、100%そうだと言える状況にあるかどうかを検証する必要があります。各学部は、それぞれの個性に合った特色ある教育をしてほしい。京都大学は総合大学で、いろんなところに特色がありますから、学部ごとに努力していただいていることは承知していますが、産業界からはこのような目で見られているのです。

次に、総合科学技術会議。これは、いろいろな美しい言葉がいつも並ぶところですが、教育の充実に向けた改革は、実行が加速される時期であるとされています。実行が加速される、これは、京都大学にとってもよく考えるべき問題だと思います。教育の「見える化」の推進は、各大学の責務である。教員の教育活動の充実・強化及びその努力・成果の適切な評価をすべきである。大学院修了者の質の保証をしっかりとやってほしい。こういったことが書かれています。また、第4期の科学技術基本計画策定のため基本政策専門調査会や専門調査会の下に置かれたWGが開かれており、私もこの夏休み期間中だけでも数回出ていますが、そこで同じような議論が出ています。「見える化」を実行してくださいという話です。「そのようなことは言われなくても、我々は実行していますよ」。大学の中からそのような声が多数上がることは、私の耳にも聞こえてきます。しかし、本当にそうだろうかということを私どもは考えるべき時期ではないかと思います。混沌とした教育の現状、最も重視すべきは、京都大学たる教育をどうするかということだろうと思うのです。

私ども京都大学の教員あるいは職員は、非常にレベルが高いと思っています。確かにすばらしい議論が過去に行われました。京都大学全学教育シンポジウムは、今回で14回目です。井村総長の時代から長尾総長、尾池総長の時代と受け継がれ、過去13回、毎回200名以上のご参加をいただいて、大変熱心な議論が行われています。議論された内容は、大変立派なレポートとしてあらわれています。議論そのものは非常に熱心に行われ、左手でレポートをこれだけ持っている写真がありますが、実は右手にも同じ量だけのレポートが、すでにこの大学にはたまっています。全部お読みになった方はほとんどおられないと思いますが、一度ご覧になっていただくと、大変すばらしいことが書いてあります。今日行われる議論も、おそらく過去にまったく行われなかったということはないと思います。そのようなものがこのレポートにあがっています。

議論のテーマ一覧を拾ってみますと、学生集団の変化、学生の質変化、京都大学における教育評価、理系から見て人文社会系はどうなるか、学部教育・大学院教育の自己点検・評価等々、立派なテーマで立派な内容のディスカッションが過去に行われています。このように、随分多くのことが語られ、多くのことが議論されま

した。自学自習、あるいは学部教育における研究所やセンターの参画のあり方等につきましても真剣に議論が行われました。

実際、このような議論を受けて、優れた取り組みがこの14年間に行われました。例えばポケットゼミという素晴らしいものができています。下の写真は、1つの教室の様子を示しています。また、KUINEP（国際教育プログラム）と教養共通教育検討部会を立ち上げました。それから、京都市内にはたくさんの大学がありますが、それらの大学と組んでの大学コンソーシアム京都の単位互換科目。これは残念ながら、京都大学の単位を取ろうという他大学の学生は多いですが、その逆は非常に少ないという現状があります。これは、ある意味では、大学の格差、違いを意識した結果かもしれません。さらに吉田南環境整備等々、すぐれた取り組みを、このシンポジウムの成果として、それを受けて大学が行ってまいりました。

それ以外に各学部でも素晴らしい取り組みがありまして、医療薬学ワークショップ（薬学研究科、薬学部）、マイコースプログラム（医学部）、1年次ゼミ（経済）、学生による学習計画制（法学部）、人間・環境学フォーラム（総人）、研究開発コロキウム（教育学部）、連携の取り組み（経営管理大学院、工学部）、フィールド重視（農学部）、学術雑誌閲覧室の設置（文学部）、他専攻の研究室セミナーへの参加奨励（理学部）等、各学部も教育に関しては次々と新しい取り組み、素晴らしい取り組みをしてきていただいています。

私が感じるのは、過去に両手に余るぐらい立派なレポートができていながらも関わらず外から京都大学はさきほど紹介したように見られているのはなぜだろうということです。国立大学法人化をしてから1期が終わり、2期に入りました。議論も、取り組みもしてきたつもりです。そして、この節目の今、こういった議論を踏まえて、総合科学技術会議が要求しているように新たな行動につなげる必要があります。今日のシンポジウムを契機に、実行力を示さなくてははいけません。先人たちの努力に応え、現役の学生のことを考え、未来の京都大学、未来の学生のために、研究はそれぞれのモチベーションで非常に高い水準を維持したまま進行しておりますが、教育のためにもいま実行すべきではないかと思います。

この京都の地、叡山に最澄は天台宗を開きましたが、当時、教育は大学寮並びに寺院で行われていました。寺院の1つが比叡山であったわけですが、最澄は、学問というのは「聞、思、修」の智慧の3段階があると言っています。聞慧、聞いて智慧をつける。思慧、よく考えて智慧をつける。そして修、実行すべきである、行動を起こすべきである。この「聞、思、修」の3段階が教育の上で最も重要だと彼は言っています。

「聞」というのは、一方的に知識を伝える、いわゆる「知の伝承」に相当する部分です。「思」は、行動に移す前に自分の頭の中でよく考える段階です。これは京都大学は非常に得意で、研究成果も上がっています。「修」というのは、研究成果という観点では実行に移していると思いますが、新しい人材を次々と社会に、それも素晴らしい人材を送り出すという気概が、システムとしてまだ不十分ではないかと私の目には映っています。

これから、2つほど今日ご紹介したいと思います。高等教育研究開発推進機構では、共通教育のあり方について随分と検討していただいております。これについては、これから議論がありますので省略させていただきますが、実は総長室に設置した京都大学未来戦略検討チームで「リベラルアーツ・教養教育と大学入試制度の将来像」を検討いただいております。それとリーディング大学院構想の2つをご紹介したいと思います。

まず、未来戦略検討チームとは何かでございます。ご存じのない方も多いかもしれませんが、昨年12月に京都大学の未来戦略策定に必要な長期的課題について、40歳代を中心に若手中堅教員・職員が議論する場として、未来戦略検討チームを総長室に設置いたしました。各部局に声をかけまして、自分たちの大学の将来をつくる担い手となる40代、50代前半の方々に集まっていただいて、それぞれ自由に議論してくださいという検討チームでした。我々の準備したテーマをもとに、課題設定から中身に至るまで、そのような中堅の先生方の意向で進めていただきました。

1番目のテーマは大学のグローバル化。国際競争が非常に激しくなっています。京都大学は国際的に高い地位を保ってまいりましたが、それは主として研究の面です。グローバル化といいますのは、留学生の移動、教

員の移動が猛烈な勢いで進んでおりますので、教育は非常に重要だと思います。2番目が教養教育のあり方、3番目が入試制度、4番目がキャンパス配置、5番目が教職員の人材育成、6番目が外部戦略といったテーマに絞って、毎月2回程度の会議に集まっていただきました。各グループ平均6名程度、教員も職員も入っていただいて、混合チームで議論をしていただきました。本日は、その中で教育シンポジウムに関係しそうな教養教育と入試制度についてお話をしたいと思います。

まず、教養教育（リベラルアーツ）チームが検討した結果について私は報告を受けていますが、その中身を少し整理したものを簡単なレポートにまとめてみました。

本学で教養科目を受けた学生は、過去、現在、未来を、また地域、日本、世界を自由自在に架橋しながら、強靱な思考を続けられる知的体力を養うことが必要だと彼らはレポートしてきました。書いてある内容は、非常にもっともな事柄ですよ。もう少し具体的には、京大の教養教育については、基本理念の明示と内外への浸透を図る必要があるということです。この「内外」の「外」は、冒頭のアンケートに大いに関係があると思います。

2番目が、全共科目に最低必要水準単位を設定し、教養教育の品質保証をすべきである。つまり、最低必要水準単位についての考え方はこれから議論しなければなりません、自分の好きなものを選んで、それで終わりということでは十分ではない。このような分野ではこれだけの水準の教養を身につけてくださいと、ブロック分けして考えるということが議論されたようです。

また、奨学金については、奨学金がなければ大学で勉学を続けられない方々が確かにおられますので、これは充実させるべきであると報告されました。昨年も、学内予算を7,000万円ほど追加し、1億円をつぎ込んで強化を図ったところ。それ以外に顕彰も必要ではないかというご意見が出てまいりました。つまり、よく頑張った学生に対して、「頑張ったね」とちょっと肩を押してやり、「さらに頑張れ」と言うことが必要ではないかというお話でした。

その次に、2年次編入試験の創設ということが書かれてありました。これは議論をまだまだ要します。現在、3回生の編入試験を多くの学部がやっておられます。それから、転学部の場合には、入学試験の成績が、移り先の入学試験の成績の最低点をクリアしなければだめだという資格の厳しい審査があり、なかなか移りにくいという問題があります。では、大学に入ってから大いに勉強した人で、入学試験の成績は本意ながら失敗して悪かった人は移れないというのは問題ではないかということが議論されたようです。そこでご提案は、2年次に編入試験をつくってはどうかということでした。1回生でよく勉強して、よく考えて、自分の進路を見きわめて2年生で編入できるような制度、3回生の編入試験と転学部を合わせたような新しい制度として考えてはどうかというご提案でありました。

1・2年次の大学寮を設置する。いわゆるカレッジみたいなものを設置して、成績優秀者優先で学部横断型の全人教育システム、寮のようなものを考えたかどうかというご提案もございました。現在でも一部ありますが、メンター制度の創設を考えてはどうかということもありました。

一方、入試制度検討チームは、グループ内の共有意識の確認ということで、このようなことをいただいております。

国立大学協会や文部科学省などの調査並びに東北大学、九州大学、立命館のアジア太平洋大学、東京大学などの入試制度について勉強し、入試というものは、選抜のみが目的ではなく、本学の研究・教育の入口という意識が必要だろうという共有意識にチームが到達したと報告をいただいています。これは、まだごく少人数の方々のご意見ですから、大学全体の意見にはまだ全くなっていません。彼らが一生懸命考えてこのような共有意識を持ったということ、我々は意識したらいいということです。

入試制度に関する提案も出てまいりました。これは、もっと広い範囲の方々に非常に慎重に取り組むべき課題であることは、十分私も認識していますが、提案の中身を拝見しますと、センター試験や個別学力検査、い

わゆる大学でやっている入学試験の成績取り扱いの標準化をすべきではないかという意見がありました。入学試験の成績取り扱いは学部ごとに今は随分違ってきます。また、すべての学部に入學できる全学卒を新設してはどうかという提案もありました。これは、今は、学部、学部によっては学科あるいは学科グループで入学試験を実施していますが、そうではなくて、京都大学に入ってきて1年、2年の間に先を決めるという全学卒をつくってはどうかという内容です。

それから、定員を少し残して、浪人生再チャレンジ入試を9月にもう一度やってみたらどうかという提案もありました。つまり、浪人すると1年間は入試が受けられませんが、9月期入学という西洋の制度も参考にしながら、半年で再チャレンジできるパスを作ってみてはどうですかというものです。

また、入試情報の蓄積と制度改革、事後評価システムのために京都大学入学者選抜育成研究開発センターを設置してはどうかというご提案もございました。これは入選研でずっと議論を進めていただいておりますので、それとの関係がございしますが、委員会ではなくてセンターとして定常的にしっかり議論してはどうかという意見です。

ほかのチームの提言も含めて、これから15年先、少なくとも10年先の京都大学はどうあるべきかについて、今の57~58歳から65歳までの先生方ではなくて、一世代あるいは一世代半後の先生方に、自分たちの大学をどうしたいかを考えるという意味で未来検討を進めていただいたわけですので、出た結果をもう少し深く検討するための未来戦略企画室のような体制をつくって取り組んではどうかと私自身は考えています。これは何も決定していません。せっかくいろいろな提案、若い人たちの考えを聞かせていただくことができました。教育についても同様だろうと思っています。もちろんこれ以外にも、教育については全学共通教育システム委員会、学部長会議等々で議論をしていただいております。そういった全学的な意見をよく聞きながら、前向きに教育改革をすることが必要ではないかと思っています。

次に、リーディング大学院構想について述べたいと思います。民主党のマニフェストに「リーディング大学院構想」という言葉が出ています。概算要求が文部科学省から財務省へ出た時に、その中身が公開されました。実は、このリーディング大学院構想は、3つのカテゴリーに分けて公募される見込みです。これから民主党の概算要求のプロセスの中でコンテストが行われます。行政の仕分けのようなものです。どのように行われるかはまだ公開されていませんが、コンテストに対してリーディング大学院を挙げると文部科学省は決心をしています。第一のカテゴリーは文理融合の大学院をつくる。今までの大学院にはない取り組みをする大学院のプログラムです。これは今後変わっていくかもしれませんが、当時の説明では2件のプログラムを全国で採用します。第二のカテゴリーは、複合領域の新しい大学院のプログラムをつくる。これは、16件採用されると聞きました。さらに、オンリーワンのプログラムをつくるというのが2件採用されると聞きました。合計20個のプログラムを標準に、今後検討していきたいというご説明がありました。これは、コンテスト結果によっては変わると思います。

そこで、我が大学でもいろいろ出てくると思いますが、現在、第一カテゴリーに関して、私の指示で検討いただいているものがこのような構想です。知的基礎力と主体的経験を有する次世代リーダーの育成ということを考えてみてはどうか。つまり、大学院というのは、日本全国のあらゆる大学院を見ても、ほとんど「大学院〇〇研究科」になっています。本学には学舎、学堂というものもありますけれども、ほとんどは「〇〇研究科」になっています。

つまり、研究を主体とする大学院というイメージを我が国が採用したのです。研究は確かに進みました。ドクター・オブ・サイエンス、ドクター・オブ・エンジニアリング。そのような〇〇のドクターはたくさん出るようになりました。それにPh.Dという名前をつけていかどうかという議論を研究科長部会でやっていただきました。一応使いたければ使っていいよという結論を出していただいたのですが、外国で言うPh.Dとは少し中身が違うのです。フィロソフィー・オブ・ドクターズ。広く人文社会科学、自然科学を含めたような大学

院が日本の大学院のほとんどです。

したがって、文理融合型を謳われていると思いますが、私どもが今検討したいと思っていますのは、本質を押さえた文理融合、どのようにドメインを切るかということは何少議論を要すると思っておりますが、基本的には天地人、人文社会科学、自然科学、そして人、それを横断するような大学院が必要だろうということです。体験と知識と智慧、実行、行動力をすべて含めてマスターしていただけるような博士前期・後期の5年一貫制の大学院です。

重要なことは、このような人たちを教育するのは、大変コストと時間がかかるということです。丁寧な育成をしないとイケません。したがって、学生の主体性をとり入れたテーラーメイドのカリキュラムが設定できるようにしてはどうか。もちろん複数の外国語をマスターすることによる国際的人材の育成。したがって、講義は少なくとも国際語で行う。それから、海外武者修行ということも考えています。1年間は海外で必ず大学もしくは企業もしくは官庁で経験を積んでくる。企業、研究独法、省庁、自治体等の講師派遣による産官学の一体協力指導体制も視野に入るかもしれません。

今までの大学院と違って、研究にあまりに重点を置きすぎて広い素養、教養が身につかないで出ていった欠点を補うような、幅広い知識と行動力を持つ、先ほど申しましたように、「聞、思、修」の「修」までできるような、即戦力として社会のリーダーとなれるような人たちを育てる大学院をつくってはどうかと考えているところです。基礎知識はすでに学部で得ておりますから、もう少し掘り下げたものではありませんが、研究を2年間程度集中して行い、あとは非常に幅広い知識を勉強していくということで、スパイラルにそれぞれの科目をマスターしていただき、最終的には、日本社会が今必要としている人材として、社会の隅々へ遍くこのような人材を輩出できるようなものをつくるべきではないでしょうか。

「対話を根幹として自学自習を促し、卓越した知の継承と創造的精神の涵養に努め、地球社会の調和ある共存に寄与する」「優れた研究者と高度な専門能力を持つ人材を育成する」これは、私どもの大学のミッションです。言葉は非常に美しいですが、なかなか高度の専門能力、そして幅広い高度な教養を両方持たせる努力は、言うは易く、行うは難しい問題です。対話、自学自習、そして地球社会、創造的精神、高度の専門能力、こういったミッションに掲げられている言葉をどのように実現するかを考えた上で、新しい仕組みを今の仕組みに加えて京都大学として持つことが適切ではないかと考えているところです。

教育については、過去に非常にたくさんの理念を検討していただき、各分野の理念に従って、学部単位、あるいは全学単位でいろいろカリキュラムの取り組みをしていただきました。にもかかわらず、京都大学の教育に対する評価は、外から見るとよく見えていないと言われております。産業界からは、京大生は国立大学の卒業生の中で最も英語能力がないと見られています。この場合の英語は、たぶんオーラル・プレゼンテーションの話、あるいは交渉力の話だと思っておりますが、そのように言われています。その話が回り回って、高校生や高等学校の先生からもお聞きします。ですから、本日のシンポジウムはそうだと思いますが、分野横断型で全学で真剣に議論していただき、実行に移す時ではないかと思っております。

この片手に持ち切れないレポートを見てもわかるように、すばらしくいい理念を議論してきていただきました。しかし理念だけではものは動きません。実行できるような具体的な話に取り組みないと、大学群全体の中での京都大学の相対地位は必ず後退する、あるいは後退しているという認識を持つべきです。教員も職員も一緒になって、このようなことを強化していく必要があると私は痛切に感じています。

教育は大学の根幹です。教養課程で下地が形成されます。そして、それぞれの分野には大事な理念と学問があります。それを横串に共有して学び合い、本学独自の立体的なカリキュラムをどうつくるか。議論するだけではなくて行動もするステップとして、本日のシンポジウムをとらえていただければありがたいと思っております。学生だけでなく、我々スタッフ同士でも、対話と自学自習の精神で、協働による創造の楽しみの共有を図れる京都大学であってほしいと思っております。

最後に、『大学ランキング 2010』を紹介します。掲載されているさまざまなランキングのうち、800 人ぐ
らいの学長からの評価ランキングで、朝日新聞出版社の今年版です。研究分野では京大が 152 票をいただきま
して、2位の東京大学 94 票とかなりかけ離れて高い評価をいただきました。これは学長評価ですから、正し
くないこともあるかと思いますが、私学も含めて多くの学長の評価です。総合でも京都大学は、このおかげで
かなり上に行っていますが、教育では金沢工業大学がダントツでよいので、総合でも 2位となっています。

注意してほしいのは、今日のテーマの教育なのです。京大は 23 位です。上のほうには私学がずらっと並ん
でいますが、国立大学では愛媛とか筑波とか名古屋とか東京大学は、20 位以内にあります。しかし、京大は欄
外です。このように学長から見られています。正しいかどうかはわかりません。しかし、高校生からもぐっと
下位に見られているのです。一体だれが高いところに認めてくれるでしょうか。我々ですね。我々は、そう思
ってやってきたのです。議論も理念も非常に高い結果が出ています。しかし、外から見た結果はまだこのよ
うな段階にとどまっています。だからこそいような改革を今後進める必要があると私は思っています。

あまり内容のない話だったかもしれませんが、中身はこれから詰めていただけたらと思っていますので、教養、
専門、大学院教育の改革を実行に移す時期に来ていることを認識していただければありがたいと思います。あ
りがとうございました。

(拍 手)

第14回京都大学全学教育シンポジウム
～京都大学の直面する教育課題について～

京都大学の『教育』

～これまでとこれから～

平成22年9月10日
京都大学総長 松本 紘

関東 高校生から見た大学イメージ

進学ブランド力調査2010(株式会社リクルー)

有名である	学生の学力が高い	教養が身につく	活気がある感じがする	周囲の人からの評判がよい
1 早稲田大学	1 東京大学	1 東京大学	1 早稲田大学	1 慶応義塾大学
2 慶応義塾大学	2 慶応義塾大学	2 慶応義塾大学	2 慶応義塾大学	2 東京大学
3 東京大学	3 早稲田大学	3 上智大学	3 明治大学	3 早稲田大学
4 明治大学	4 京都大学	4 早稲田大学	4 青山学院大学	4 一橋大学
5 明治大学	5 一橋大学	5 一橋大学	5 立教大学	5 立教大学
6 中央大学	6 上智大学	6 京都大学	6 東京大学	6 青山学院大学
7 法政大学	7 立教大学	7 立教大学	7 上智大学	7 明治大学
8 立教大学	8 お茶の水女子	8 青山学院大学	8 日本大学	8 上智大学
9 上智大学	8 明治大学	9 明治大学	9 法政大学	9 京都大学
10 京都大学	10 東京理科大学	10 東京外国語	10 京都大学	10 中央大学

まあ、関東では第二集団なのはしかたないだろう...

関西 高校生から見た大学イメージ

進学ブランド力調査2010(株式会社リクルー)

有名である	学生の学力が高い	教養が身につく	活気がある感じがする	周囲の人からの評判がよい
1 早稲田大学	1 東京大学	1 東京大学	1 早稲田大学	1 神戸大学
2 同志社大学	2 早稲田大学	2 早稲田大学	2 関西大学	2 早稲田大学
3 神戸大学	3 京都大学	3 京都大学	3 関西学院大学	3 東京大学
4 東京大学	4 神戸大学	4 神戸大学	4 同志社大学	4 京都大学
5 関西大学	5 同志社大学	5 大阪大学	5 立命館大学	5 同志社大学
6 近畿大学	6 大阪大学	5 立命館大学	6 近畿大学	6 関西学院大学
7 立命館大学	7 立命館大学	7 慶応義塾大学	7 東京大学	7 立命館大学
8 京都大学	8 慶応義塾大学	7 同志社大学	8 京都大学	8 関西大学
9 関西学院大学	9 大阪市立大学	9 関西学院大学	9 慶応義塾大学	9 慶応義塾大学
10 大阪大学	10 関西学院大学	10 大阪府立大学	10 龍谷大学	10 大阪大学

....!?

大学ランキング2010「学長からの評価ランキング」

(週刊朝日進学MOOK 朝日新聞出版)

総合	研究分野	教育分野
1 京都大 160	1 京都大 152	1 金沢工業大 132
2 金沢工業大 136	2 東京大 94	2 国際基督教大 110
3 国際基督教大 114	3 名古屋大 78	3 立命館大 49
4 東京大 104	4 東北大 55	4 桜美林大 32
5 名古屋大 89	5 大阪大 54	5 早稲田大 31
6 慶応義塾大 71	6 慶応義塾大 52	6 同志社大 26
7 立命館大 69	7 東京工業大 39	7 国際教養大 21
8 早稲田大 68	8 早稲田大 37	8 同志社大 21
9 東北大 62	9 九州大 23	9 慶応義塾大 19
10 大阪大 61	10 立命館大 20	10 玉川大 19
11 東京工業大 43	11 筑波大 14	11 立命館アジア太平洋大 18
12 桜美林大 32	12 神戸大 12	12 愛媛大 16
13 同志社大 31	13 東京農工大 11	13 立教大 16
14 筑波大 28	14 一橋大 7	14 筑波大 14
15 九州大 27	15 北海道大 7	15 広島大 13
16 愛媛大 22	16 愛媛大 6	16 名古屋大 11
17 関西国際大 22	17 同志社大 5	17 上智大 11
18 国際教養大 21	18 岡山大 4	18 東京大 10
19 玉川大 21	19 熊本大 4	19 山口大 10
20 立命館アジア太平洋大 20	20 広島大 4	20 北九州大 10
21 広島大 17	21 山形大 4	21 岡山大 9
22 立教大 16	22 大阪市立大 4	22 金沢大 9
23 龍谷大 15	23 駿河国立大 4	23 岐阜大 8

京大23位

第14回京都大学全学教育シンポジウム
～京都大学の直面する教育課題について～

京都大学の『教育』

～これまでとこれから～

平成22年9月10日
京都大学総長 松本 紘

問題 人口1千人当たりの大学院生数【国際比較】

日本は何名でしょうか?

9名 9名 9名 6名 2名

出典: 出典:教育指標の国際比較(H21)

問題 高等教育費伸び率(自国通貨ベース)

日本は何%でしょうか?

1999-2005

2.5%

出典: 国立大学協会資料

問題 高等教育機関への公的財政支出の対GDP比較

日本は何%でしょうか?

2005

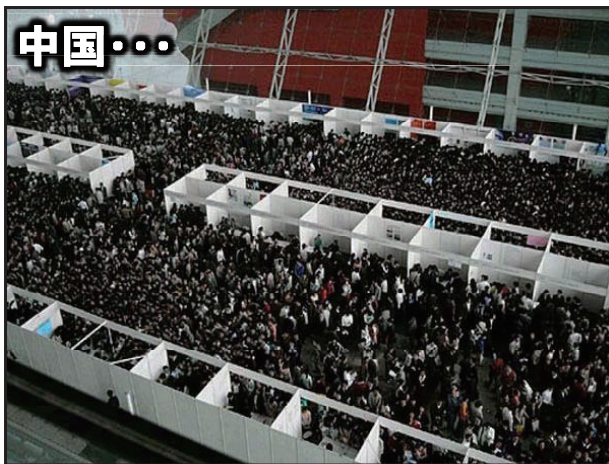
0.4%

出典: OECD, Education at a Glance 2008



そのような世界情勢の中 日本の大学教育は？

社会からみた大学教育について



中国...



この混沌とした現状、最も重視すべきは、
「京都大学たる教育」



では、**これまで**どんな議論をしてきたか？



就活合同説明会

社会から見た大学教育 教例

「私は納豆のようにねばり強い人間です」と、決まり文句を連呼する「納豆学生」。「企業は教育の邪魔をするな」と叫ぶわりに、就職実績をやたらと気にする「座つぶし大学」、営業のことを「コンサルティング営業」と言い換えてまで人材を獲得しようとする「ブラック企業」—企業と社会の未来をつくる行為—「学生個人が未来に向けて大きな一歩を踏み出す行為」であったはずの就職活動は、いまや騙し合い、借み合いの様相を呈し、嫌悪感と倦怠感が満ちる茶番劇に成り下がった。さて、いったい誰が悪いのか。
(『就活のバカヤロー—企業・大学・学生が演じる茶番劇』石渡頼司 大沢仁善 光文社新書378 より)

- 産業界が求めているものは、高度な専門学力だけでなく「社会力」。大学に対しては「**研究を重視しすぎミッションが見えない**」、「**組織改革が進んでいない**」など、強い危機感をもっている。
- 教員個人レベルでは、学生の学力や学習意欲の低下に危機感を持っているものの、**組織的取り組みは不十分**
- 大学は**教育機関**としての使命を全うすべき
- 各大学・学部は、それぞれの個性にあった特色ある教育を行うべき
(『社会が求める大学の人材輩出戦略～まずは学部教授会の改革から～』平成21年7月 社団法人関西経済同友会 退学改革推進委員会 より)

- 教育の充実に向けた改革は、「**実行が加速される時**」
- 教育の「**見える化**」の推進は、各大学の責務
- 教員の教育活動の充実強化及びその**努力、成果の適切な評価**
- 大学院修了者の「**質の保証**」システムと**達成度評価等の公表**
(『将来の産業界を支える科学技術系大学院生のための教育改革—大学院教育の「見える化」による改革の推進—』平成22年1月27日 総合科学技術会議 基本政策専門調査会 より)

京都大学全学教育シンポジウム

学士課程教育を再考する—第11期中期目標・中期計画の実現に向けて—

過去13回! 毎回200名以上!


議論テーマ 一覧

- 全学共通科目をめぐって
- 一般教養科目の内容
- 学生集団の変化**
- 学生の質の変化**
- 教育上の難しい点
- 教養教育とは何か?
- 少人数セミナーについて
- 理系科の教養科目と基礎科目で何をどのように教育するのか?
- 外国語教育に何をもとめるか?
- 京都大学における教育評価**
- 文系から見た全学共通科目の現状
- 理系からみた人文・社会・外国語教育のありかた**
- 学生による教育評価
- ファカルティ・ディベロップメントのあり方
- 教育の達成度の評価—京都大学卒業とは何か?
- 教育のミニマムリクワイアメントをどう考えるか
- 学力塾の広がりについてどう対応するか
- 研究評価をどう考えるか
- 学部教育・大学院教育の自己点検・評価に向けて**
- 研究所・センターの教育参加に向けて—教育は権利か?義務か?—**
- 理系教育における6年一貫教育

実際の優れた取り組み例

- ポケットゼミ
- 国際教育プログラム (KUINEP)
- 教養・共通教育検討部会
- 大学コンソーシアム京都 単位互換科目
- 吉田南環境整備

医療薬学ワークショップ(薬) マイコプログラム(医)
 一年次ゼミ(経済) 学生による学修計画制(法)
 人間・環境学フォーラム(総人) 研究開発コロキウム(教育)
 連携の取り組み「経営管理大学院」(工)
 フィールド重視(農) 学術雑誌閲覧室設置(文)
 他専攻の研究室セミナー等への参加奨励(理)



議論もしてきた! 取り組みもしてきた!
 そして、独法化からの節目の今、
**踏まえたところでの議論に期待
 そうして新たな行動につなげたい!**
 それが先人たちの努力に応えること、現役学生のため、未来の学生のため

第14回京都大学全学教育シンポジウム
 ～京都大学の直面する教育課題について～

京都大学の『教育』

～ これまでと **これから** ～

取り組み紹介

- 京都大学未来戦略検討チーム (教養教育と入試)
- リーディング大学院構想

未来戦略検討チーム

09年12月京都大学の未来戦略策定に必要な長期的課題について40代を中心とした若手教員が議論する「未来戦略検討チーム」を設置

- ①大学のグローバル化
- ②教養教育
- ③キャンパス配置
- ④入試制度
- ⑤教職員の人材育成
- ⑥外部戦略

・毎月2回程度の会議
 ・各グループ6名程度
 ・教員、職員混合

教養教育・リベラルアーツ教育チーム

グループ内共有意識の確認
 「本学で教養科目をうけた学生は、過去・現在・未来を、また地域・日本・世界を自由自在に架橋しながら強靱な思考を続けられる知的体力を養う」等

本学の目指すべき教養教育にむけた提言*

- 京大教養教育についての基本理念の明示と内外への浸透
- 全共科目に最低必要水準単位を設定し教養教育の品質保証
- 奨学金や顕彰の拡充
- 2年次編入試験の創設
- 1, 2年次の大学寮を設置 (成績優秀者優先)
- メンター制度の創設 など

入試制度検討チーム

グループ内共有意識の確認
 国立大学協会、文科省、東北大、九州大、立命アシア太平洋、東京大学などの入試制度を調査。入試は選抜のみの目的ではなく、本学の研究教育の「入り口」という意識が重要。

本学の入試制度に関する提案*

- センター試験や個別学力検査の成績取り扱い標準化を
- すべての学部に入学できる「全学卒」の新設
- 定員を少し残して浪人生再チャレンジ入試を設けて9月開催
- 入試情報の蓄積と制度改革事後評価システムのための入学者選抜育成研究開発センター(仮称)の設置

他チームの提言も含め、今後「未来戦略企画室」のような体制で提言実践にむけた本格的取り組みを! (“報告書仕事”からの脱却)

第14回京都大学全学教育シンポジウム
 ～京都大学の直面する教育課題について～

京都大学の『教育』

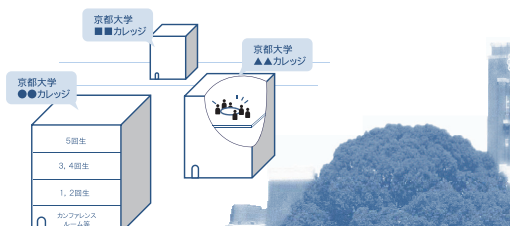
～ これまでと **これから** ～

取り組み紹介

- 京都大学未来戦略検討チーム (教養教育と入試)
- リーディング大学院構想

リーディング大学院構想

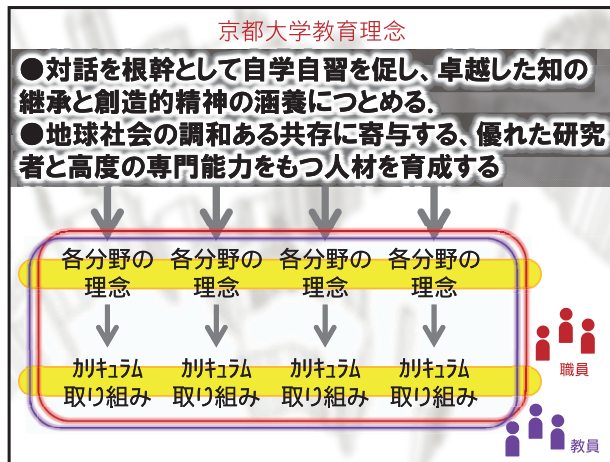
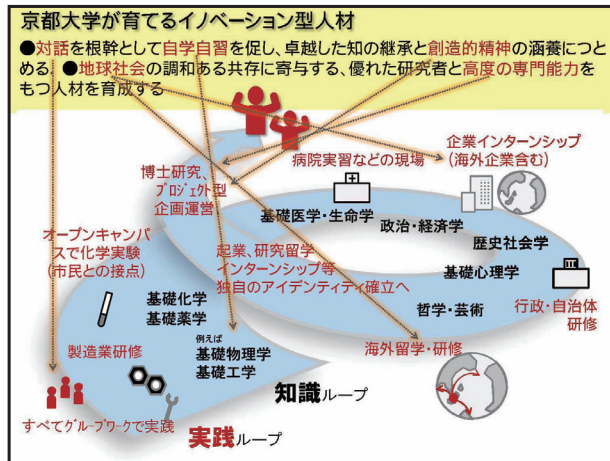
日本版大学院カレッジ(学寮)の創設:
京都大学リーディング大学院構想
 「知的基礎力」と「主体的経験」を有する次世代リーダの育成



- 本質をおさえた**文理融合**:3つの学問ドメイン設定
- 博士前期後期の**5年一貫** 全寮制
- オーダーメイド**のカリキュラム設定
- 複数外国語マスター**による国際的人材の基礎力
- 海外武者修業**制度
- 企業・研究独法・省庁・自治体**からの講師派遣による**産官学一体協力指導体制**

	自然	社会	人
体験	天文台研修 登山合宿 海洋実習	行政・自治体研修 小中高出張授業 老人ホームボランティア	国内外 武者修行 病院実習 博物館実習
知識	物理、環境、化学 生物、地学	経済、政治、歴史 法学、組織学	工学、哲学、医学 文学、芸術
知恵	3つの人材評価軸 ●関(ゲーム) ●思(シンキング) ●修(アクション)		

傾聴・対話・ファンリテーション
問題の発見・仮説設定・計画・解決
主体性・他者の巻き込み・情報発信



教育は大学の根幹

京大らしさは教養課程で下地形成される。

そして、分野には分野の大事な理念と学問がある。
その大事な部分を**横串に共有**して学び合い、
本学独自の立体的なカリキュラムづくりにとどくむ。
その為に**今日のシンポジウム**がある。

学生らだけでなく、我々スタッフ同士でも
対話と自学自習の精神で協同による創造の楽しみの共有を

ご静聴、ありがとうございました 総長 松本 猛

5. 問題提起1

理事・副学長 西村 周三



私、理事、副学長に就任して4年半になります。最初は主に国際交流を中心にお仕事をさせていただきまして、最近2年は教育担当副学長の仕事をさせていただいており、今の総長のお話を針の筈に乗るような気持ちで聞いておりました。特に最初の話、それから最後の話、毎年ああいう評価がされているわけですが、ほとんど数年前から変わっておりません。今の総長のお話を聞かれて、皆さん、どのようにお感じになったでしょうか。

実は私、ほとんど同じようなことを申し上げますが、より具体的に、この後の分科会で議論していただく内容についてお話を申し上げたいと思っております。でも、率直に言って、今の総長のお話は遙か前を走っておられるなあという感じがして、後ろをはあはあ言いながら懸命に走るということだと思っ

ております。

総長もおっしゃいましたが、これから5つの分科会に分かれていただくのですが、一番大きなものは全学共通教育改革で、これはほとんど議論を尽くした、あるいは、尽くしていない話もちろんあるのですが、この大学は議論が好きで、ああでもない、こうでもないと言って、非常に細部まで議論します。例えば月曜から金曜の5日間の4コマないし5コマでそれを皆実現できるかどうかの技術的な話とか、そのようなことの議論をするのですが、なかなか実際の改革には結びついていないのが現状だと思います。

この5つについて、ある種のキャッチコピーをつくりました。この後、一つ一つについてお話を申し上げたいと思っておりますが、全共改革に関しては、もう実行あるのみと考えております。

国際化も、実は実行あるのみと考えておりますが、これは外の風が今どのようになっているかということを確認する必要があると思うので、ちょっと補足させていただきます。

それから、初年次教育についてです。この後すぐに総長のお話を受けて申し上げますが、子どもたちの質が間違いなく変わってきています。

少人数教育については、総論に関しては、皆さん、本当に賛成をしていただきます。非常にご熱心にいろいろな議論をしていただきます。野田先生をはじめ、さまざまな具体的なアイデアが出るのですが、残念ながら各論になるといろいろな問題が生じてくる。私は、さまざまなモデルをこれから開発していく必要があるのではないかと思います。

最後の学生の就学支援ですが、実はこの5つの項目の中で上の4つは、大体私と思いを共にする先生方がたくさんおられて、私の就任後2年でも、すごく様子が変わってきていると実感しております。ですから、この後、私はすごく期待しております。上の4つについては、先ほどの最初の評価、最後の評価が数年後にドラスティックに変わることが期待できると考えておりますが、学生の就学支援に関して言うと、もっと大きく、これは総長の前でもあえて申し上げますが、教務系職員だけではなくて、今この大学全体で職員と教員の連携の強化をもっとしないと、いろんな仕事が職員に回ってきて、「ほかでやってください」という押し付け合いをする現状がございます。このもとには、職員の力をもっともっと引き出すという発想がないと感じておりますので、この5つについて申し上げたいと思っております。

その前に、今、総長がおっしゃった話で、子ども、昨年からかなり精力的に全国を回って入試説明会をやっております。ただし、私一人ではなくて、理事補の南川先生、高見先生、副学長補佐の葎阪先生、入選研の木南先生、さらに遠藤農学部長、小森工学部長等にもいろんなお出ましをいただいて、合計40回程度やりました。私も20回程度、この直前まで回ってきたので、大変申し訳ないですが、このスライド、総長のスライドと比べるとあまりきれいではありません。1カ月8回の土日のうち、5回はそのようなイベントに行っておりますので、1カ月3回ぐらいしか休みがないので、本当に用意ができません。

今、総長がおっしゃった一番のポイントは、関東地区、あるいは首都圏です。一番大きな反応は、首都圏です。幸い品川キャンパスができましたので、そのようなところ、あるいは代々木ゼミナール等に呼ばれて、高校の先生方とお話をする機会を持っております。

先に申しておきますが、この2年で子どもの大学入試のあり方、あるいは高大接続、高等学校との関係は、大きく変わってきておりますので、おそらく最初の評価は、これから目に見えて変わるのではないかと自信を持っています。

今日は、実はとても嫌なことを申す予定でおります。今までのいろんな場でのご発言を、個人の名前は出しませんが、このようなことをおっしゃった方がいるという事例を挙げて申し上げます。私は、2年前、入選研で、その前に予備校あるいは高等学校の校長先生の意見を聞いて、「このように言っている人がいますよ」と言った時に、ある先生が、「そんな高校の校長や予備校の声に惑わされることはない。私たちがターゲットとするのは受験生、高校生なんだ」という話をされました。これは正論です。正論ですが、高等学校の現場は大きく変わっています。要するに、志望校の選択は、本人が自分の力で決める度合いは明らかに低下しています。むしろ高等学校の教員や予備校の影響力がどんどん高まってきています。もちろん私は、それがいいことだと思っておりません。

総長の冒頭の紹介でわかるように、関東地区に対しては京都大学の認知度が大変低いです。行って言われることは、「どうしてこのようなことを今までやってくれなかったのか。今日の話聞いて京都大学をぜひ進路指導で勧めたい」という先生方が、後でぞろぞろと来られます。「一度もこのような話は聞いたことがなかった」という話をされます。今後も、組織的に、高大連携の一環として、大学の研究だけではなくて教育の現状についても知らせる努力が必要かと思っております。

それと同時に、大変深刻な問題は、子どもの大学の学部別学力試験科目設定の問題点であります。先ほどの二大構想の報告に、入試における全学での標準的な評価の仕方という抽象的な表現があったので、ちょっとわかりにくかったかもしれませんが、例えば文系の学部で、センター試験のどの科目を取ってもよろしいかというこの決め方が違います。あるいは、これは非常に議論のあるところだと思いますが、医学部では、例えば物理、化学を個別で受ける時、センターでは生物もちゃんと取っておいてくださいということになっています。それはそれで1つの考え方として、全学でやるのだったらいいのです。しかし、多くの場で聞くことは、京都大学に行くかどうかを決めてから学部を考える学生のほうが、学部に行くかどうかを決めてから京都大学を決める学生よりも遥かに多いのです。ですから、今の京都大学が学部ごとに違う、しかもこれはちょっと頭が痛い問題ですが、毎年のように変わるといえるのは、受験生をちゃんと指導できないことになります。

特に東京で感じることは、昔から京都大学が好きな子が少数います。そのような子は全然関係ありませんが、大部分の学生は、高等学校の先生や場合によっては予備校の指導を受けて、それから決定するわけです。そうすると、ころころ変わるといえることも、勉強できないではないかという話が頻繁に言われます。そのような意味で、入試制度を全学的に見直したいと思っております。京都大学のコミュニティーというのは、他の学部と一緒にいるからこそ値打ちがある、ということを再認識する必要があるのではないのでしょうか。

先ほどの入選研の話ですが、全学で全学をどうするという議論を十分にはしません。学部の試験のやり方の情報交換会という傾向がある。どうして2年でそれを変えることができなかつたのかと言われると、本当に忸怩た

る思いがあり、先ほどの総長の指摘は針の筈に乗っているような気がいたしておりますが、そのようなものが現状です。

未来戦略では、いろんな大学の入試制度の検討をされました。さらに先だって、総長について私ども10人ぐらいで北大へ調査に行きました。北大の総合入試は、大体4割ぐらいの学生が入学時点では学部を決めない。事前の勉強会では、北海道は今、皆東京へ行くので、大変だからやむなくやったとか、うちは京都大学を第一志望とする学生が来るけど、北大は第一志望の学生がだんだん来なくなっているからとか、いろんな偏見を持って行きましたが、相当懸命な教育改革の努力をされていました。例えば、キャップ制というのが1つ議論の対象になります。これは、分科会の1番での議論と思っておりますが、キャップ制についても大変工夫をしております。特に教養教育と入試制度を連動して考える必要があると痛切に感じてまいりました。

実は、今言ったことの中で、関東地区、首都圏の高等学校に京都大学の存在を知らせるということは、必須です。どうしてかと言うと、高等学校の学生の数は、首都圏で今48.7%です。要するに、日本中の子どもたちの半分近くは首都圏に住んでいるということです。逆に、それ以外から集めていると、ローカルな大学と思われる。これも大変おもしろいことで、そのような話を関西でやると、関西の高等学校の先生方は、「そんな余計なことをしないでくれ」といいます。なぜかわかりますか。実は京大の入試のやり方が出題の内容も含めて非常に特異なので、関西地区の進学校の先生方は、その傾向に習熟しておられるから、関東地区の人がこれから勉強して来られたら困ると思われるという可能性があります。これは余談ですが、やっぱり少しでも優秀な学生を集めようとするれば、関東地区、首都圏に京大の存在をいろんな形で説明していくことが大事ではないでしょうか。

やや個人的な話ですが、終わった後、京都大学を志望する生徒が来た時、多くの子どもたちは、「実はお父さんが京大出身です」と言います。お父さんが京大出身で、京大はとてもよかったですので、僕はお父さんと相談した上、京都大学に行くという方が随分いる。これは、別に統計的に有意な差があるとは言いませんが、そのような印象を持ちますので、そのようなことも含めていろんなことを考えていく必要があると思っております。

別に東大をライバル視する必要はないのですが、東大にしようか、京大にしようかと迷っている学生に、京都大学の魅力を伝えることが大事です。もちろん、中も変えないと、魅力も高まりませんがということですが。

先ほどの全学共通教育については、総長のお話に大きく2つのものが出ております。そのようなものを参考にさせていただきながら、具体的に実行に移す話をぜひご議論願いたいと思っております。特に、今、とても悲しいことは、全学共通教育についての各学部の意識の違いが大変大きいと思います。例えば3回生に来た時に、どのような子どもたちがほしいかという考え方だけではなくて、京都大学全体がどうあるべきかという議論も是非していただきたいと思います。今、このことに関しては、このような委員会がございます。これは全体を統括する委員会ですが、もうちょっと部会に細分化したものを集約して、広い観点から議論をしようという話も進んでいるので、ぜひそのようなあたりもお考えいただきたいと思います。

次は、国際化です。これについては3点だけお話しします。当然、たくさんその場で問題提起があると思しますので、私はいちいち説明しませんが、日本全体の内向き志向をどのように変えていくかが大きな課題となると思います。これはちょっと古いデータですが、OECDが取ったデータで、世界中では大学院に行く学生の数は、130万人から270万人、倍以上になっています。もっとこの後も増えて、今、300万人近くになっていますが、まだ正確なデータはありません。どんどん増えているのに、日本全体としては留学する学生の数が減っています。

これも問題発言を1つさせていただきます。国際化の動きに対しては、法学部が一番守旧派です。法学部は、「そんなことを一生懸命やる必要はない」とおっしゃいます。実は先だってアメリカのジョージア大学の方が来られて議論をしたら、「うちも一緒ですよ」と。世界中の傾向だそうです。国際化を展開しようということに対して、そんなに熱心ではないのは法学部だそうです。

それは当然であって、そのような学部もあることを想定しながら、全体をどのようにやっていくかを考える必要があります。例えばKUINEPのやり方をどうするかということとも関係していて、英語の講義をもっと増

やせ、法学部が増やさないのはけしからんというようなやり方は、私は違っていたと思っています。

それから、実は今、G30 でいろんなことを発しておりますが、ポストG30 をどうするかということも非常に大事な問題なので、このようなこともぜひ議論していただきたいと思います。

次に、初年次教育についてですが、これは、22 年度に試行を開始いたしました。具体的に言うと、オリエンテーションでメンタルヘルスとコンプライアンスについて話をしました。それから総長と私が入学式の時にお話をしました。また、新入生特別セミナーを土曜日に実施しました。オリエンテーションのコンプライアンスで法学部の酒巻先生がおっしゃったことは大変感動的でした。大学に入った時点で、知能あるいは知力という点では京都大学に入ったことは1つの資格証明をしたことになるが、それは人間として立派であることを証明したわけではないという話は、大変感銘的でありました。私どもは、そのような姿勢で、特に1回生に対しては、人間として成長させるためにはどうしたらよいかということを考える必要があり、それでいろいろ企画したのがこのような内容です。

時間の関係で省略しますが、総長の話、私の話、それからカウンセリングセンターの青木先生が新入生ガイダンスでお話しされたメンタルヘルスも、その前の年と比べて、「早期にいらっしゃい」という言い方をしたら、相談に来る方が激増したそうです。これは大変なことではありますが、いいことではないかと思っております。そんなに大したこともないのに来たという人もいるかもしれませんが、そのことがとても重要だと私は思っております。

次に、少人数教育についてですが、これは、さっき言ったように総論賛成で、皆さん、この意義は大変認めておられます。ただし、これに関しては、例えば総合人間学部でやっておられる少人数教育とどのような形でドッキングすることができるか、できないかというような議論もぜひやっていただきたいと考えています。それから、先ほど国際化のところのご紹介をしましたが、まもなくワーキングの報告を出します。KU INEP 科目をぜひとも全学共通科目の中に位置づけていただきたいという報告書を、私の私的な諮問としてつくったワーキングでまもなくいただきますので、そこでそのような議論をしていただきたいのと同時に、KU INEP もこの少人数教育の中で位置づけていただきたいと考えています。

それから、KU INEP に関しては、法学部の先生はそれほど積極的ではありません。それを非難すること自体が、私は違うと思います。むしろ法学部の先生は、先ほど言ったようなコンプライアンスについて、法学部の学生だけではなくて全学生に対して、この市民社会に生きる上で法を守ることがいかに大切であるか、その法体系は、例えば慣習的なものとどのような関係になっているかといったようなことも、ぜひ分担をしていただいて、全学で教育する体制をつくっていただけないかと思っております。

加えて、この少人数教育についても、何かの形で教科書あるいはマニュアルをつくることを通して、個人の先生方が10人程度の学生を指導する際に、今言った法の遵守の必要性は何かということ、折に触れ、課外でも結構ですからご指導をいただくことができないかと考えております。

最後に、学生の就学支援でございます。本学に、学生部委員会というのがございます。もう1つ、教育制度委員会というのもございます。学生部委員会においては、最近、さまざまな不祥事があるので、そのようなことも含めて、全学で学部からお集まりいただいた先生方が、就学支援という観点からいろいろなことをやっております。特に実際の学業の教育とは少し違う話をやっているわけですね。

例えば理学部は、ちょっと前から、1年目に取る単位が非常に少ない学生をしっかりとチェックしていただく体制ができていて聞いております。その報告を学生部委員会で受けました。ところが、その報告を各学生部委員の先生方が学部を持ち帰って、それぞれの学部でそのようなことが可能かどうか、ぜひ検討をお願いしたいと私が申したにもかかわらず、それから数カ月後に、某学部長は、「そんな話は聞いていない」とおっしゃいました。これが今、京都大学の一番大きなネックです。いろんな委員会に先生方は来られる、そこでは結構真剣な議論をするのです。ところが、それを学部を持ち帰って教授会の中で反映されません。総長も冒頭ちらっとおっしゃい

ましたが、これがこの大学の一番ネックだと思っております。それが先生方全員の意識の中に入っていないのです。

しかし、先ほどから言っている不祥事の話も含めて、これもわずかのデータなので統計的な有意差は証明できませんが、不祥事を起こす学生と1回生、2回生における放置状態が完全に関係しているという実感を、さまざまな事例で私は感じております。そのようなことも含めて、学生は、今、大変未熟になっています。そのような未熟になっている学生を、1回生、2回生の間にしっかり教育することの意義がとても大きいと私は思っております。残念ながら、これに関しては職員の方も批判させてください。そのような話を私がして、学生部あるいは教育推進部で学部に対しいろんな指示をしてくださいと。「大学院の入試にミスがありました。そのことに関してはこのように考えてほしい」という指示をした。「わかりました」と言って学生部や教育推進部から学部へ指示があります。しかし、だれが読んでもその指示は、私がこんなに熱をこめて思っているということが伝わるような文書ではありません。こんなのを読んでも、「また理事が責任転嫁するために言っとるな」というようなことが多すぎるのです。もちろん私は、責任転嫁するつもりはありません。いつも謝っています。何かあったら、ちゃんと謝ります。しかし、そのような問題ではないだろうと思います。

そのような問題ではなくて、一人一人の学生が道に迷わないようにいろんな形でやっていく、一部のところではなかなか気がつかないことを、ほかのところで気がついて、いいことをやっているのだったら、それをまねしましょうよという雰囲気、そのようなことがちゃんと伝わる雰囲気が大事ではないでしょうか。私は、冗談で、そのような通知を流す時に、下に職員個人の意見を書いてくれと依頼します。「今回、理事がこのようにことを言っているけど、本当はこのようなことは意味がないと思う」とか、「これは理事が泣きそうな顔をして言っているので、皆さんぜひ聞いてやってください」とか、そのようなことを書いたらどうだと言ったのですが、だれも書いてくれません。でも、そのようなコミュニケーションの仕方がとても大事だと思います。

どうしてそれが職員によってなされないか、1つは、もちろん職員の熱意の問題であります。しかし、もう1つは、教員のほうに問題があります。私は、国際部と学生部と教育推進部を担当して、正直言って、その3つの部署の職員は、今までいくつかのミスをしてきました。しかし、私は、何とかそれをカバーしようとこれまでやってきました。だって、そうしないと、私一人で全てやらないといけないことになるので、職員にやってもらわないと困るからです。職員にやってもらうためには、上に立つ者は、職員のミスがあったらそれをカバーするという気持ちでやらないとダメです。

今の若い職員は、非常にポテンシャルには有能です。しかし、この大学は、小さなミスを重箱の隅をほじくるように「なんだ、これ」と言う先生が多すぎます。これを今日の問題提起の最後として申し上げます。教職協働。教員は我慢しよう。これは言い過ぎると問題発言ですが、先生方は、議論になれておられる方が多くて、議論したら勝ちます。教員は我慢して、「お願い、職員の方、これをやって。少々ミスしても、俺がカバーするから」と言ってお願いすることがとても大事だと思っております。最後の分科会では、そのような教職協働のあり方も議論をしていただくとありがたいと思います。逆に職員の方には、このようなことを申し上げて私の話としたいと思いますが、打たれ強くなってください。先生がひどいことを言っても、「はっはっはっ」と笑いながら、「次からは何とかしますから」と言って頑張ってください。以上です。

(拍手)

鈴木 ありがとうございました。

それでは、続きまして山本機構長にお話をお願いしたいと思います。

問題提起

第14回京都大学全学教育シンポジウム

2010. 9. 10

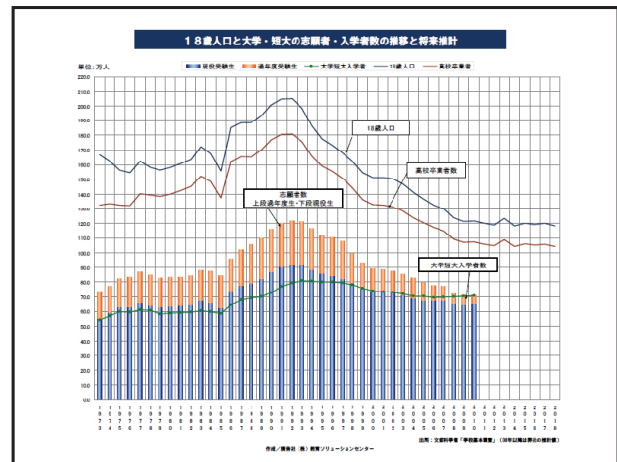
京都大学・理事・副学長（教育・学生担当）
西村周三

今回のシンポのテーマと提起したい議論

- 全学共通教育
改革の機は熟して来た！
- 教育の国際化
日本社会の内向き現象
- 初年次教育
入学者の質が変わってきた
- 少人数教育
総論賛成各論反対→さまざまなモデルの開発へ
- 学生の就学支援
学部と学生部との連携強化：職員力を信じよう！

シンポテーマの議論の前に

- 入試制度のあり方について
受験者の質は変わっていないか？
- 中高の教育のゆがみに対応するために
- 他大学の動向
- 都道府県別大学進学者数の予測
- 学部別 学力試験科目設定の限界
- 入学後の教養教育と入試制度とは連動
(例：北海道大学の総合入試、late specialization の是非)



近畿圏以外への広報活動？

- 特に首都圏から大きな反響
- その他：福井、岐阜、石川
- そこまでしなくても？

全学共通教育の今後の展開について

- 京都大学の学士課程における教養・共通教育の理念について
- 未来構想戦略チームWG報告
- 部局（学部）間の利害を超えて
- 議論を尽くすときから、実行へ

全学共通教育に関する委員会

- 全学共通教育システム委員会
- 教養教育専門委員会
- 基礎教育専門委員会
- 外国語教育専門委員会
- 情報教育専門委員会
- A群科目部会
- B群科目部会
- D群科目部会
- 少人数教育部会
- 数学部会
- 物理学部会
- 化学部会
- 生物学部会
- 地学部会
- 英語部会
- 初修外国語部会

全学共通教育委員会

第5条 京都大学の全学共通教育に関する重要事項について審議するため、全学共通教育委員会(以下「委員会」という。)を置く。

第6条 委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。

- (1) 教育担当の理事
- (2) 高等教育研究開発推進機構長
- (3) 高等教育研究開発推進機構副機構長
- (4) 各研究科長
- (5) 教育推進部長
- (6) その他総長が必要と認める者 若干名

教育の国際化

- 日本全体の内向き志向
- ポスト G30を考える
- KUINEP再考 WG報告

海外で高等教育を受ける学生数



出所: OECD, *Education at a Glance*, 2006,
計算方法は同書p. 287参照、資料は、OECD and UNESCO Institute for
Statistics (for data on non-OECD countries and up to 1995).

10

初年次教育

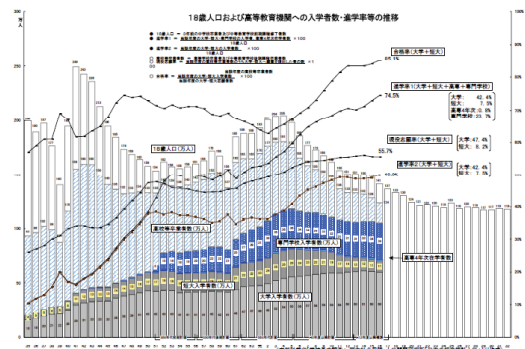
- 22年度に試行開始
- 教育制度委員会の下にWGを設置
(座長：高見理事補)

初年次教育 22年度試行実績

日時	議題	担当	
4月2日(金)、5日(月)6日(火)	14:40~15:10	メンタルヘルス	青木カウンセリングセンター長
	15:10~15:40	コンプライアンス	酒巻法学研究科教授
4月7日(水)	10:00~10:30		松本総長
	10:30~11:00		西村理事
4月17日(土)	13:00~13:30	京都大学の歴史を知ろう	西山准教授(文書館)
	13:30~14:00	人権について	前平教育学研究科教授
	14:00~14:30	キャンパスにおけるカートの美態	大和谷大阪大学教授
	14:30~15:00	自然科学学習について	山本高等教育研究開発機構長
	15:00~15:30	世界の大学で何が起きているか	森国際交流機構長

少人数教育について

- ポケゼミ
- その他の少人数教育との連携
- KUINEPも



学生の就学支援について

- 学部と学生部と連携強化
- 職員の能力を信用すべきではないか？

むすび

- 教職協同には議論が不可欠
- 教員は我慢の議論を
- 職員は遠慮を捨て、打たれ強くなれ！

6. 問題提起2

高等教育研究開発推進機構長 山本行男



おはようございます。教育推進部と高等教育研究開発推進機構が中心になりまして、このシンポジウムを毎年企画しているのですが、このようにたくさんの方に参加いただき、非常にありがとうございます。

今、総長の松本先生の基調講演、それから理事の西村先生から問題提起がありまして、それをここで繰り返すことはいたしません。私は、この後行われます分科会のお世話をさせていただいた先生方のお名前を紹介して、そのお礼を申し上げるということで、問題提起に代えさせていただきます。

まず、全学共通教育に関しましては、人間・環境学研究科の内田先生と私が準備いたしました。2番目の教育の国際化につきましては、国際交流機構の森先生と工学研究科の松原先生にお願いしました。松原先生はシステム委員会では外国語教育専門委員長に就いていただいています。初年次教育につきましては、理事補の高見先生と高等教育研究開発推進センターの小山田先生にお願いしました。少人数教育につきましては、農学部の野田先生にお願いしました。少人数教育に関して長年ご努力をいただき、委員会のとりまとめをいただいています。それと、同じく高等教育研究開発推進センターの田中先生にお願いしました。学生の就学支援につきましては、高等教育研究開発推進機構の加藤先生、それと先ほどの理事のお話にもありましたように、職員の方との協力ということで、多くの職員の方との協働でご準備いただきましたが、とりわけ教育企画課の田平さんにはお世話になったということです。

ここで議論を深めていただきまして、何かを決めるというわけではありませんが、先ほど松本先生の話にもありましたように、ここでの議論から実行に移す時期に来ているということです。そのような議論になりますように、ここでの議論が全学の委員会であります教育制度委員会とかシステム委員会での議論の弾みとなるように進めていただきたいと思います。分科会での積極的な議論をよろしくお願いします。

(拍手)

鈴木 これをもちまして、全体での会議、午前中の部は終了したいと思います。

7. 特別講演「全学向初修物理学の教育上のねらい」

高等教育研究開発推進機構教授 舟橋春彦

シラバスの【テーマと目的】には「物理科学関連分野を将来の専門としないであろう者を対象とし、自然科学の典型である物理学の考え方・方法・特徴の理解を目的とする。主に力学を題材に、適時実験を交えながら講じる。予想を出し合い実験で確かめていく過程を積み上げ、科学を体験的に学ぶとともに、自然科学の系統的な数理論理的認識に触れる。」として開講しました。〈教養としての物理〉と云うことになるでしょう。

当日は講演資料として、月刊誌『たのしい授業』（仮説社）2010年6月号掲載の記事「予想と実験を繰り返す楽しみが分かりました。」の別刷をお配りしました。この記録にも仮説社のご好意により収録をお許し頂きました、併せてご覧下さい。

導入部の工夫と様子は別刷をご覧下さい。その一部は「特別〈講義〉」としてご来聴の先生方にもおたのしみ頂きました。文理いろいろの分野の先生方も、京大生と同じくらい、の予想分布でした（笑）。誰にもアタリマエだったり、誰にもチンプンカンプンな問題では、考える気になれない。だいたいどこでもみんなの予想が分かる（考えるに値する問題）を発見・厳選してきた「仮説実験授業」の研究成果に基づいています。予想を立て・みんなと理由を交換し・そして実験をする、というプロセスから、〈自分の脳ミソが人の脳ミソから刺激を受けること〉への感想が作文にチラホラ見えています。



〈日常の中の物理現象・物理現象の中の数学的法則性〉に注目して貰う導入部に続けては、力学台車を使って〈定量的実験〉ということにも触れる講義をしています。この回は、京大広報誌『紅萌』19号（2011年4月）に「潜入講義録」が掲載される予定です。

定量的実験で運動方程式を導入した後、バネ振り子の単振動で〈微分方程式とその解〉と云う〈ものの観方〉にも接してもらいます。文系の方はたいてい数Ⅲをやっていないので、三角関数や合成関数の微分の導入が必要になります。私家版「数学履修状況調査」を実施しながら後期はさらに導入方法の修正をしました。

前期の最終的な感想を踏まえ、仮想的に後輩に向けた「（非）履修のススメ」の作文を、期末試験後にKULASISを通じて任意提出を求めたところ多数の回答を寄せて貰えました。掲載依頼に快諾してくれた数通は『共通教育通信』（Vol. 16 Spring 2011）でご覧頂けます。〈教養としての物理〉ということを受け取って貰えた、と手応えを感じています。

この講義は前後期リピート開講しています。いつでもご参観を歓迎します。そのとき、文系の方はいつでも自由に受講者として質問して下さい結構です。ただし、物理系の方はリアルタイムのコメントは一切御無用です、終わってから何でも伺います。専門の立場から聞いていると、学生さんの理由の交換・討論はトンチンカンなことたびたびあるのですが、それでもいいのです。トンチンカンでも予想を立てた自分の内容を相手に伝えようとしている、その行為の後に正しく学ぶ。そんなことですので、トンチンカンな議論をしても、物理系の方はガマン（笑）して居て下さい。

科学の発展に欠かせない〈自由な発言の尊重〉を通じて、〈新しいことを築くときには当然間違える〉ということの体得・〈間違いを恥じる、という間違い〉の克服、にもこの講義を役立てて欲しいと思っています。

この講義担当自体以外に、共通教育で共有・活用できる演示実験装置の開発・提供ということで貢献出来るといいなあ、とも思い描いています。

全学向初修物理学 数学履修状況調査

2010.11.26 舟橋春彦

残りの講義の進め方の調整の参考にします。御協力願います。(成績評価とは無縁です。)

- 設問1. 前期の数学の講義について、 1. 合格, 2. 不合格, 3. 取っていない
 設問2. 後期の数学の講義について、 1. 履修中, 2. ドロップアウト, 3. 取っていない
 設問3. 来年度の数学の履修について、 1. 登録予定, 2. 未定, 3. 取らない

以上の3つについては、該当する科目名を空欄に記入して下さい。

設問4. 三角関数の公式

$$\sin(A \pm B) = \sin A \cos B \pm \cos A \sin B$$

設問5. 合成関数の微分 $\frac{d}{dx} f(u(x)) = \frac{du}{dx} \frac{d}{du} f(u)$

設問6. 積の微分 $(g \cdot h)' = g' \cdot h + g \cdot h'$

設問7. 近似式 $(1+x)^\alpha \cong 1 + \alpha x \quad (x \ll 1)$

設問8. 近似式 $\sin x \cong x \quad (x \ll 1)$

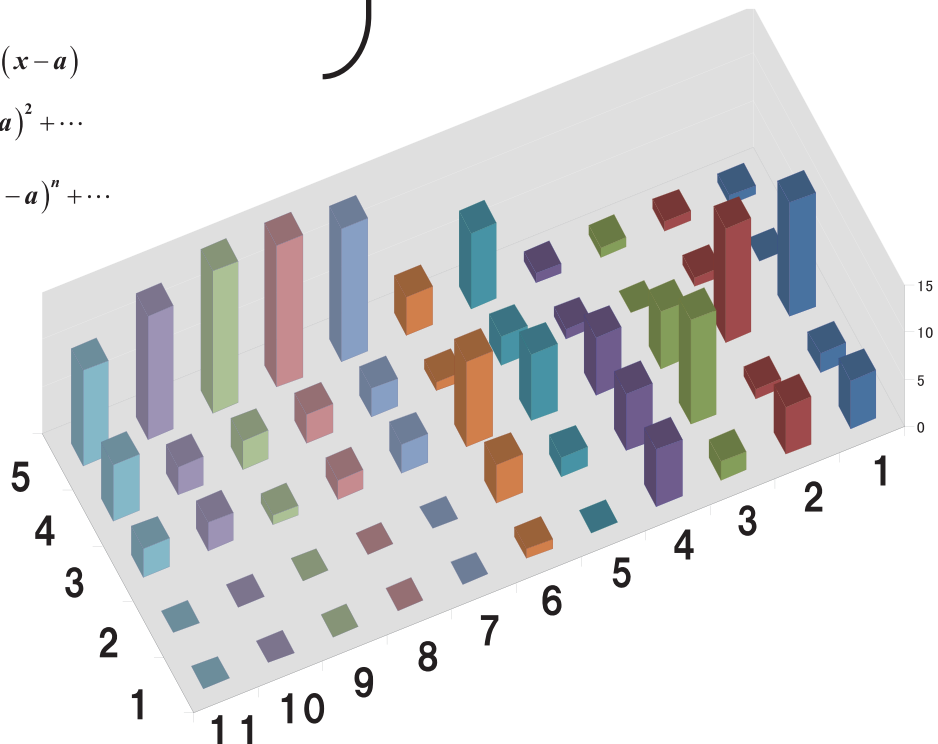
設問9. 近似式 $\cos x \cong 1 - \frac{x^2}{2} \quad (x \ll 1)$

設問10. 全微分 $dU(x, y) = \frac{\partial U}{\partial x} dx + \frac{\partial U}{\partial y} dy$

設問11. テイラー展開

$$f(x) = f(a) + f'(a)(x-a) + \frac{1}{2} f''(a)(x-a)^2 + \dots + \frac{1}{n!} f^{(n)}(a)(x-a)^n + \dots$$

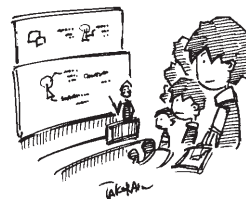
1. 自力で導出 OK
2. 頑張れば導出できるかも…
3. 導出は無理、使うのは OK
4. 使うのも不自由
5. ナンノコッチャ



予想と実験を繰り返す 楽しみが分かりました。

○大学生も歓迎の〈見れども見えず〉《落下運動の世界》

舟橋春彦 京都大学・高等教育研究開発推進機構



私はこの春、大阪電気通信大学の数理科学研究センター（工学部基礎理工学科兼務）から、京都大学・高等教育研究開発推進機構に移りました。

私は、コテコテの「物理専門」の出身です。物理の研究も続けていますが、最近、いろいろ縁に恵まれて、仮説実験授業を熱心にするようになりました。

初めて仮説実験授業をしたのは、ほぼ3年前、兵庫の宗教夫さんが当時いらした高校で、特別非常勤講師としてやらせていただいた《落下運動の世界》でした。

これまで、出張講義や科学講座で、小中学生・高校生または親子（孫）対象に授業書をやったり、大学の講義でもしています。

●文系学生に受けてもらいたい

京都大学では、いわゆる「一般教養の先生」で、全学共通教育科目の物理の担当です（大阪電通大の理科教育法にも出講します）。

私が今回、仮説実験授業をしようと思っているのは、「全学向初修物理学」という講義で、全学部生向けですが、その履修案内には、〈理工系の学生お断り〉と掲げています。長年、「特に文科系の学生にこそ、〈無味乾燥な物理〉という偏見を払拭し〈科学的批判精神を涵養する物理〉に触れてもらいたい」とうそぶいてきたので、念願叶っての講義の形です。

高校で、物理を履修してこなかった学生さんを前提に開講するので、物理専門家をもっとも大切

にしたくなる〈体系性〉をあえて諦めて、〈科学入門教育〉として《授業書》から始める講義を試みました。実質的には文系学部と農学部
の学生計約 1300 名が対象になり、結局 39 名（約 3%）もの学生さんが履修登録してくれました。

●結果は大好評！

授業書は、まずはじめに〈見れども見えず〉（『最初の授業カタログ』仮説社）をやってそのあと《落下運動の世界》（とりあえず第 2 部まで）をやりました。

私は《落下運動の世界》の作成者、出口陽正さん（兵庫・中学校）が書かれた「授業書のねらい」に全く共感しています。

物理を初めて学ぶならどんな学年でも必ず感動できる内容だと確信はしていましたが、〈優等生の仮説実験授業に対する拒否反応〉がどうであるか、総スカンを喰う恐れは持っていました。我ながら勇氣のある行為だったと思います。

結果は大好評で、受講生のみならずさんからはたくさんのうれしい感想をいただきました。

〈見れども見えず〉から始めたことは良かったと思いますが、いきなり《落下運動の世界》から始めても受け入れてもらえたかも知れません。回を追うごとに積極的な発言者が増えてきています。

では、学生さんからの感想をたくさん載せた 3 回分の「講義通信」を抜粋して紹介します。

第 1 回 見れども見えず（'10.4.9）

初回の出席者は、合計 41 名（うち 1 回生 36 名）、ほぼ当初の目論見の 50 名に迫る幸先の良いスタートが切れました。

初回の出席者計 41 名の内訳

法学部 15 人	文学部 12	農学部 5	経済部 4	総合人間部 4	教育 1

この日は、初回のゴアイサツとして、〈見れども見えず〉という授業プランに沿って、「科学的認識とは？」ということ的刺激させてもらいました。

〈見れども見えず〉は、身近なことを問題にして、予想をたてて答えてもらうもので、科学的認識は「予想をたてて問いかけなけれ

ば身につかない」ということが分かる授業プランです。こんな問題を出しました。

〈見れども見えず〉

〔問題1〕月の満ち欠けによって、実際に見られる月はどれか？(図省略)

〔問題2〕アリの足は何本か？アリの体はいくつの部分に分かれているか。足はどこから出ているのか。以上のことに注意してアリの絵を描きなさい。

〔問題3〕家庭のコンセントの穴の長さは、左右で違いがあるか？

講義を受けた学生さんの評価は、

⑤とてもたのしかった 28人	④たのしかった 12人	③ふつう 1人
-------------------	----------------	------------

②つまらなかった, ①とてもつまらなかった, は0人。

と、とても好評でした。

これまで何度かこの授業プランを〈出会い〉の講義にやらせてもらっていますが、こんなに歓迎されたのは初めてです。この分布は私のこれまでのベストスコアです(大学生はあまり「5」をつけてくれません)。

受講後に感想を書いてもらいました。

第1回のレポート

・「今日の講義は？」

5-4-3-2-1

・この講義を履修登録しようと思った理由を聞かせてください。

・今日の講義の、感想・コメント・質問など(たのしかったこと、面白かったこと、印象に残ったこと、感動したこと、ヒラメイタこと、世界が広がったこと、誰かに教えたいと思ったことなど)聞かせてもらえるとうれしいです。

感想文からは、学生諸君の高い向学心と打てば響く反応がいくつも読み取れ、次回以降の講義準備の意欲を掻き立てられました。どうもありがとうございました。全部ご覧いただきたいところですが、初回の反応を次に少しだけ紹介します。

○理系で物理の好きな友人がいたが、無駄を排して本質に突き進もうとする考え方を持っていて、それが魅力的だったから。
舟橋▶「理由」を3つ挙げてくれたのですが、そのうちのひとつです。〈物理の身内〉としてう

れしいですね。

○物理なのでもっと公式とか覚える授業を想像していたので、いい意味で予想と違って面白かった。

▶予想されるべきは、「なので」でしょうか？ 普通はそうかなあ……。でも、この講義で、「物理」と「公式を覚える」が「なのに」で結ばれるようにしたいと思います。

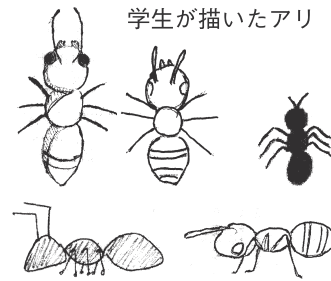
○今日の講義はとても楽しかったです。この講義を履修しようと思ったのは、高校のとき物理をやらなかったからです。私は身の回りの物事がどのような仕組みになっているのか説明することができません。物理学的な物の見方を少しでも身につけたいと思って講義に出てみました。

まさかアリの絵をかかされるとは思わなかったので、驚くと同時に、この講義なら理系嫌いの自分でもやっていけそうだと思います。この機会に物理の基礎をマスターしたいです。

そして、「見ている」けどちゃんと「見てない」ものは沢山あ

るんだなあ、と思いました。単なる物理の知識にとどまらず、多面的なものの見方も身につけそうです。

▶この講義で、身の回りの全てのことを説明するには至りませんが、《落下運動の世界》では「力学」の一点突破で「物理学的な物の見方」の獲得を目指します。



第2回《落下運動の世界》

第1部スタート (10.4.16)

第2回以降、《落下運動の世界》を始めました。例えばこんな問題をやりました。

〔問題2〕同じくらいの大きさのピンポン球とゴルフボールを同時に落とすことにしましょう。どちらが先につくと思いますか。実験は、背の高さくらいのところから落とすことにします。
ピンポン玉……2 g
ゴルフボール……50 g

予想

- ア. ゴルフボールが先につく。
- イ. ピンポン玉が先につく。
- ウ. ほとんど同時につく。

先ずは、落下運動の定性的な実験からガリレオの業績を称え、力学を学ぶ意義を感じてもらいます。追々定量的な話に深めていく予定です。

講義は、出題・結果の予想・理由の発表・意見（討論）・予想変更・実験、を繰り返しました。最初は皆さんちょっと慣れない様子で発言をためらっていましたが、すぐに活発な理由の発表が続いて、私は内心感激でした。

理由や意見を、講義中に全部は聞けなかったのでレポート用紙に書いて出してもらいました。またそのときに、任意で感想も聞かせてもらいました。抜粋してご紹介します。

○物理は面白い。こう思えるのは、高校での授業と違い、この授業が主体的に学べるからであろうと思います。この授業が少し遊び感覚で参加できることに、こ

んな楽しんで勉強してもいいのかな、という違和感を感じていたのですが、よくよく考えると、真面目に考え、真面目に議論しているこの授業は決して遊んでいるわけではないし、むしろ正しい学びの形なのだと思います。

物理の予習をしようかと思っ
ていましたが、授業がつまらなくなるので、復習だけにします。

(S.H. 文学部)

▶以前に、この形式の授業（仮説実験授業）を受けたことがありますか？ 一回でその真髄を見抜かれて驚いています。「むしろ正しい学びの形なのだ」、私もそういう思いでこの仮説実験授業の研究に参加しています。「予習」についても卓見です（後日談：受けたことは無いそうです）。

○この形の講義でおもしろいのは、自分と同じ選択肢を選んだ人が自分と違う過程でその答えに至っているということです。受験勉強との違いが鮮明で、とても楽しんで授業を受けていま

す。 (K.K. 法学部)

○今日の講義もおもしろかったです！ 議論すると色々な意見が出て素直に興味深かったです。同じ答えを予想した人でも、自分が全然考えてなかった理由で選んでいたりして、「物理学」的な面だけでなく刺激を受けました。

また、自分の予想したことが全然違っていたときはおどろきで、物理っておもしろそうだと思います。このような楽しい講義の形で物理に接することで、受験のためにやるのとは違う「素朴な楽しみ」を物理に見出していけそうです。

(M.W. 文)

○意見としては一つなのに、それを選んだ根拠が様々だったので面白かった。色々な状況設定をするのも、その人の個性（バックグラウンド）を見るようで楽しかった。「真理」というと硬派なのに、それを見出すための材料はとてもきらびやかだという印象を受けた。(M.K. 法)

▶「違う過程」「色々な意見」「根

拠が様々」の正否を問う実験もまたたのしんで下さい。

○実際に見たけど信じられないな（ピン球と鉄球の実験）と思うこともありました。物が落ちるってことだけでこんなにも盛り上がるものなんだなと思いました。(H.S. 法)

▶なんですねえ。無価値（価値中立）のご利益かも知れませんね。

○既成事実を一方向的に押しつけられるのではなく、自分なりの予想を立て、議論をしてから実験してみるというスタイルは新鮮なものであり、とても楽しかった。次週からの講義も楽しみである。(S.Y. 総合人間学部)

○日頃、考えないようなことを、考えて、試してみる、というのはとても面白かったです。

(H.R. 文)

○しっかりと予想と実験を繰り返す楽しみが分かりました。

(F.T. 農学部)

▶そうです！〈予想を立てると、見えてくる〉〈何をするにも仮説実験〉。

○高校の物理もこのようなスタイ

ルで最初行なって欲しかったなあ、と思いました（私は1時間目から物理の時間は寝る時間でした）。少し楽しくなってきました。計算ばかりでないのにとっても物理してます～感が出てきました。

（S.Y. 経済学部）

○早く高校物理のかっちりした問題がとけるようなスキルを伝授して欲しいです。（A.S.・文）

▶「高校物理」とは趣きは異なりますが、今後の「計算」もおたのしみに。

○予想をたてるのは難しいと思いました。はっきりと根拠を見つけるのは難しいです。

（S.E. 農）

▶「わからない」と言うのが謎解きの第一歩「なんとなく」も理由のうちです。どうぞ焦らず、先ず予想・実験をたのしんでください。

○皆がばんばん意見を出すので驚いた。留学生が京大生の発言のなさに驚愕するそうだが、彼らを一度この講義に招いてはどうだろう。天の邪鬼の僕は発言し

ませんが。今日からこの講義に参加しましたが、とても楽しかった。これからも宜しく願いします。（Y.N. 総）

▶〈言論の自由〉は、科学に不可欠なことです。〈発言しない自由もある〉と云うこともその一部です。また気が向いたら気楽に発言して下さい。

○ピンポン球をふうせんに例えたのは、なるほどと思ったのですが、実験結果はピンポン球とゴルフボールが落ちるのは同時であったので、ふうせんがゆっくり落ちるのはどうしてなのか気になりました。高校で習った物理や、この授業の説明で、重さの違うものが同時に落ちる仕組みは理解できるんですが、まだなんだかふに落ちないものがあります（笑）。来週の大規模実験が楽しみです。（F.I. 文）

▶みなさんにたくさん発言してもらったので、「大規模実験」は次回に持ち越しにしました。次回は吉田南1号館・地階ロビー集合です。おたのしみに！

第3回 吹抜けで落下実験！

(10.4.23)

引き続き《落下運動の世界》で
す。第1部最後の問題からです。

この回は、吉田南1号館・地階
ロビー集合で、〔問題4〕の「落
下実験」を建物の吹抜けを利用し
てやってみました。

〔問題4〕ピンポン玉とゴルフ
ボールとは、大きさが同じくら
いです。ピンポン玉の質量は約
2 g、ゴルフボールの質量は約
50 gです。ピンポン玉とゴルフ
ボールを2 mくらいの高さから
同時に落とすと、同じように速
くなって行って同時に床につき
ました。

それでは、学校の屋上など、
うんと高いところから落とした
らどうなると思いますか。

予想

ア. ゴルフボールの方が、ほん
んの少しかけ先につく。

イ. ゴルフボールの方が、かな
り先につく。

ウ. ピンポン玉の方が先につく。

エ. どちらも同時につく。

このクラスでは、第1部のここ
までの実験結果を理由に、「エ」
を予想する人が過半数で多数派で

した。なお、実験の様子は全学共
通教育のWebページのTOPICS
に紹介されました。

[http://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/
news.cgi?type=topics&row_
id=2341](http://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/news.cgi?type=topics&row_id=2341)

実験の後、講義室に戻って、第
1部の評価・感想を書いて貰いま
した。

たのしかった？

⑤とてもたのしかった 20人	④たのしかった 16人
-------------------	----------------

③ふつう、②つまらなかった、
①とてもつまらなかった、は0人。

ためになった？

⑤とても ためになった 20人	④ためになった 16人
-----------------------	----------------

③どちらともいえない、は1人。
②あまりになってない、①全然になってない、は0人。

続けてもいい？

⑤歓迎！ 26人	④続けても いい。9人
----------	----------------

③どちらでもいい、は1人。
②あまり気が進まない、①勘弁して欲しい、は0人。

いまのところ歓迎して貰えてい
るようですので、しばらくこのま
ま進めさせてもらいます。次ペー
ジにみなさんの「感想・コメント・

質問など」いくつか紹介します。

○いちばん少数派だった選択肢が正解で、つくづくマイノリティをないがしろにはいけないと感じました。正解した人たちはあらかじめ答えを知っていたのでしょうか……どのようにして答えにたどりついたのか、意見を聞きたいです。(以下略)

(A . A . 農)

○落下運動の実験では、自分の直感と実験結果があまり一致しなく、もやもやした感じがあったが、高いところから落とした実験では、ゴルフボールの方がずっと早く落ち、自分の感覚と合っていたのでスッキリできて良かった。物がどちらが早く落ちるかということについては、今まで真剣に考えたことがなく、感覚で捉えていたが、理由を具体的に考えたり、実験して体感することを通じて、今まで自分は「見れども見えず」であったことを痛感し、何気ない日常の現象にも、興味深いことがたくさんあるのではないかと

いうことを考えるきっかけとなり、非常に良かったと思う。最後のよな、少し大がかりな実験は、やはり楽しかった。

(A . O . 文)

▶その気で見ないとそう見えませんが、「何気ない日常の現象」は数学的法則に支配された物理現象で構成されています。「その見方・考え方に接してもらおう」という講義の狙いが成功しているようですね。

○物が落ちることについてこんなに深く考えたことはありませんでした！「リンゴを手からはなすと落ちる」ことになぜ？と思ったニュートンを尊敬です。これも見れども見えずですね！話し合いがアツくなればなるほど実験はスリリングで興味もわきます。球が同時に落ちる瞬間がグッときます。学校の教科書通りの物理よりもずっとわくわくで、時間があっという間にすぎます。これからもおもしろい実験を期待してます。

(N . T . 法)

○高校の物理とは違うけれど、「物

理をしています！」という雰囲気を楽しんでいます。皆で、わいわい意見を述べたり、実験の予想をする雰囲気が気に入っています。そして、予想をたてて、意見交換して、予想を変えたり、変えなかったり、という部分が、ためになっていると感じます。人の意見を聞いて、賛成したり、反対したりすることにたくさんの時間をさいて下さっているの、おのずと、何か発表しようと思うようになります。私が大学に入る前に想像していた「大学の学び」を感じられた点も楽しい所です。 (S.Y. 経)

- ▶いい「雰囲気」を感じてもらえているようでうれしいです。
- 各自で予想して、周りの人の意見を聞いて、それから実験をするというやり方は、人の意見を聞く点で、小中高でやってきた

理科の実験と違って、おもしろいと思いました。ただ僕は、実験の後に理論的にどうなっているかを、プリントを読むだけじゃなくて、よくある「授業」的な感じで説明してほしかったです。 (K.Y. 法)

- ▶そのお気持ちもわかります。今しばらくお付き合いください。

後期は、「〈仮説実験授業〉をたのしもう！」と銘打ったゼミも開講します。今度は理系文系が凡そ半々になるようにします。理系の学生諸君の反応を楽しみにしながら、理系も文系も楽しめる授業書の選定に迷っています。(2010.5)

謝辞：「通信」中の舟橋のコメントでは、宮地祐司編「〈たのしい科学入門〉の心得」(楽知んカレンダー2010)から多く引用させてもらっています。

仮説実験授業研究会編 **第Ⅲ期仮説実験授業研究9** 仮説社



授業書《落下運動の世界》全文と解説・授業記録(出口陽正・山田岳史)：自然現象が見事な数学的法則性に支配されていることを感動的に体験できる画期的な数学の授業書です。あの難しかったルート(√)の値が身近な数に思えてきます。

他に、日本刀の大量輸出のなぞ／板倉聖宣、行基の伝えた日本の人口と地図／板倉聖宣、などを収録。 税込2100円

8. パネルディスカッション



鈴木 それでは、ただいまから午後のパネルディスカッションを行いたいと存じます。5つの分科会それぞれでいろいろとご討議いただきました事柄につきまして、代表の先生にご報告いただき、それに質疑応答、そして総長そして西村理事を含めて全体での討議の時間というふうにさせていただこうと思います。時間は限られていますけれども、どうぞ皆さん、ゆっくりお楽しみいただければと存じます。

まず、第1分科会を代表しまして、人間・環境学研究科の内田賢徳教授にお願いしたいと思います。

内田 第1分科会を代表いたしまして、全学共通教育に関する議論のまとめをお話したいと存じます。

最初に、私たちの分科会では北海道大学の事例が紹介されました。北海道大学では、定員のすべてではありませんが、一部を共通の入学試験として、入ってきた学生を1年次の全学共通教育の成績に基づいて、2年次以降の各学部分属に振り分けるという画期的なやり方を取っているということが紹介されました。そこにおいては、全学共通教育の成績評価というものの全体の平準化が行われなければならないけれども、それはどのようにして可能であろうか、それは京都大学の全学共通教育の中ではどのように位置づけられるだろうかというようなところから話が始まりました。

改めて紹介するまでもありませんが、私どもの京都大学の全学共通教育は、科目の多様性ということをまずあげておりまして、学生がその中で、一部そうでないものもありますが、自由な選択をして、そして教養というものを培っていくというような、簡単に言えば自主的なやり方とってまいりました。

しかしながら、そのことにつきましては、近年、さまざま形で問題が提起されております。そこで言うところの「京大らしい教養を身につける」という理念のようなものですが、それはいったいどのようなものであろうか。「京大らしさ」というのはいったい何であるかというところ、おそらく今日ご参加の先生方お一人お一人が、「このようなものだ」というものをお持ちであろうかと思えます。しかし、「それはこのようなものだ」というふうにお話しなさることはあっても、では、京都大学として「京大らしさ」というものはこのようなものである」「京大らしい教養はこれである」というものを、はっきりと決めることはなかなか困難であろうと思うのです。私たちが漠然と抱いている理念であるけれども、それが一番根本にあるという、そのようなものであると位置づけられるかと思うのです。

それだけに、それを培う全学共通教育は、具体的にはどのような方法を取るのかということは、ずっとこの集會でも議論されてまいりました。

ひとつの見方は、従来のやり方を守っていくということでありまして。ところが、これまでのやり方だけに従ってまいりますと、さっき申しました京大らしさというものは、外からは極めて見にくい、わかりにくいものである。



内側では共通の理解がなんとなくあるのですが、では、外側から見てそれはどのようなものかということに対して、十分説明のできるような教育体制であるかということ、そこには問題があるだろう。そうした2つの観点は、私たちの討論の中では、主として現場で教育を担っている者と、そうした教育全体を包括する理事の方々の考え方との対立として現れました。

午後は、そのような2つの方向をつなぎあわせていく、つまりは京大らしさというものを守る全学共通教育を行いながら、それが十分に外に向かってアピールされるにはどうすればいいかというようなところに話は展開してまいりました。

私たちにとっての大きな悩みというのですか、共通の問題は、最近の学生は以前の学生のように自主的に自分を切り開いていく十分な能力に乏しいということです。したがって「選択をせよ」と言われると、ただ迷うだけであります。そのために1年2年のあいだにいくつもの単位をとりこぼして留年をする、そのような学習的に適応できない学生が近年増えてきているのではないかと感じます。それについては各学部でそれぞれさまざまな対策を取っておられることが紹介されました。えてしてそのような学生は、全学共通科目をたくさん登録しておいて、どれか1つは網にかかるだろうというようなやり方を取りがちなものですが、それはかえってマイナスであります。十分的を絞った登録をして合格するというのをさせるにはどうすればいいかということ、各学部できめ細かく教育を行っておられることが紹介されました。

ひとつのケースですと、毎年、半年、半年ごとの単位をどのように取ったかということ、教員がちゃんと把握をして、そのアフターケアをする。「次はどのようにしなさい」ということをきめ細かくやるというようなことが紹介されました。そのような努力というものが、全体として単位を取れなかった学生を少なくする、つまりは教育の実を上げていくことにつながるのであろうというような見通しが得られました。それを深めていけば、京都大学の教育というものが、大学教育の中で、朝、総長から紹介がありましたような低い地位に甘んじることもないのではないかとというような展望も得られるわけです。

ただ、それはそれといたしまして、科目全体をどのように配置して、それをどのように学習させるかというような問題につきましては、やはりいろいろな議論がありました。比較的共通したものを求められる、例えば理系の化学でありますとか物理学でありますとか、そういった科目においては、一つ一つの講義がバラバラであっては困るのではないか、何か共通したものが求められるのではないかとすることは、当事者たちのあいだでも考えられていて、ある程度の均質化は図られているのですけれども、やはり最終的にはそれぞれの時間をどのように運営するかということは、教員の個々に委ねられているケースが多いということが報告されました。中には、それを考えるまでもなく、まず、教員の削減等で時間数が減ってしまう、そのことをどうやって防ぐかというようなことが、それ以前の問題としてあるというようなことも指摘されました。

そこには、京大特有の画一化を好まない性格というものがあると思っておりますけれども、先ほども申しましたような現在の学生の一つの傾向、それは単に学力が低いというだけではなくて、京都大学の教育の中で、結局、何年間もかかって、どの段階でも、どのようにも、つかみきれない学生が増えてきているのではないかと。そのような学生も含めた形で京都大学の全学共通教育を考えるためには、もう少し工夫が必要なのではないかとというような意見も出されました。一方で、それを進めれば進めるほど、もう一方のある程度の均質化というものを考えますと、教育に必要な個性が阻害されるのではないかと懸念も語られました。

えてして学生が取りやすいのは簡単に単位が取れる科目で、どうやったらイメージに取れるかといった態度を防ぎながら、いい方向に履修をするように進めていくにはどうすればいいか。そこにはまだ大きな問題はあろうかと思えます。ただ、先ほど紹介しましたようなきめ細かい履修の指導をすることによって、単位の取れない学生を減らしていく、それが一つの大きな方向であるという共通の認識が得られたことは、一つの成果であったかと思えます。

(拍手)

鈴木 第1分科会の内田先生のご報告に関しまして、確認あるいはご質問等ございましたら、いかがでしょうか。それではあとの全体討議でまたご発言いただければと存じます。

続きまして、第2分科会を代表しまして、国際交流機構長の森純一教授からご報告をお願いしたいと思います。

森 第2分科会を代表いたしまして報告をさせていただきます。非常に多くの先生方が熱心な討論を行っていただきまして、多岐にわたる内容でございました。いくつかのポイントを取りましてご報告を申し上げたいと思います。

まず、分科会では四人の先生から報告がございました。京大生の留学志向、米国での国際教育の位置づけ、京大の全学共通教育における学術目的の英語教育の取り組み、最後に京大の学士教育における国際交流・海外留学促進の取り組みについて、より具体的な提言がございました。

これにつきまして3人の討論者の方にご議論をお願いいたしまして、そのあと全体討論に移りました。議論のポイントとしては4つぐらいあったと思います。最近言われております「海外に行かない学生」、これは学生に問題があるのかどうか。2番目としましては、それでは学生の海外体験をどう促進したらいいのか、カリキュラムに組み入れられるのか。3番目に自信をつける英語教育とは何か、大学の各学部、研究科の期待する英語力とは何だろうか、その増進策、そして最後により具体的なプログラムのアイデアといったようなことを議論いたしました。

4人の先生方から1枚ずつだけスライドをお借りしました。

これは最初にご発表になった河合先生のスライドですが、京都大学と浙江大学の両方の大学を比べてございます。3年毎に、河合先生を中心に国際交流センターのほうで全学の学部生・院生の意識調査をしております、留学を志向する学生と日常的な外国語能力、この場合は英語を指しておりますけれども、これを浙江大学での調査と比べたのです。京都大学でも浙江大学でも、英語ができるということ、語学ができるということが留学志向に非常に強い関係がある。河合レポートでは、しかし同時に「行かない理由」も検討されておまして、例えば研究や学習と両立がしにくい、あるいは大学の支援サービスがあまりよく知られていないといったようなことも出てまいりました。

それから次の渡部先生のご報告では、カリキュラムに国際教育を盛り込むことの重要性が最近米国では非常に認識をされており、アメリカン・カウンシル・オブ・エデュケーション（ACE）ではカリキュラムの国際化についてさまざまな研究、実践が行われているというご報告がありました。カリキュラムの国際化というのはどのようなことなのか。ここに書いてありますような文章で、「カリキュラムの中に一体化された国際化というものが必要である」ということをご報告になられました。特に多くの米国の大学、例えばハーバード大学などでは、自然科学の分野でできるだけ多くの学生を海外に出そうということがいわれています。米国全体でも百万人計画、米国の学部生の2人に1人ぐらいを海外に出そうといったようなことがあり、また、スタディ・アブロードが必修化されつつあるといったようなご報告がございました。

それから高橋先生の英語教育についてのご報告ですが、本学において行われている英語教育の力点、これの最近の状況についてご報告がありました。例えば留学に例を取れば、留学に必要とされる英語力、授業についてい



く力といったものを考える。その中で京大の英語の授業の特徴は、やはり English for General Academic Purposes、EGAPとおっしゃっていましたが、これに力点を置いております、単なる一般英語の延長ではないということでした。特に最近ではアカデミック・オーラル・プレゼンテーションですとか、アカデミック・リスニング関連のプロジェクトに力点を置かれつつあるといったようなご報告がありました。最近では学術のための単語集であるとかアカデミック・ライティングの教科書等を作られて、意欲的な取り組みが行われているといったご報告がございました。

続きましてより具体的なプロポーザルとして、西川先生から短期留学プロジェクトのご紹介がありました。左のほうでシドニー大学で行われます文系向けの異文化コミュニケーションを中心とする異文化プラス語学研修、右側のほうでニューサウスウェルズ大学で行われます理系の学生を対象とするサイエンス・コミュニケーターのコース、これは来年3月ぐらいに、いずれも今年度初めて学生に提供されるということで、これにつきましてのご説明と、また先生方のご意見をいただくといったことがございました。

これは大学外の単なる語学コースと違って、高等教育研究開発推進センターあるいは理系の各研究科の先生方のご意見を伺いながら作りあげられている、京大らしい短期留学ということですのでございます。これ以外に、中国に短期の学生をいかに送るか。今中国からは毎年交換留学生がやってまいりますが、日本人の学生はほとんど行っておりません。こういった局面を打開するにはどうしたらいいかというご説明がございました。

議論のポイントを先ほどの4点ぐらいに絞ってみますと、「海外に行かない学生」について、基本的な問いが行われました。「国際性とはそもそも何だろうか」といったようなことです。海外に出ることが日本の理解に再びつながってくるといったようなこと、文化を相対化できる、これが国際性ではないかというようなことが1つ語られましたし、逆に、疑問として、なぜ教育を国際化する必要があるのだろうか、それが学生にも届いていないし、我々自身十分にそこが理解できていない、議論されていないのではないか、それをもっと議論すべきだということもございました。

これにつきましては、産業界の期待、あるいは学生の期待といったようなことも議論されましたし、学生にモチベーションを与える、ある種のショックが必要だといったようなこと、あるいは大学全体として留学生を増やし国際化を進めるということ、これはランキングあるいは日本人学生に対するポジティブな影響、こういった面からも進めるべきだという議論が行われました。

より学生の海外体験を促進するのに、カリキュラムにどう組み入れていくか、これは大変大きなテーマでございまして、その中で少し抽象的ではありますが、学生のモチベーションをいかに与えるか。そのためには、例えば秋田にあります国際教養大学とか金沢工業大学の話も出ましたが、やはり我々とそれらの大学とは全く同じことはできないし、する必要もないわけで、京大方式の必要性を考えるべきではないか。アイデアとしては、例えば京大としての国際人認定制度を考えたらどうかという具体的なお提案までございました。

その中で、自学自習の必要性、これは英語のコマ数にしても、先ほど申し上げました国際教養大学のようなことはとてもできません。どうやって学生の自学自習を進めるのか。例えば物理的にはそのようなスペースを作ったらどうか、あるいは強いモチベーションを与えたらどうかといったような議論が出ていました。

自信をつける英語とは、大学の各学部・研究科の期待する英語力とはについての議論の中で、参加者からは、今まで英語教育の中で General Academic Purposes の取り組みが行われていることを十分知らなかったといったようなことも言われました。また、先ほど申しました限られた時間での自学自習の必要性をどう出すか。それからもう1つ、TOEIC、TOEFL、IELTS、こういった外部テストを利用できる方法はないだろうかという議論も行われました。例えばTOEICでいい点数を取ったら単位が増えていくというのはどうだとか、あるいはTOEFL、IELTS、あるいは英検等でいい点を取ったら入試の英語に替えられるというようなことはどうかとか、いろいろな議論は行われましたが、大学のブランディング、ブランドネームがそれによって逆に規定されるといったような懸念も指摘されました。

最後に具体的なプログラムのアイデアということで、ご提案のあった海外体験、異文化体験プラス語学を組み合わせた、文系あるいは理系のそれぞれの学生に適応したプログラムは、C群科目としてぜひ導入すべきではないかというご意見もいただきました。逆に、先ほどの理系のプレゼンテーション・プログラム、こういったものは一般的に理系として入れるのかどうかという懸念も示されましたが、こういった訓練が若いうちから必要ではないかという逆のご意見もいただきました。それから京大生をもっと海外に送るためには、海外キャンパスの可能性があるのではないか。かなり壮大なご意見も出ましたが、このようなことで非常に熱心なご検討をいただきました。

(拍手)

鈴木 ありがとうございます。確認、ご質問等、フロアからいかがでしょうか。

西村 さっきの河合先生の3つは何ですか。

森 お見せしたスライドで大事な部分が漏れてしまいました。ここが積極層、浮動層、それから消極層です。河合先生の分析ですと、大学の中の2割ぐらいが積極的に海外に留学したいとすでに決めている、あるいは調べている。浮動層は行ってみたい。消極層のグループは、最初から行く気がありません。真ん中のグループは大体半分ぐらいで、3割ぐらいの学生は最初からほとんど興味がありませんという人。これは日本と中国とほとんど割合は一緒です。ただ、中国のほうが、積極層がより多いし、実際に留学する人も多い。そういった積極層は、「英語にどの程度自分で自信がありますか」。「社会性の高い話題をしゃべることができます」「日常的な生活の話題はしゃべれます」「身近なことはしゃべれます」の割合が高くなっています。日中両国を見ていますと、あたりまえと言えばあたりまえですが、言葉ができる学生が海外へ出たがる傾向があります。逆に、出ない学生たちに理由を聞くと、アンケート結果によく出ているのですが、「語学に自信がありません」と申します。ということで、そのように見ていただければと思います。

鈴木 ほかにございませんでしょうか。ではのちほどの全体討議ということで。

続きまして、第3分科会を代表しまして、学生・教育担当理事補であり、教育学研究科の教授であります高見茂先生にご報告をお願いしたいと思います。

高見 第3分科会から報告を申し上げます。第3分科会は私と高等教育研究開発推進センターの小山田先生とでマネジメントを行いました。最初に、私から現在、教育制度委員会のワーキングの3という検討組織がございまして、これは全学共通教育システム委員会との合同ワーキングですが、ここでいろんな初年次教育に関する推進のあり方について多元的に議論をしております。その現時点で合意が得られた方針の大筋について6点ぐらいの枠でくくれるかということで、それについて簡単にお話を申し上げ、先だって各部局に実施いたしましたアンケート調査の概要について少し話をいたしまして、議論に入りました。

目的といたしましては、初年次教育の重要性をご理解いただくことと、本学としての取り組みについて広く意見交換をするということにいたしました。議論の流れといたしましては、今年度実施内容の概要を説明し、必要ならば追加項目を入れればよいなことについてご意見を伺うということと、本学独自の初年次教育のあり方について検討いただく。そしてこの初年次教育というものを、同じ水準のものを新入生 3,000 人に対して提供する場合、効果的・効率的な方法としてどのような方法があるかという



ことで、現在利用可能な情報技術というものについても少し紹介いただきました。

最初に、小山田先生から、どのような事情でこの初年次教育が出てきたかについてご説明をいただきました。そして初年次教育として取り扱われる内容について、大体スタンダードなベースで考えるとどのような内容がこれに含まれるのかについてお話をいただき、またその初年次教育の分類につきましても、スタディスキルアップ型、アイデンティティ形成型、セルフエスティーム向上型、オーナーズ型、このようなタイプがあるというお話もいただきました。本学の中期目標、中期計画の中に、初年次教育はきちんと位置づけられておりますので、今後これをどのような形で推進するかということが極めて重要な課題になっているということにつきまして、お話をいただきました。

その上で今年度の4月17日に新入生特別セミナーを実施いたしました。これは試行でありますけれども、土曜日の午後の時間を使いまして、5つのテーマで各30分ぐらいかけてお話をいただきました。「京都大学の歴史を知ろう」、これは自校教育と呼ばれるものでありまして、大学文書館の西山先生から話をいただきました。それから人権につきましては教育学研究科の前平先生から話をいただきました。キャンパスにおけるカルトの実態については、大阪大学の和谷先生に来ていただきまして、非常に興味深いお話をいただきました。また、高等教育研究開発推進機構長の山本先生から自然科学学習について、国際交流推進機構長の森先生からは世界の大学で何が起きているかということについてお話をいただきましたが、このセミナーのアンケートを取りましたので、その概要についてご説明をいたしました。

特にその中で、カルトについて非常に大きな反響があったということをご報告いたしますと、4月17日に初年次教育をするのは遅いというご指摘をいただきました。もっと早い段階でやらないと、各サークルはビラを配っているし、そのサークルの中にカルト集団が紛れ込んでいることもある。彼らは非常に活発に早い段階からやって来るから、もっと早い時期に対処することが必要ではないかというご指摘を、2人の先生からいただきました。来年度の制度設計にまたそれも参考に反映させていただきたいと思っております。

それから小山田先生が1回生対象の教育交流会をされています。この実践をずっと続けてきておられますので、その概要をお話いただきました。ここは1回生のうちから研究というものに触れさせるというコンセプトで、極めてユニークな試みをしておられます。例えば論文の投稿とか査読発表、表彰などをされるという実践について、内容のご披露がございました。それを踏まえまして、追加すべき科目、初年次教育として考えないといけないものとしたしましては、情報倫理とか情報探査が重要になってくるのではないかということが指摘されました。

それから図書館関係のことで、1年生のあいだは基本的な図書の使い方とか、図書と論文の違いがわかっていない子がいます。あるいは百科事典類を、初年次から、特に電子的なものを含めて知っておくことが非常に重要ではないかというお話もいただきました。15分ぐらい図書館関係の説明をしてらっしゃるらしいのですが、これではちょっと時間的に厳しいのではないかというお話もいただきました。

それから特に今日の議論のコアな部分だと思うのですが、なぜ我々が初年次教育というものに着目するようになったのかということです。これは西村先生のお話が午前中ございましたが、学生が確かに変わってきた。「いや、変わってない」というご意見も分科会ではございました。またあとでご披露いたします。その中で、学生の不祥事が続いておりました。そのような不祥事のごとに、初年次教育を実施して再発防止というふうにならざる言いつけられている。そうすると、初年次教育がそのような問題を防止するのにどれぐらい有効なのか、あるいは初年次教育を用いてどのように対処したらいいのかについて、色々ご議論がございました。

やはり大学というのは、初年次教育は3つのカテゴリーで考えないといけないのではないかと。精神的に未熟な子が多いということ、これに対して対策をどうするか、高校とのつなぎをいっただいどうするのか、連携をどうするのか、学びのモチベーションをどう引き上げていっただいいいのか。このような枠組みで考えていくと同時に、入口に入った人に出口が見えるように、きちんとしたキャリアパスをさせていくことが必要ではないかというご意見もいただきました。

ちなみにワーキングの3では、キャリア教育についても同時に、まだ深まりがあまりないのですが、議論はしているところで、このキャリア教育については、初年次教育の枠組みの中で極めて重要な要素であるという認識は持っております。

それから、学生が変わったというご指摘もあり、私もちょっと変わってきたのではないかなとは思っていたのですが、意外に、「本当に変わったのか」というご意見を提起された先生もおられました。「不祥事自体が今と昔と本当に違っているのだろうか。同じようなことが昔にもあったのではないかという気がする」とおっしゃった先生もおられたのです。極めて重要なご指摘をいただいたのですが、「問題を起こす学生はやはり孤立している。誰とも接点を持っていない、孤立している子が多いのではないか。このような子に対して何らかの教育的な働きかけをするような仕掛けを考えないといけないのではないか。そのような仕掛けを初年次教育の中に盛り込むことが重要ではないか」というご提言をいただきました。初年次教育は、一種のそのような不祥事に対するアリバイづくりという側面も否定はできないと思うのですが、アリバイであるとしてもしっかりしたものでなければならない。初年次教育でやるとしたらどのような組み方でどのようにやっていったらいいか、じっくり考える必要があるのではないかとご提言もいただきました。

それから事務のほうから極めて貴重なご意見をいただきました。近年の入学者の精神的な未熟さは目に余るものがあります。例えば自転車の置き方、通行の仕方、マナーの悪さが非常に目立つ、ということで、地域から極めて厳しい苦情をいただくことがあります。

したがって、コンプライアンスに関する、今年も試行でいたしましたが、「30分しか時間がないということなので、人権等々に関する科目とも絡めてもっとここの部分を強化していただきたい」。このようなご意見も頂戴いたしました。また、不祥事を起こした該当部局の担当の先生からも、どのような指導をしているか、どのような内容を学年初めのオリエンテーションで言っているかということについて、かなり詳細なお話をいただきました。最近の学生として、どのような行動をすればどのようなサンクションを受けるということが十分わかっていない子が非常に多いと思われま。例えばネット社会に現在なっているわけですが、ネット上に名前が載ってしまうとずっと残ります。ネット上に自分の名前が漂流するということがどのようなことを将来引き起こすかということが、あまりわかっていない子が多いという話をされました。

ほかにもいい方法があればぜひご教示いただきたいとお話がありましたものですから、私は今年の5月の連休中に、大阪大学でやってらっしゃいます、初年次教育を見に行った話をいたしました。大阪大学では、極めて重要な内容だけ全員に対して必修で4つだけやっておられます。色々盛り込まないで、エッセンス4つだけやっておられて、その中の1つに、いわゆる上級の学生さんに話をしてもらおうというプログラムを展開しておられました。これはまさに米国の大学で初年次教育をやるときに極めて有効だと言われているピアサポート、いわゆる上級生が下級生の面倒をみているということです。これは、下級生に対しても非常にいい影響を与えますし、上級生に対しても非常にいい影響があります。お互いにWin-Winの関係になるという仕組みでございました。そうしましたら、理科系の先生だと思いますが、実験をやる場合も、安全教育ということでやる場合、「こうすれば結局このようなことになるよ」と、リアルなものをしっかり見せることが必要だ、このようなご意見もいただきました。

また、学生が変わった、変わったと言うが、本当に変わったのかというご意見を、ほかの先生からもいただきまして、昔の京都大学のよさというものも今一度見直してみる必要があるのではないかと。学生が変わったのは、学生だけの責任ではなくて、我々ももう少しゆとりを持って対応していくことが必要ではないかというご意見もいただきましたし、余裕のある豊かな状況の中で学生に接していく、これが大事なことであろうというお話もいただきました。部局によりましては、できるだけ声かけをすとか、1対1の対応をしているというご報告もございました。教員と学生とのあいだの密な関係を作り上げていくことが極めて重要であります。ですから、初年次教育の中にもこのような触れ合い、もちろん京都大学の建学の理念の中には「対話と触れあい」がありますけ

れども、これをもう一度生かす方法を考えていくことが極めて大事ではないかと思いました。

それから部局によりましては、ガイダンスでどのようなことをやっているのか、できるだけ早い段階にモチベーションを上げるということをやらないとだめだ、ということです。初年次教育のエッセンスをプロフェッショナルがピシッとやり、フォローが必要なものについては日常の教員ができるだけ密に接触をすることによって、対応していくことが必要であります。あるいは科目としてのロングランのフォローアップを継続してやっていくことが必要であります。このようなお話もいただきました。

私どものワーキングでは、すべてにわたって必要なことを全部盛り込んでいく、これは理想的であります、資源が限られておりますので、全方位的対応はできないものですから、できる限り既存の、開講されている科目の中で初年次教育としてふさわしいものは、初年次教育の推奨科目という形で指定していくことも必要ではないかというお話も申し上げました。委員会でもそのような議論をしておりました。

それから1つの初年次教育の事例といたしまして、教育学研究科の前平先生から、教育学部で計画をいたしました初年次教育のシステムについて少しご披露いただきました。これは初年次から学習コミュニティを作ってスパイラルアップをしていくという仕組みであります、これも早い段階から学生を取り込んでいって孤立させない、このような枠組みで、初年次教育、学生を取り込んで院生もこの中に入れていくという発想がありますので、ピアサポートもこの中に含まれております。まさにアンラーニングというのは、孤立する学生から関係を作れる学生、これを作っていくというふうに解釈すべきではないかというお話もございました。

ワーキングの中でも色々議論しているのですが、一番大きなネックと申しますのは、今年の試行のときも、ガイダンスのときに3つのパートに分けて1,000人ずつ、教室を3つに分けてやりましたように、どうしても機械仕掛けといいますか、テレビ中継と言いますか、eラーニングと言いますか、このようなものを使わざるを得ないということがあります。もしも大量の学生に対して同じスタンダードの教育を提供していくのでしたら、どのような方法があるかということで、eラーニング関係の先生から、少しモバイル端末を使って初年次教育にどのように適用できるかとか、MOSTシステムについても、高等教育研究開発推進センターで開発されたものとか、情報メディアセンターで開発されました遠隔教育システムについて、少し事例の報告をいただきました。

いずれにいたしましても、今回の第3分科会で非常に活発に色々示唆に富むご意見をいただきましたので、来週、再来週と、ワーキング等親委員会が開かれますが、そこにぜひ私は行かせていただきたい、そこに反映させていただきたいと思っておりますが、やはり重要なことは、放っておかず、孤立する学生のケアに十分配慮するということです。

部会にご参加いただきました先生から非常に有意義なご提言をいただきましたけれども、京大で社会体験をする、学習機会を作ることが極めて大事なのです。今の学生は、高等学校を卒業するまで受験勉強ばかりやっていて、接する大人といたら先生しか知らない、それ以外の人を知らないことが多いと思います。そのような状況の中でいかに社会体験を積ませるかということが重要で、京都大学がそれに対応しないと、放っておくからカルトのようなものがそこに入り込んでくる。そういった意味からも、学生を孤立するような状況におかないように、ケアするようなことを十分考えていかなくちゃいけないのではないかというお話もいただきました。

それから、3,000人の学生に対応することは極めて時間・コスト等々もかかることでありますので、人的・物的な資源をどのように効果的に投入するかが極めて重要な課題になるわけでございますので、1つはeラーニングなんかを使う方法もあるだろう。あるいは接触を密にすると言いますと、少人数クラスの問題にかかわってくるのですが、ポケゼミの問題をどのようにしていくか。これも先生方だけで対応できるかと言ったら、極めて厳しい状態がありますので、例えば本学には優秀な大学院生、ポスドクの方もおられるので、そのような優秀な人的資源をこのようなところで生かしていただくのも1つの方法ではないかというふうに思います。

最後に1点ですが、今回アンケートでどのような初年次教育をやってらっしゃるかということで、全体を眺めてみたのですが、本部のほうで企画しましたようなプログラムと、各部局でやってらっしゃると、重なるもの

がかなりあるわけです。ですから、今後、協力してどのように進めるか、部局でやったほうがいいのか、本部でやるほうがいいのか、これをちゃんと仕分けしていくことが極めて重要ではないかと思いました。

私ども、分科会の進行に慣れておりませんでしたので、うまく最終的なまとめができず、色々厳しいご批判をいただきましたが、ざっくりとした議論の流れ、そして私なりにそれを理解してまとめさせていただけるとするならば、最後に申し上げましたような孤立する学生に対するケア、対策、この辺りにポイントがあるのではないかと感じた次第でございます。

(拍手)

鈴木 ありがとうございます。フロアからご確認、ご質問等ございませんでしょうか。

続きまして、第4分科会を代表しまして農学研究科の野田公夫教授でございます。

野田 第4分科会のご報告をさせていただきます。少人数教育部会ですが、今日出席された何人かの方が、「まさかポケゼミだとは思わなかった」とおっしゃっていました。確かに、全学共通教育の中の少人数教育と言いますとポケゼミなのですが、「少人数教育」とだけ書かれていたので、てっきり学部における専門教育のことだと思っておられた方もおられたみたいですね。それでまず、ポケゼミというのはこんなものだというのを2～3分ご紹介させていただいてから、今日の議論の概要をご報告させていただきます。



ほとんどの方がご存じだと思いますが、ポケゼミは1回生の前期を中心に行われる少人数の導入教育であります。決して専門の基礎を教えるとか、自分の専門領域の学生のための初年次の教育ではなくて、まさに自分が携わっている先端の研究の内容を、学部を超えた新生に提供する、要するにおもしろさですね、エキサイティングなものを新生たちにぶつけることによって、彼らのモチベーションを高めるというものです。京大そのものへの入門教育だと言われてはいますが、そのような性格を持ったものです。

平成10年度からはじまり10年余りになるわけですが、開講数、定員とも、ほぼ倍加いたしました。本年度の場合は、若干後期に開講する分がありますが、前期・後期合計しまして162ゼミが開講されて、募集定員数は1,590人です。前期だけに限りますと、152ゼミで定員が1,492人、しかし少しミスマッチがありまして、実際にゼミに所属できた人は1,344人です。希望者に対してゼミに入れた人の比率が77%で、これは過去最高でありました。ほぼ8割弱の人が入る、ということですが、逆に言いますと、依然として2割の人が希望をしても入れないという状況があるわけです。それからもう1つは、せっかく定員が1,492人ありながら、そして希望者は非常に多いにもかかわらず、実際には1,344人しか入っていないというミスマッチの状況があります。

これらの2つの問題をどのように解決するのかということが、私たち少人数教育部会にとりまして、一番大きな問題なのです。今日はそのような実情をご報告した上で、もっとポケゼミの内容が充実するにはどうしたらいいのかという「内容にかかわる問題」を、1つの大きなテーマとして立てました。もう1つのテーマは、希望者をできるだけ全員入れたいし、希望者だけではなくて、最終的には入学者全員を十分引き受けられるような規模を持ったポケゼミにしたいということで、「開講数を抜本的に増やすにはどうしたらいいのか」ということいたしました。この2つを大きな柱にして議論させていただきました。

まずは第1の柱、内容づくりと言いますか、ポケゼミの教育効果だとか、あるいは教育効果を高める上でどう

したらいいのかというような、教育の内容にかかわる話です。私が最初の報告の際に、ポケゼミの趣旨は、決して教科書を通じてとか、通俗的な読み物を通じてとかではなくて、まさに先端の研究に携わっている研究者本人が、新入生に向かい合って、先端研究のおもしろさや苦しさ、あるいは研究とはどのようなものかとか、そのような息吹を直接伝えるところに決定的な意味があると説明しました。それに対し、「先端」という言葉を使ったことに関して、クレームがつかしました。先端性ということと、実際に学生たちに何を教えれば興味を与えられるかということのあいだには、ずいぶん大きな乖離があって、むしろ先端性とポケゼミらしいポケゼミを作る努力とは矛盾すると思ったほうがいいのか、というようなご意見でした。

若干議論しました結果、先端的な内容をそのまま教えるということではなくて、先端の研究に携わっている研究者の生きざまや苦勞、あるいは研究を通じて、それが例えばこの発見にどんな意味があるのかとか…要するに、先端そのものの内容を伝授すること以外に、先端性というものがかもしだす雰囲気と言いますか、息吹といいますか、エキサイティングな内容っていっぱいあるわけですね。そのようなものを提供すること、要するに「先端の息吹」を伝えるということなのだろうというふうにまとめさせていただきました。また、次のようなことをおっしゃった方がありました。〈学生たちは、あることを簡単に教えれば喜ぶのではなくて、本物に触れる、本物に接する、やはり本物を見せることができたときに、本当に学生たちは喜ぶものです〉と。「先端的な」という言葉を私は使いましたが、それは実は、本物を見せること、本物に触れさせることだともいえます。確かにそのようにやや広げて理解すれば、決して両者は矛盾しているわけではなくて、むしろそのような刺激がポケゼミの魅力を構成している中枢部分だといえるように思います—こんなふうにまとめさせていただきました。

もう1つ、クレームがついたことがあります。これまで少人数部会としましては、「決して専門の基礎ではない、むしろ学部の人を囲い込んだり、学科に囲い込んだりではなくて、できるだけ広く、だから理系の人が文系の人に話ができるかどうか、文系の人から理系の人に話ができるかどうか、そのおもしろさを全く領域の違う人たちにわかってもらえるかどうか、これが鍵なのだ、教養教育なのだ」というようなことを強調してまいりました。でも、今日出されたクレームは、一般性だけを強調すると、要するに「誰にも通用する」ということにだけに注意をむけると、逆に薄っぺらなものになってしまう虞がある。関心とかテーマ性はすごく大切で、だからある種の関心を十分に大切にしながらそれをすくいあげていく、あるいはテーマ性を大事にして、それにきちんとアジャストしたゼミを構成するのが必要であって、ある種の凝集性、テーマ性、関心性、それをもっと大事にする、大事にしながらか多様性を作り上げていくという視点がいるのではないか、という主旨のご意見でした。これは私ももっともだと思いました。それが学生の囲い込みになったり排除になったりしないような工夫をしながら、このご指摘を生かしていきたいと思った次第です。

また、「学生の質が変わった」ということは、うちの分科会でも何人かの方がおっしゃいました。しかし、その変化を一番巧みにつかまえられる、そのような場がポケゼミではないかということも、ほぼ共通のご意見でした。今日、「ポケゼミでアルコールを飲んでいいか」ということが「非公式」に話題になりました(笑)。ある方は、「いやあ、やっぱりこれは必要だ」とおっしゃっていましたが、それはともかく、そのような「近いきあい」の中で、初めて教員・学生間の距離が埋まったり、お互いの視線がふと一致したりする、そのような可能性がポケゼミという近い集まりの中にあるのだということが話し合われました。

これに関連して、恒常的に新入生と接するような機会を教員みんなが持つことは大切かもしれないということが話題になりました。何年かに1回ということでは、自分の老いと学生の若さとのギャップにびっくりして、彼らを十分受け止めて消化できなくなるわけですけれども、毎年とか2年に1回とかやっていたら、それは小さな差になります。恒常的に1回生に接するなんてことがあれば、ずいぶん違うかもしれない、という議論がありました。

ポケゼミは基本的には5名から10名という定員を1つの基準としてお願いしているのですが、今日ご報告していただいた、有機化学の実験を主体としたゼミは、25人でやっておられました。果たして25人でフェイ

スツーフフェイスのゼミらしいゼミができるのか、私、このゼミについて少人数部会で疑問を呈したことがあったのです。今日ご本人に説明していただいたのですが、それは随所に工夫のある素晴らしいゼミでした。小グループに分けて、しかも「有機化学の実験でこんなことができるのか」と驚くようなストーリー性がありました。そのゼミでは、ずっとベーシックな実験を重ねてくるのですが、最後の実験をでこっそりとある種の「ごまかし」をします。モーツァルト効果なんて言われています…モーツァルトの音楽を聞くと化学反応が変わるというものですね、そのような仕掛けを最後に持ってくるのです。モーツァルトを聞かせた化学反応の方にちょっとした触媒を入れて、でっちあげですが、あたかもモーツァルト効果が起きたかのように見せる仕掛けをしたそうです。学生はびっくりします。ずっとゼミでまじめに勉強してきて、最後にモーツァルト効果なんですから。そして、最後に手の内を明かします。「これは実は嘘で、この不思議はこういう仕掛けで生まれたのだ」「ほんの少しのことで、化学もごまかしの道具に使われる」などと説明します。要するにエセ科学やオカルトの批判です。そのように落としたときに、「ああ、なるほど、ベーシックな研究というものもこんなふうの実生活と結びつくのか、我々の思考ともそんなふうに関連するのか」とはっとする、本当にドッキリさせられる内容だと思いますが、そんな工夫があったのです。5名から10名というのが基準ではありますが、いろんな持ち方、ストーリーの立て方があること、一見新入生の実生活感とは遠いような学問領域でも、工夫をすると、意外なところでリアリティを持ち込めるのだと痛感いたしました。

それから、これも複数の方がおっしゃって、びっくりしたことがあります。ポケゼミというのは1回生の前期だけ、半期の集まりで、しかも学部がバラバラです。したがってつきあいとしては一過性のもののように見えるのですが、ポケゼミが終わってもずっと連絡を取り合っているゼミがあるのです。しかも大学院生になってもつきあいがあって、今度はポケゼミをポケゼミ卒業生が手伝ってくれるという話もできました。「そんな関係が築けるのか」と、びっくりいたしました。そんなこともご紹介しておきたいと思います。

次は2番目の柱、開講定員を増やしたいということです。この問題につきましては、今まで少人数部会では、助教の先生方の協力をあおぐとか、基本的には教員の自室でゼミをやることになっているのですが、理系の先生の部屋は狭いので、広い部屋を我々が提供してゼミ定員を増やすというようなことをやってきました。しかし、そんなことでは追いつかないのではないかと思います、この1～2年の私の頭は「どう開講数を増やすのか」ということでいっぱいだったのですが、このことにつきましても参加者のみなさんがたからの「大きな批判」に遭遇いたしました。

さきほどご報告いたしましたように、今年のゼミの定員は1,492名あったのに、実際には百数十人定員割れしているわけです。そっちのほうのはるかに大きな問題ではないか。それから一つ一つの実際の定員数を見ていると、5人とか4人とか小さなところもいっぱいあるわけです。それこそ部屋の工夫なんかをして、今の162のゼミがせめて1人ずつ増やすことができれば、今回ミスマッチを起こした130人は全部吸収できるわけです。もし2人足すことができれば一気に300人、そのようなミスマッチを起こしてしまっているという問題をもっと丁寧に分析し、それを埋める工夫をすることのほうがより建設的ではないか、という意見が強く出されました。これも少人数部会でぜひ検討したいと思いました。

これからの心配ごとですが、1回生時にきちんと少人数形態の教育をしたいということを、多くの学部で、学部教育の一環として考えておられることが、今日クリアに出されました。すでにポケゼミと競合しているような感じがいたします。例えば理学部では、1回生でゼミを持っており、ポケゼミとは明瞭な競合性があるとの発言がありました。総合人間学部でもそうです。工学部のとある学科でも、1回生全員をゼミに割り振って教育しており、「率直に言って競合する」とのことでした。文学部からも、できれば学部教育の一環として1年次にそのような少人数教育を持ち込みたいと考えているという話がありました。

そして何人かの方から、「そうやってきたら、正直言ってたまったものではない」との意見が出されました。ですから全体として、学部教育をどうするのか、ポケゼミをどのように位置づけて、どのように分担していくの

か、そのような全体の見取り図がないと、このままでは立ち行かない。こういう意見が率直に出されました。また担当教員にとっては、学部教育としての少人数教育にはモチベーションがおおいにわくけれども、ある意味では得体の知れない、全学共通教育としてのポケゼミに対するモチベーションが維持できるのか、そのような懸念も出されました。気持ちはよくわかります。

あと、少人数教育を担当されたときに、誰にどう頼まれたのか一依頼のされ方について事情をお聞きしました。農学部では執行部が目標を設定して、これだけは何とかやらないといけないと、各専攻に割り振るわけです。それを受けて専攻は必死になって対応するということになります。私はどこでもそうだと思っていました。しかしいくつかの部局からは、全くそんなことはない、個人にパッと下ろされていて、やると言えばオーケーだし、やらないと言えばそれで済むのだとの報告がありました。それぞれの実情がありますから、一律にどうというわけにはいきませんが、もう少しシステムティックな要請の仕方があるかもしれないと思いました。

最後に、希望者を全員入れたい—これは皆さんに承認していただけることだと思っていたのですが—と言いましたら、それに対してもクレームがきました。それは「学生にも向き不向きがあるから」ということでした。その方がおっしゃるには、なぜ今ポケゼミが好評かという、「やりたい教員とやりたい学生という最高の組み合わせ」だからです。それでそここの好評があるのであって、「やりたくない教師とやりたくない学生」が結びついたときには、とんでもないことになるかもしれない（笑）。だから、今は確かに、本当にすばらしい評価を得ているのですが、そのあたりのことも含め全体を見ながら判断をすべきであろうという意見が出ました。このご意見にもある種「眼から鱗」の思いがいたしました。以上です。

(拍手)

鈴木 ありがとうございます。フロアからご質問、ご確認等はございますでしょうか。

それでは分科会のご報告の最後になります。第5分科会を代表しまして、高等教育研究開発推進機構の加藤立久教授でございます。

加藤 第5分科会のご報告を申し上げます。第5分科会のテーマは「学生の就学支援について」です。そのあらすじは、既に実施されました休学や退学などのアンケートや調査の報告から本学の現状を把握することが最初のステップです。その調査報告をふまえて、各部局で実施されているフォローアップ策の報告が第二ステップです。これらのステップをふまえて、分科会の参加者全員で、ほかの部局や大学の例を出して、いろんな学生の就学を支援する方法はないかと、効果的な支援策を模索するのが最終ステップであり目標でした。

全学在学数のうち、休学が2.5%ぐらいで退学が1.5%ぐらい、たったそれだけの人数の実数としてあがる現象に対して、それを特殊例と片づけるのではなくて、在学学生全員が、その休学・退学、または就学に何らかの挫折を感じる予備軍であるという考えが基本的コンセンサスです。その安全ネットを本学でお互いに討論しあうということ自身、それは本学のまさに教育の質、それから豊さを示すものであると、私は信じております。

実際のプレゼンテーションは4人の方々をお願いしました。すべて事務職員の方にアンケート結果、各部局でのフォローアップ策をお話していただきました。西村理事から午前中、第5分科会の話である就学支援を実施しようとすれば、職員を信じて連携を保とうというお話をいただきましたが、まさに私は職員を信じ、プレゼンテーションを丸投げいたしました。そして最後に教



員と共にこの結果を意見交換しながらディスカッションさせていただきました。順番にご説明申し上げます。

最初に、教育企画課の田平主任から、平成20年度の本学の休学者数・退学者数、学部・大学院の実数が調査され、その数字は先ほど言いましたように、全国平均とそう変わりはなく、どの大学も同じ問題をかかえていることが認識されました。この20年度の調査結果をもとに、各部局に投げかけられて返事が返ってきたフォローアップ対策の一覧表もここで披露されました。

田平主任のプレゼンテーションの直後に、カウンセリングセンターの青木先生から、「いやあ、ぼくはね、このような統計数字にはいろいろな誤差が入るので、大嫌いなんだよ。」というお話が出まして、ぼくはちょっと青くなりました。がしかし、このあと紹介された各部局のフォローアップ策の陰の仕掛け人すべて青木先生だったということがわかってまいりました。

それで、このように、現在の本学での就学支援を必要とする学生の実態とそれに対するフォローアップ策の一覧を眺めたあと、まず、学部の代表として理学部の福村専門職員に理学部のフォローアップ策を紹介していただきました。

理学部では少人数のクラス担任制を実行しておられまして、それぞれの教員が1年生から少人数の学生さんを相手にお話し合いをしたり、学生さんたちを集めてガイダンスをしたりということをしているという報告がありました。その中で、理学部の学部4年間で卒業された学生の人数を、この少人数クラス担任制が始まる前から統計を取っておられて、クラス担任制が始まったあとも、ずっと78%前後で、変わっていないという報告がありました。（学部4年間で卒業学生の数を比較するべきではなく、2年生から3年生へ進級した学生数を比較すべきであることが指摘された。実際に2年生から3年生へ進級した学生数は増加しており、少人数クラス担任生の効果は上がっている）。

より効果的な担任制または学生の就学を後押しできるシステムはないものかというところへ話が進み、学生の学業成績の保護者への郵送が提案されました。またクラス担任とのガイダンスでどのような話が出て、それに対して学生がどのように感じ、その結果「自分はこう変わりました」みたいなことを記録に残すというポートフォリオシステムの導入が、福村専門職員から提案されました。

その次に、大学院の例として、「情報学研究科における就学支援策」というお話を情報学研究科の上田専門員からいただきました。情報学研究科は大学院の独立研究科ですので、いろいろな大学からいろいろな人たちが理系・文系を問わず集まってきます。そのような研究科で、どのような就学支援ができるかを考えた結果、複数アドバイザー制という制度を取っています。自分の直属の教員プラス分野の違う教員が、研究並びに就学にアドバイザーとして、そして専門性の高い大学院生であれば、他大学、国内外を問わず第三のアドバイザーをお願いしています。予算が許せば第三のアドバイザーに本学に来ていただいて、その学生と話し合っていていただくというところまでしているというお話を紹介していただきました。それが大学院の例としてのお話です。

最後に、休学や退学の学生のパーセンテージよりもより少ないであろう発達障害学生への就学支援について、村田身体障害学生支援室員から報告していただきました。実際には非常にパーセンテージの低い、しかし非常に支援を必要としている学生への支援の仕方、並びにその支援の基本となる考え方を話していただきました。結局、その学生の特性を十二分に理解し、どのようなリアクションをする可能性があるかを理解した上で、それぞれに適切な対応をとることがポイントであるという話をしていただきました。しかし、この考え方は、基本的には一人ひとりの学生に、教員並びに事務職員が対応していくという就学支援の考え方の基本であり、その基本を再確認する話をしていただけたような気がいたします。

そのあとに、意見交換・ディスカッションへと話が進んでいきました。この意見交換・ディスカッションの中では、参加していただきました各部局からの対応策を全部紹介していただきました。ここで全部紹介していると時間がなくなってしまいますが、確実に言えますのは、各部局で就学支援をしようと努力されておられます。しっかり就学支援をしようという体制をそれぞれの学部の事情にあった形でやろうとしている、または始まっている

ることが確認されました。

個別名が出ますが、文学部の例を紹介します。先輩にあたる大学院生が文学部の決まった部屋に週に3日ほど必ず詰めていて、そこに「自由に相談にきてください」という「先輩相談室」を開設しています。その先輩相談室主催の茶話会は大盛会で、多くの学生が集まってきて、先輩たちにいろんな相談をしています。その現状が報告されました。週に3回開設されていて、こちらがお店としてオープンにしているところへ勝手に学生が入ってくるという形の先輩相談室ですが、非常に多くの学生が来ているということで、その潜在的な必要性を感じました。

次に、いろいろな部局で行われている支援策の効果を高めるためのシステムの試案として、担任制で学生と教員が話をした概要だけでも記録を残して、ファイルアップしていく、という提案がありました。先に話しましたように理学部はポートフォリオシステムとよんでおられます。医学部のほうでは仮の名前としてカルテのシステムとよび、カルテを少しためて、公開を前提とせず、何かの記録として残していきたいということです。効果を高める1つの方策だと思います。

もう1つ、次のご提案もありました。現在、一部の部局ではまだ議論が続いていると聞いております。保護者（基本的に学費出資者、一般の場合は親）への学生の成績送付という提案です。1年生の最初から、問題が起こる前からちゃんと定期的を送ってあげれば、問題が起こったときには何か助け船が出せるのではないかという考えです。これに対しては、皆さんもご存じのように賛否両論で、分科会の中でも「反対だ」とはっきりおっしゃる先生もいらっしゃいますし、「いや、必要でしょう」とおっしゃる先生もおられます。まだまだ結論は出ない提案でした。

最後に、学生をつまづきを予防する最大のポイントは、人間的なネットワーク作りです。人間的ネットワークを持っている学生は、まず、つまづくことはありません。たとえば、先ほど報告された野田先生が、新任教員の研修会で話されたポケゼミの例を上げます。関東から来た女子学生が「新入生として入学した直後に、京大砂漠の中でどうしていいかわからない。そんな時にポケゼミの先生にコーヒーを奢ってもらって『知をめぐる人間関係』を得ることができ、ホッとした。その結果、自分の4年間の学業が成り立った。」と言ったそうです。ぼくは非常に感銘を受けました。特に新入生にとって、京大砂漠に放り込まれて、基本的には「自分でやれよ」と、それがいいところであるわけですが、それを何かサポートする母体として、野田先生のやっておられるポケゼミのような、つまり教員または学生同士の垣根を低くする方法を試作していけたらと思います。対人的ネットワーク作りの支援です。これは第3分科会、第4分科会ともつながっていると思います。

むろんサークルの中に飛び込めばいいわけですが、サークル活動にも飛び込まず、クラスにもなじみずみたいな人たちを取り込む方法に、ポケゼミが1つあります。それから一部部局では、一泊ゼミをされているそうです。ここでもアルコールが飲めなくなったという話が出ていました。その一泊ゼミに手伝いとして大学院生にも来てもらえば、大学院生と新入生、それからむろん教員と新入生、ひょっとすると教員と大学院生が、お友達になるかもしれない。そのような垣根を低くする仕掛けを作ってはどうかという話が出ました。

最後に、「ぜひ西村理事に頼んでおいてくれ」という意見が分科会のある先生から出ました。昔は学内でバーベキューができた。今はガードマンがすつとんで来て全部消してしまいます（笑）。全くできないのです。何もバーベキューでなくてもいいのですけれども、その先生がおっしゃるには、共に火をたき、料理をし、食事をするという場を作るものをお願いしたい、ということです。

システムとしての提案はなかなか難しいものがありましたけれども、一番最後まで何かトライできるのではないかとということで、私の話を終わりにさせていただきたいと思います。どうもありがとうございます。

(拍手)

鈴木 加藤先生のご報告に関して、何か確認、ご質問等はございますでしょうか。

舟橋 機構物理の舟橋です。先ほどはどうもありがとうございました。

理学部のシステムで、4年生の卒業の数字で効果を確認しておられましたけれども、「2年生から3年生に上がるところでつまずいた子が先々」ということが導入時の着眼点だったと思います。そちらの数字はどうなのでしょう。5年かけて卒業するというのは、入試に失敗したことも含めて、5年生ってあまり珍しくないのではないかなと、自分の経歴を言いくるめたりもしますが（笑）、3年生にあがりそこねると、そのままずるずるという数字は、少し改善したのではないかと期待しているのです。少なくとも1年目2年目はそのように解釈されていた時期があったと思うのですが、最近はどうなのでしょう。

加藤 そのあたりの数字は、残念ながら出ておりませんでした。理学部のほうにそのように申し伝えておきます。数字をフォローアップするということ。どうもありがとうございます。（後に3年生への進級学生数は増加している報告がありました。）

鈴木 ありがとうございます。ここで、短い時間ではありますが、休憩を入れたいと思います。再開は5時5分前ということでよろしく願いいたします。

（ 休 憩 ）

鈴木 分科会の代表の先生方からご報告を伺ったのですけれども、分科会双方にかなり密接にかかわっている部分もあったと思います。他の分科会の報告をお聞きになられまして、ご登壇になられている先生方から順番にコメントあるいは補足等ございましたら、お願いしたいと思います。いかがでしょうか。

加藤 先ほど私がお話申し上げましたときに、理学部の担任で舟橋先生から「2年生から3年生へ上がる部分のパーセンテージはどうだったのですか」というご意見があつて、私は数字を持っておりませんでしたけれども、理学部の先生から「数字は上がっていました」ということをお聞きしましたので、ご報告申し上げておきます。理学部の皆さんが狙ったとおり、2年から3年へ上がれなかった人たちが減っているということです。

鈴木 ほかにございませんでしょうか。特に初年次教育、学習指導では、かなり共通した部分が出てきているかと存じますが。

内田 第1分科会の全学共通教育の問題で、成績評価の標準化ということが取り上げられておりました。全体のトーンといたしましては、それをやることによって何が得られるのかというような、あまり肯定できないような方向にディスカッションが進んでいったのですけれども、そこで、標準化ということを行っていく、あるいは成績の正規分布という、この言葉をめぐっても、いったいどのような定義を持っているのかという議論もありましたが、ごく普通に山なりのものを持っているというようなところだと考えますと、それは実は少人数になればなるほど、評価をそのようにすることにはあまり意味がないということになるわけです。極端な話、5人でやって、成績を出しなさいって、標準化することにはあまり意味がないことになるわけで、実は全学共通教育の成績評価を標準化するというと、少人数のものを設けるといふ方向とのあいだにはなじまない部分があるのではないかと思います。その点、そちらの分科会のほうはいかがでしょう。

鈴木 成績ということに関しまして、クラスの規模あるいは専門分野、いろいろな要因がかかわってくるかと存じます。

ポケットゼミ、少人数教育のあたりでは、いかがでしょうか。

野田 少人数教育の全学共通教育における位置づけをどう考えていくかということで少し発言させていただきます。

今日の分科会を通じても痛感したことです。確かに今の少人数教育は、皆さんのご協力を得て162ゼミという多くのゼミが開講できて、しかも「よかった」という学生がほぼ95%、1,500人の巨大科目で95%の学生が歓迎

をしています。教員は85%がよかったと言っています。こんな科目はないと思いますし、素晴らしい成果をあげていると思います。しかし、これをもっと発展させていこうとしますと、今までのように位置づけが不十分なまま、各部局や参加する教員の意向に任せているだけではだめで、何らかの制度的な支えがある、全学共通科目の中できちんとした制度的な位置づけがあると思っています。例えば初年次教育の中にしかるべき位置づけを与えよるとか、そのようなシステム上の評価と制度化があるなどと思います。

しかし他方では、今日の分科会の議論の中でも痛感しましたが、少人数教育のおもしろさ、魅力、教育効果の高さは、やや語弊を招く言い方なのですが、「ボランティア科目」といわれることがあるように、非常に自由度の高い教育ができる、制度的な位置づけをされてないがゆえに、各教員の自由に任されているという面があるのです。一番自分の関心事を一番自分にあつた形で提供できる。それが非常に大きな学生とのハーモニー、あるいはエネルギーを生んでいるというような面があるのです。

ですから制度的にきちんと強化をして、その教育についてはきちんと評価をするようなシステムを作っていくながら、同時に、そこで提供される内容については最大限に自由度を高める。その両方をやるのが極めて必要だと思っています。ぜひともそのような形で、京大の全学教育の中で位置づけをしていただければありがたいと思います。これが1つです。

もう1つは、先ほどもちょっと触れましたが、大学教育の中での少人数教育が早い時期、特に1年次とかで必要だというのは、今日の皆さんのお話を伺うと、どこの学部でも非常に強い関心事です。しかし、少人数教育の効果は確かに大きいのですが、全学部でそれをするとすれば恐るべき人海戦術が必要となります。1ゼミにたかだか5名とか10名の学生しかカバーできないわけです。マスプロで、一気に何百人も教えられるようなものとは違って、ものすごくたくさん人間がいる、負担がかかる。それをどうするのかということが大問題なのです。今まではポケゼミだけを議論して来ましたが、学部教育自身が初年次の少人数教育を位置づけをしようとしているのであれば、京都大学の全体の教育システムの中で位置づけ調整する必要があります。

今日総長のお話にもありました。京大の学風として「自学自習」ということよく言いますが、「自学自習」の前にある言葉、「対話を根幹とした」ということこそが大切だと思います。「自学自習」だけですと学生が勝手にやったらいいという話になりかねませんが、そうではなくて、大学の責任というものがあるということです。それは対話の場を提供するという、あるいは対話の内容、中身を提供するということだと私は思っています。教員の責任は極めて重いのであり、自由な京大の学風を守るうえで、まさに我々一人ひとりがそのような責任を果たすことができるかどうか問われているのだと思います。

そのような点で言いますと、今あるカリキュラムの中では、ポケゼミというのは一番対話の場を保障できる、自学自習を支える根幹になりうるものと思っていますので、何とか守り発展させたいのです。繰り返しますが、にもかかわらずこれからはさまざまなところで競合せざるを得ないようなので、全学共通科目の中で、あるいは全体の教育体系の中できちんと位置づける。そのように議論していただかないと、立ち行かないのではないのでしょうか。さっきのお答えにはならませんが、そのように話をつなげさせていただきます。

鈴木 少人数での授業体制が、京大の教育を変えていく一つの起爆力になり得るのではないかとのご指摘を頂戴しましたが、実際にこれを実行に移していくに際しましては、かなりいろんな面が出てくるかと思っています。現行の状況から見て、可能性というか展望を少し、西村理事、機構長からご発言いただければと思います。

西村 申し訳ないのですが、私、経済学者の顔に若干ならさせていただいて、今のお話も、今日全体の議論を伺いながら、本学として特徴のあるいい方向に行っていると思う反面、やはり対外的にはなかなか大変だなという感じがしています。

それは、言ったら、伝統工芸品を一つ一つものすごく丁寧に作っていく、一人一人の学生に丁寧に接触しながら教えていく、そして人間としても立派にしていくというのが一方であり、そのことに反対する人は誰もいないし、それをポケゼミとかいったような方法でやっていくことの意義はとても大事だし、たまたま京都という地に

あって、まさにそのような立派な伝統工芸品を作るという発想が京大にあるという、このことの意義は絶対失いたくないと思います。

実は、今日は申し上げませんでしたけれども、教育制度委員会では申し上げているのですが、2単位を15コマでやらんといかんというような話も含めて、大きな話としては、この日本の大学の教育制度全般、総長が最初に示されたと思いますが、これだけ低い教育費を使っている先進国はないわけです。その中で実は本当に経済的に日本は大変な状態になっているのですから、貧すれば鈍するという感じで、あえて激しい言葉を使いますが、朝、子どもたちを起こすことを先生がやらないといけないような私立大学が、今一方でたくさんあります。そのようなところにおける教育は、基本的にはマス教育であって、そのマス教育をやらざるを得ない状況でありながら、一方で先生方が毎日学生に電話で、「早く出てこい」と言っている現状がある。一方で私どもの大学のように、そのような意味では恵まれた少人数教育ができる大学があります。

その両方に対する国の政策は、それを一律に同じようにお金を減らす、あるいは場合によって増やす、人も同じように増やすという発想で進んでいるわけです。その中で、私どもは、一方で手作りの教育という言い方をぜひとも守りたいと思いますが、他方でやはりある程度マス教育に対しても対外的に説明ができるような教育内容を提供する必要があるということをご理解いただきたいと思います。もちろん今、野田先生がおっしゃったように、ポケゼミをより広い少人数教育、学部教育か専門教育かあるいは教養教育か、そのような問題は大変大事で、そのような位置づけは大事だと思いますし、このような方法では、先ほど野田先生がおっしゃったように、やりたい先生とそれを受け入れる学生のマッチングでは最高なわけで、これをぜひ拡大していきたいというのは言うまでもありません。

しかし他方で、朝、別のところで申したのですが、私どもはやはりそこで道に迷う学生をちゃんといい方向に持っていかないと、実は、私立大学協会と国立大学協会の対立ってけっこう激しいです。先ほどの15コマの話だって、本学にいて、今立命館大学に移った本間さんの話を聞いたら、「何を今頃15コマやる、やらんといったバカな議論をしているのか」と言うのです。私たちとしては、「15コマやることの意味がどこにあるのだ」という反論はすごくあるのですが、しかし、それが今国立大学の置かれた状況であります。

そうすると、少人数教育あるいは初年次教育、そういったものの位置づけを明確にし、しかも国際化も進める中で、一方で今日、第1分科会に出ささせていただいて私が感じたのは、この教育全体のあり方は、ある程度のマス教育、つまり100人、200人のイメージで、私学のように1,000人、2,000人ではないのですが、100人、200人を対象とする教育の場でどのような評価システムを導入していくかということは、同時並行的にやらざるを得なくて、その場で出たご意見は、割と手作りの教育の重要性が出て、それは一方ではポケゼミ等でやるという形で当然私はやられてないといけないと思うのですが、ちょうど今お話にあったような理学部の事例とか、そのようなことは従来にもまして一方で積極的に対応していく必要があるのかなと思いました。すみません、ちょっと話がそれました。

山本 少人数教育のポケゼミの趣旨と全く合致するわけではないのですが、現在少人数という形では、必ずしもポケゼミだけではなくて、全学共通教育では他でもあるわけです。そのような中で、ものすごく教員の労力がかかっている、そのようなもの、同じ土俵でとはいかないかもしれないけれども、ある共通点のもとでカウントして、そのようなものも少人数教育として実現できているのだというようなことで評価する、そのようなシステムが必要だと思います。

そうでないと、他大学、例えば名古屋大学なんかは、本当に完全に全員にそれをやらせる。そのためにものすごい数の教員に動員をかけて、それからマッチングという意味でも「どこかには必ず入れるのだ」というような感じでやっているわけです。そんなふうにならざるを得ないと思います。

例えば全学共通教育でそのようなものに何があるかと言いますと、1つはA群科目の中では基礎ゼミが立ち上がっています。その履修者もかなりいます。それから理系科目としましては実験実習科目があります。実験実

習科目はかなり個別対応で、対話を根幹にしたというような教育ができています。それを実現するにあたって、いろんな部局からの応援を得ています。当初は「自分とこの学生さんだから」という形で出てきていただいたのですが、すでに2年前からは化学研究所のほうから実験に出ていただいて、それのお手伝いというのですか、応援をやっていただいています。そのようなものもカウントすれば、少人数教育というのが、つまり新生が大学に入って、京大砂漠という言葉も出ましたけれども、放ったらかしにはなっていないというような位置づけができ、そのようなものもカウントしていただければ、可能性はあるのかなというように感じました。

鈴木 片方で少人数、他方、アメリカの大学等でインタラクティブな500人、1,000人というような単位の授業が実際に成り立っているという情報もありますが、その中で両方を立てていけるような教育のあり方が求められると思います。この授業という場でのサポートやケアとあわせて、生活の面で人間として生きていくというあたりでのケアサポートと、いかにこの2つを橋渡ししていくかというの、同じ問題を抱えているかと思いますが、そのあたりでは、高見先生あるいは加藤先生、いかがでしょうか。

高見 初年次教育がどうしても必要かということにつきましては、先ほどお話を申し上げたかと思いますが、やはり1年次の早い段階から、第4分科会、第5分科会でも、同じような個別対応と言いますか、きちんとしたケアをすべきであるというお話をいただきまして、まさに私たちの部会の中で出たお話と一緒にあったなと思いました。

したがって、この問題は1年次の早い段階からケアをする、それも人間的な関係をしっかりと構築していくことが大事ではないか。その枠組みとして、我々教員と学生、それから上級生と下級生ですね。新生の関係をどう位置づけていくか。それから学生同士の関係をどう位置づけていくか。それぞれの対応の仕方はおのずと違った枠組みの中で違った方法論で検討していかなくてはいけないのではないかと思いますので、それぞれのケースバイケースを十分検討した対応を図っていくことが今後極めて重要な課題になってきますので、私どもの委員会等々でもそのへんのところにも配慮しながら考えていきたいと思っております。

加藤 私もお話ししましたとおり、学生たちがつまづかないためのケアは、人間同士の、おっしゃったとおり三者の、教師、学生同士、それから先輩後輩のつながり、これが一番大事だと思います。

ただ1つ感じますのは、私は、先ほど山本先生のお話に出てきました、化学実験の担当をしております。学部によって、自ら横のつながりを作れるかということ、そうでない場合があつて、それを助けてやる必要があるのかということです。はっきり言って工学部だと手のぬき方などパッと広がるのですが、理学部の方は全く違う。黙々とやっておられる。そのへんを助ける方策も必要かなと思います。

鈴木 今までの議論との関係で、おそらく海外での体験を学生がするというようなこと、これはどのような形で絡んでくる可能性があるか、そのあたりは森先生いかがでしょう。

森 2つの面から申し上げたいと思います。1つは、日本人を中心とする学生のグループと、それから留学生のグループ、両方あると思います。日本人学生を中心とするグループは、今日お話をお聞きしていて、私も申し上げましたけれども、カリキュラムの中に国際的な要素をどう組み込むかということとをぜひ全学共通の問題として議論をしていただきたいということを考えております。

また、KUINEPというのがありまして、今日西村理事から最初にその議論もしてもらいたいということでしたが、とても時間がありませんから、そこはやっておりませんが、この数年の全学教育シンポジウムでも何回かKUINEPに触れてまいりました。今国際化が進む、教育の国際化がなぜ必要かということの中には、世界中で英語での講義を行うことが頻繁になってきておりますし、またそれに参加することが必要になってきていると思います。そういった視点から、KUINEPもまた単に交換留学生のためのプログラムではなくて、もう少し違う、日本人学生に対するプログラムの1つだと考える必要もあるでしょうし、実は今西村理事の下での私的な諮問委員会でもこの議論をいたしまして、新しい提案を教育制度委員会のほうに申し上げたいと思っております。

それから留学生がこれからまだまだ増えてまいります。今日の分科会ではほとんどお話しする時間がございませんでしたが、ご存じのとおり実際英語しかできない学部生が来年の4月から入ってまいります。また、それ以外の院生も増えてまいります。それを限られたリソースの中でどれだけサポートするかということです。私どものほうで言っておりますのは、留学生のサポートはピアサポート、これは特別の教員のみではなくて、学生、事務職員を含めて、幅広いサポート体制を学内で作らないといけないということ、このへんをぜひこの学内の修学サポートというときには考えていただけるとありがたいと思います。

野田 今日、第4分科会で議論されたことで、さきほど報告し忘れていたことが1つあります。それは複数の方から「新入生こそ最も優秀な学生だ」という発言があったということです。実は、私はポケゼミに関与するまで学部教育しかしたことがありませんでした。私の前に初めて現れる3回生あるいは2回生の末頃の学生というのはほとんどない学生たちで（笑）、それをどのように育てたらよいか、そんなことに悩みながら暮らしていたのです。2回生の学生って想像つかないし、1回生はさらに想像つかない。そんなふうでしたけど、初めてポケゼミを持って、新入生の顔をじかに見たとき、実に新鮮で刺激的で、大学の教員としての緊張感をピリッと味わった思いがいたしました。とにかく彼らは、確かに粗削りですけども、でも、大学に対する期待感がものすごくいのです。その大きな期待に直面したとき、瞬時にこれに答えなくてはならないと思いました。そのような緊張感を最も確実に味わえる1つの場がポケゼミかもしれないし、講義では感じられないときめきがあるのかもしれませんが。ですから、ポケゼミという体験をさせてこそ、「新入生は優秀だ」と、本当に思われたのではないかと思います。そこまで期待を持たせる連中であることは間違いないので、それを4年間かけてどのように育てていくのか、大学教育全体の中にこのような観点が必ずいるというふうに思います。

もう1つ、これもそれに関連することだと思います。ポケゼミは基本的には1回生の前期ですけど、実は去年から部分的に後期にも開講いたしました。ところが必ずしも反応がよくありません。前期は希望者が殺到しますけれども、後期はそうになってないのです。事務方のある方が、「ポケゼミには旬がありますね」とおっしゃいました（笑）。そのような情報提供をした上でのご発言なのですけれども、「それはそれとして、前期のポケゼミを踏まえて、トーンも役割も違う、2回生につながるようなゼミが後期にあったらいいですね。そのようなつなぎのゼミが欲しいですね」というご意見もありました。補足してご報告させていただきます。

鈴木 新入生のフレッシュなエネルギーに触発されて、教員も原点を見直すべきいい機会です、何かそこらあたりから新しいアイデア、システムが出てくるかと思えます。今まで京都大学の中でみんなそれぞれ個人的にやってきたいろいろなことやアイデアを、実は今度はシステム化して、それを外に見える形で示す、つまり手の内をいかに外に対して見せていくかということが求められている段階に、私どもは来ているかと思うのです。

登壇している先生方からは一通り補足あるいはコメント等をいただきました。それでは、それぞれの研究科あるいは研究所、いろんなところで学生と接しておられる先生方に、今後の可能性、あるいはご批判も含めましてアイデア等を頂戴したいと思います。いかがでしょうか。

西村 こっちらから質問です。ちょっと長くなって恐縮ですが、冒頭1つ忘れていたことがありまして、いろんなところで話題になったのですが、実はキャリア教育というのを法の設置基準でもっとちゃんとやるようにという指示がありました。これについてはだいぶ考えたのですが、今の野田先生の話とすごく関係していることがありまして、高等教育研究開発推進センターの溝上先生、松下先生たちが、将来のキャリアについて割とはっきりした目標を設定している学生のほうが、最初入った段階からかなり熱心に勉強するという調査をしておられます。ですから、今フレッシュマンの新鮮なということを将来とも続けていくためには、例えば学部を終わった、あるいは修士を終わった、ドクターを終わった、そこでどのような方向に自分がこれからキャリアを描いていくのかという見通しをある程度出してやることは、おそらく今のご研究の成果を使っても、かなり学生諸君の意欲を高めるといふふうに私は推測しております。

そこで、問題は、これを本学で、要するにボトムアップという言い方でおっしゃいましたが、ボトムアップの

反対は、総長が「やれ！」と言ったら「はい！」ってやるのがトップダウンというように、1つの解釈はあり得ますが、私はやはりこの段階で今さん議論になっている重要なキーポイントは、学部ごとでやるか、全学でやるか。これは特に最初の2年間を、形としては全体でやろうということになっている。しかし、それぞれの学部が割と自分たちの考えのもとで、それは率直に言いますが、偏差値がかなり違う学生が、こんなことを言う問題かもしれませんけど、学部ごとに違うわけです。

そのようなものをみんな一緒に扱ってやるという困難さがありますけれども、私個人としては、全体でやるという雰囲気を盛り上げていかないと、ボトムアップがいいかトップダウンがいいかというよりも、バラバラにやっているのいいか、みんなと一緒にやらないか、そっちではないかという印象をすごく持っていて、皆さんそれぞれ学部で熱心にいろんなことをやっておられるという現実には色々知るので。しかし、私から見ると、「せっかく京都大学なのだから」という気持ちも、もちろん職務上そのような役回りですから当然ですが、そのあたりについてぜひ。「そうは言うけど、やっぱりここまでは学部だ」とか、あるいは全学共通に対しては、はっきり言って「全学共通の担当者がちゃんと2年やってくれると思ったのに、それをちゃんとやってくれないから、学部が一生懸命やらざるを得ないのだ」というご意見もたくさん聞いています。

私が勝手に質問を決めて悪いですけど、そのようなあたり、全学でやるか学部単位でやるか、あるいはその関係をどのようにうまく持っていったらよいかというご意見を、ぜひ伺いたいと思うのです。

鈴木 ありがとうございます。非常にインタラクティブなご質問を頂戴いたしました。学部の方、あるいは研究所の皆さん、あるいは全学共通教育に特にかかわっていらっしゃる先生方、色々お立場によって違うかと思いますが、いかがでしょうか。

高見 本当はフロアからお出しいただきたいのですが、このテーマに関しましては、先だって8月20日にIDEのセミナーをやりましたときに、西村先生が最初のごあいさつだけで、入試の行事の対応でお出になりまして、最後までいていただけなかったのも、お聞きいただけなかったのですが、理論家として日本でトップだと思っています九州大学の吉本圭一先生が、その問題のまさに答えを出されたのです。

これを言ってしまいますと、もうその答えは出てしまいますので、議論にならないので、私は黙っておこうかなと思ったのですが、全然おっしゃらないので、そのときのお話を申し上げます。吉本先生のお考えでは、結論としてはやっぱりキャリア教育は、各部局にはそれぞれのコンテキストがある、文脈があるから、全体でやってもあまり意味がない、これは部局でできちゃって下さいというお話でございました。

しかし、全体で何もしないでいいかと言いますと、それなりの一定のスタンダードなり方針なりは示す必要があるのではないかと。全く部局に任せっきりでいいかと言えば、そうではない。でも、主体的にはそれぞれの文脈の中でやっていただくのが一番効果的だというのが、吉本先生の回答でございました。参考までに報告します。

森 私がそのキャリア教育のインターシップをIDEのテーマとして昨年提案したものですから。吉本先生はそのような結論を出されたのですけれども、ほかの私大の先生から、「そうは言ったら各学部の先生は興味ないですよ。学部ごとでできることと全学でないといけないことがある」という意見が出ました。

先ほど西村先生から、バラバラと一緒にどっちがいいかと言われましたが、今までは少なくともバラバラのほうがよかったことはたくさんあると思いますが、世の中がどんどん変わっていて、今私のやっている国際なんかで見ていると、一緒にやらないと相手にしてもらえないことが非常に多くなっているのではないかと思います。学生交流にしても、もちろん研究科レベルであれば、個々の交流は可能だと思いますが、例えば学部での交流になると、とたんに相手の大学も大学としてのシステムを求めてくるといったようなことが多々出てきます。ますますその傾向は強まりますし、それができないと、実はもう文科省の予算も取れないのではないかとすら思います。

鈴木 フロアのほうからいかがでしょうか。特に戦後日本の大学は、アメリカ的なジェネラルエデュケーションの部分と、最終的に卒業の要件を認めるのは学部にあるというヨーロッパ型の部分との、まさにミックス型で、

この非常に矛盾した状況の中で教育のシステムが展開されてきたという背景がございますが、今この時期、大学を巡る状況の中で、この2つのあいだをどのようにつなぐ可能性があるかという形の問題でもあるかと思えます。

伊藤 工学研究科の伊藤と申します。先ほどの西村先生のご質問、ご提案の答えは、非常にはっきり私の中ではしております。



先ほど森機構長がご発言されたので、国際交流について申し上げますと、例えば留学生を受け入れて、留学生を教育する、その留学生をケアするための教務的なこと、これらは部局がやることです。ところが留学生の、例えば寮の問題、あるいは入出国管理とか、生活の支援、そのようなことは全く部局には依存しない、共通的な問題なので、これは全学でされるべきだと思うわけです。

先ほど初年次教育の高見先生の分科会で発言させていただいたのですが、初年次教育についても非常によく似たことでございまして、例えば西村先生がおっしゃった精神的な未熟の問題、社会体験をぜひとも涵養しなきゃいけない、そのようなことは部局には全く依存しないことです。ところが、もう一つの目的、例えば高校とのつなぎ教育、

これは工学の場合には自然と数学をやっていますけれども、これは明らかに部局のニーズ等の合致がいるわけです。教育問題ですから。

もう1つ大きなことは、先生おっしゃったようにキャリアガイダンスです。将来像を見せてあげることは、1年生に対してはモチベーションを持たせるのに非常に効果があるのです。行き先は部局によって違うわけで、医学はお医者さんになるし、工学はエンジニアになるし、全く違うので、キャリアガイダンスは部局の問題なのだと思います。ですからそのように切り分けていただいて、先ほどありました社会性の涵養、これは全学できっちり、人権問題、差別、偏見のような問題も含めまして、しっかりとやっていかないといけないと思います。

鈴木 まさにコアの部分をどうとらえて、そうしたエッセンスの部分をどう切り出していくかという問題になるかと思うのですが、ほかにご発言いかがでしょうか。

寶 防災研究所の寶と申します。先日、ある学会の懇親会で東大を退官されてすでに何年かたっている先生とお話ししていたら、「退職したあと、もっと自由な時間があるかと思って、本をたくさん、学生時代あるいは現役のときに読み切れなかった本を読もうと思ったけれども、全然そんな時間がない。このまま自分が読みたいと思っている本も読まずに死んでいくのだろうか」というような話をされたのです。

京都大学の場合、昔は教養部がありまして、2年間、割と自由な時期があり、学部の科目も1つか2つぐらい



しか2年生のときはなかったし、1年のときは専門の科目がなかったりして、そのようなときこそ思い切りやる気のある人は自由な勉強ができるはずなのです。ですから、教養部というのはそれなりの価値があって、いろんな科目を自由に選んで、あるいは大学をサボりまくってという人もいるわけで、それであとから苦労したりもするわけですが、そのようなことができる昔の教養部を復活せよというわけではないのですけれども、全学共通でかついろんなセクションができて、思い切り、自分の専門ではないけど学べる時間を与える、そんな工夫ができないでしょうか。

今、大学院教育でも、大学院の共通の教育をやろうという動きがありますけれども、それも大事なことだと思うのです。大学院から入ってくる人もいるし、学部時代にやり得なかったことをもう1回、修士

1 回生のときに時間を有効に使って思い切り違う分野の本を読んでみたりして幅を広げる。そしてドクターへ行って、教員になっても、サバティカルという制度をつくらうとする傾向もありますけれども、今までの自分を振り返って、もう1回自分を考え直す時期を、若いとき、中堅のとき、それから年配のとき、教育はつまるところ自己教育ですから、自分が選んで好きなことが思い切り勉強できる体制を作るのは大変大事なことです。

そのような場を作るという意味で、西村先生がおっしゃっているような、大学全体でやって、そのような場を作ることは一つの方法ではないかと思うのです。

田中 情報学研究科の田中と申します。意見というより質問ですが、午前中に総長のお話でもありましたようにリーディング大学院ですね。あれは大学院の話であります。キャリア教育が今話題ですけれども、理工系の学部、



私は工学部ですが、ほとんど大学院に行きますので、むしろキャリア教育ということは大学院が大事だと考えています。

そのときに、何度か機会があるたびに申し上げているのですが、京都大学のいろんな部局の大学院、どの研究科も問わず、トータルで見ますと、毎年約3分の1の学生は他大学から入ってきているわけです。ですから、そこをどうするかという話と、先ほどのキャリア教育、大学院のキャリア教育、そこが非常に重要だと思っております。まず、3分の1が外部から来るということも含めて言いますと、高見先生がおっしゃったと思いますけれども、大学院に初年次教育というのは、やりたいのかやりたくないのかわかりませんが、少なくとも外部から3分の1来る、これをどうするか。これを各部局でとなるととても大変だろうと思います。そのようなところは全体でということになるかと思えます

けれども、キャリア教育そのものについては、複数の部局である程度横断されるというようなことが考えられますが、何か1つの同じものをどの部局にも、トップダウンという言い方がいいか悪いかわかりませんが、そこはなかなか議論があろうかと思えます。

質問は、大学院の初年次教育、大学院のキャリア教育、それと午前中に総長がおっしゃいましたリーディング大学院、そのイメージがまだ浮かばないのですけれども、すでに議論されておられるようなことがありましたら、お教えいただきたいのですが。

鈴木 そのあたりについてということになると、西村理事、総長ということになると思いますが、総長、いかがでしょう。

松本 リーディング大学院は、文科省のホームページにもすでに掲載されています。大々的に行うということで、文部科学省が一応公募する形です。京都大学でもたくさんの大学院が興味を持っていると思います。おっしゃるとおり、先ほども申し上げましたが、各研究科がそれぞれ悩みもあり、欠点もあり、長所もあるということで、日夜教育あるいは研究指導をしていたらと思っています。新しい枠組みが出てきたときにどう行動するか、これは研究科によって対応が全部違います。条件も違うし、ミッションも違うし、キャリア形成の上でも色々ありますが、各研究科に対する現代社会の要請も様々です。

昔であれば、エンジニアならエンジニアだけ出来ればかなりの長い間通用していた時期があるわけです。ところが最近ではグ



ローバル化しまして、エンジニアは英語をしゃべらなくてもいいという時代ではないのです。社会科学あるいは経済状況がわからなければエンジニアは務まらないという時代になっています。ですから、かなり共通部分があるという先ほどのお話もありますが、システム上の共通部分だけではありません。同じく、文科系の方は法律だけわかればいいというのではなく、法律をどこに適用するかという仕事に強制的に放り込まれる方も、卒業後は非常に多いのです。

文理融合型と書いてある第1タイプ、これも非常に数少ない大学から選ばれると思いますが、トライアル・アンド・エラーでやってみようと、これについても京都大学では考えています。ただ、今までのミッションがありますから、そのミッションを曲げてそのようなことをするというのにはできないだろうということです。するとすれば全く新しいタイプの、本当の意味での文理融合型の大学院を提案しなければ、おそらくできないでしょう。各大学院の協力ももらって実施するという形もありますが、「人を出してください」と言ったら、答えはほとんどノーなのです。「兼担ですか」と尋ねられます。兼担もあり得ると思います。今までいくつか兼担で新しい研究科を作ってこられました。その場合、人事についても、うちから出したのだからうちの人事と言って、新しい研究科にさせないということが起こっています。そのようなやり方では先々トラブルが起こるので、できることならば文部科学省からポストをもらってきて、それを原資にしてやるという方向がいいのではないかと、今我々は考えています。

文理融合型の新しいものを作ることは非常に難しいです。どの研究科においても、ドクターの学生やマスターの学生を研究室の研究員としてトレーニングします。それをキャリアと呼ぶでしょうし、研究室の研究を進めるという側面もあるわけです。ですが、プロ中のプロ、専門家中の専門家というものだけを社会が要求している時代ではありませんので、できたら非常に幅の広い、文科系、人文社会系、理工系も理解できるという人が欲しいという要求が一部あるのです。そのような人をたくさん作ることはできません。しかし少人数のそのようなものを作って、うまくいけば、現在いろんな研究科でトライしていただいています研究科横断型の教育プログラムの中で、そのようなものを見ながらうまくいくところが増えてくる。そのような仕組みになればと考えています。

西村 教育担当理事というのはそのようなことをしないとイケないという自覚がないので、言われたのですが、今の総長の話を聞いて、もし伊藤先生、ご反論がありましたらおっしゃっていただきたいのですが、伊藤先生のさっきのお話、先生のお話に限定する限り全く異論はありません。しかし、先生のお話の中に「教養教育はどうするのだ」という話はありませんでした。

今私たちが抱えているのは、教養教育を全学みんなでやっていくかどうかというのがひとつのテーマで、実はこれは今の総長のお話と密接に関連していて、総長にも私にも、やはり過度に細分化されてしまった今の学問、1個1個を究めることはとても重要だけれども、それだけではなくて、そのベースを例えば1つあるいは2つ持ちながら、広い分野に自分が出ていく人間を育てたいというのがリーディング大学院の話だと思っています。

総長からハッパをかけられて、南川理事補に研究科横断型の話を去年から始めたのですが、実は副次的な効果として、これは大学院の初年次教育という観点からある貢献をしています。しかし残念ながら、それぞれの研究科の科目をずいぶん提供いただいているのですが、どうしても先生方本位ということが多くて、なかなか学生が来ません。それは学生が悪いのではなくて、そのような研究科を横断した学生を教育しようという腹積もりというか、そのような気合というか根性というか、それがどうもまだない。だからこれが課題だと思っていますが、南川先生は本当に苦慮されておりまして、なかなか反応が返ってきません。一方、研究科は「出しますよ」とおっしゃって、ほかの研究科の人間はあまり興味を持ちそうにない科目を提供いただいているというのが現状です。

総長が抱えているリーディング大学院という夢、私は総長を補佐する人間として、何とかこれをやるのがこの大学にとって将来絶対いいことだと信じています。しかし、道はとても遠いという感じはあります。さっきキャリア教育の話をしたんですが、ご承知のように工学部は、ドクターに行くと就職がないということはないので、

心配ないのです。

しかし、今京都大学全体としては、ドクターコースを終えた学生に適切な就職先を見つけることができない現状で、その背景には、やはり欧米の大学院と比べると、ドクターを取った学生が、幅広い視野とかそのようなものに欠けているわけで、例えば IAEA で原子力の話をするとき、当然法律の話も詳しく知って、いろんなやりとりをするドクターを持った学生が今日本で求められているわけです。

やはり私は微力で、総長にはついていけない。はるか前を走っておられるので、しんどいと思っているのですが、ぜひ総長の旗のもと、そのような夢を描くのは何とかできないでしょうかということ、最後の言葉とさせていただきます。

部局の重要性はともありますが、大学院レベルで言うと大学院教養科目を全体でやっていく。それから同時に学部に関して、1回生・2回生を主に対象としてそのようなことをやっていくという気運を、もっともっと盛り上げていきたいと思っています。

松本 先ほど申し上げようと思って忘れたのですが、野田先生の少人数教育、ポケゼミはすばらしいということ、学生からも聞いていますし、アンケートもしていただいています。先生のおっしゃるとおりです。しかし、これはシステム化しないといけない、ボランティアでやっているだけではいけないという話がありました。私もそのように感じています。各部局でポケゼミの単位を認めるか認めないかという議論をしていただいています。少人数で大変手のかかる教育ではありますけれども、それについては全学でしっかり学生を教育しましょうというシステムの中で、そのことについてぜひ検討いただきたい。そのように感じました。

野田 ポケゼミの宣伝を、最後に発言させていただきます。これは、あるポケゼミがゼミ終了後も自主ゼミとして継続し、4年後に卒業するときに彼らが作った本です。2004年度のポケゼミで、2008年度に卒業するときに作ったものです。それは「アンナ・カレーニナを読む」というゼミでした。ここに参加している学生は、医学部、理学部、農学部、それから文学部、教育学部、経済学部、総合人間学部、ですからどの学部からも1人かせいぜい3人ですね。このような雑多な集まりなのですけれども、それが同じ関心で4年間ゼミを続けて、驚いたことに「アンナ・カレーニナ」を全員が訳しあったりしているわけです。誰が一番「アンナ・カレーニナ」の雰囲気を持っているかという競争までしているのです。

さきほど文理融合の話が出ましたけれども、彼ら新入生にはそれだけの力がある、と思います。「アンナ・カレーニナ」の翻訳を競争するようなどころまで、理系出身者が半ばを占めるゼミがやるわけです。彼らにはこんな力もある、ということだけ補足させていただきました。

高見 私は初年次教育ですから、ポケゼミには関係がないのですが、先だって九州に入試説明会に参りました折に、ブースに座っておりましたら、高校生が「京都大学のポケゼミの内容を説明してください」と質問がありました。高校生まで知っているのです。だから、京大のオリジナリティーのある、特徴のある教育システムではないかと思っていますし、初年次教育といたしましては、学生を孤立させないというのが今日1つ明らかになったことですので、そのための重要な仕組みとして、何とか充実させていただきたいと思っています。

鈴木 ありがとうございます。それでは、時間が迫って参りましたので、まことに短い時間でございましたけれども、パネルディスカッションを閉めさせていただきますと存じます。このお話の続きは、また次の情報交換会のほうで発展させていただければと思っています。

それでは閉会にあたりまして、山本機構長からごあいさつがございます。

教育の国際化について

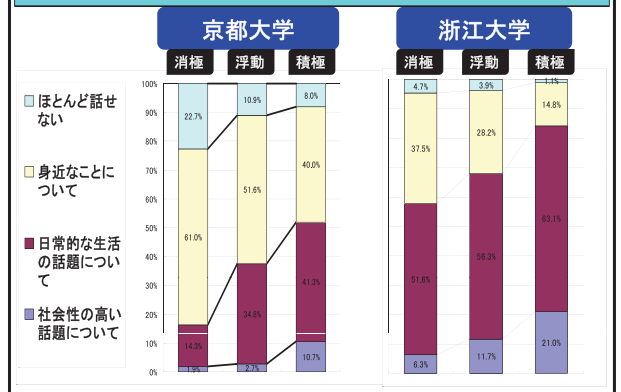
国際交流推進機構
森純一

- 京大生の留学志向
- 米国での国際教育の位置づけ
- 京大の全学共通教育における学術目的の取り組み
- 京大の学士教育における国際交流・海外留学促進の取り組みー「国際交流を通して英語運用能力の育成を高めるコースデザイン推進事業」

議論のポイント

- 1)「海外に行かぬ学生」、学生に問題があるのか。
- 2)どうやって学生の海外体験を促進するのか。カリキュラムに組み入れるのか
- 3)自信をつける英語とは。大学の各学部・研究科の期待する英語力とは。その増進策。
- 4)具体的なプログラムのアイデア

両大学とも、「留学志向」は「日常的な外国語能力」(話す力)と、正の関連がある。



カリキュラムの国際化

「国際化には、学生が他の文化や信条体系がどう機能するのかを十分に経験できるような、新たな教授方法と学習方法が不可欠である。」

「カリキュラムの国際化とは、カリキュラムをそれぞれの[国際的な]プログラムの集積としてではなく、異文化間の、学際的な、比較による、グローバルな学習を促進する、調和のとれた学習者主体の教育システムと考える必要がある。」

(Green & Olson, 2003)

今後の課題(1)

本カリキュラムを留学志向に結び付ける対策

□ アカデミックオーラルプレゼンテーションの充実

現在は非常勤講師による各学期2クラスずつの開講より充実を図るための対策

□ アカデミックリスニング関連プロジェクト

京都大学OCWを活用したアカデミックリスニング教材の開発
→授業での利用だけでなく、留学や学会を控えた人向けに公開し、自律学習に利用してもらうことを検討

□ テストテイキング関連プロジェクト

国際教育交換協議会(CIEE)からの寄付による研究「TOEFLテストの語彙分析研究」(研究代表者: 田地野彰教授)



短期留学説明会 10月5日(昼休み) 吉田キャンパス J-POD



ESL(語学研修)
Module(講義)
・オーストラリアの歴史、政治、経済
・多様なコミュニティについて
・異文化コミュニケーション
Discussion Group (現地の学生)
Presentation
Site Visits
Homestay (滞在期間:3週間)

ESL(能力別クラス編成)
Module(講義)
・科学技術系トピックに関連した
ープレゼンテーションスキル
ーディスカッションスキル
Audit Lectures (講義聴講)
Presentation
Site Visits (laboratory, museum etc)
Homestay (滞在期間:2週間)

議論のポイント1

- 1)「海外に行かぬ学生」、学生に問題があるのか。
 - ー国際性とは何か、なぜ国際教育が必要か
 - ーショックの必要性、ランキングなど
- 2)どうやって学生の海外体験を促進するのか。カリキュラムに組み入れるのか
 - ー学生のモチベーションをいかに与えるか
 - ー京大方式の必要性、国際人の認定制度
 - ー自学自習を進める

議論のポイント2

- 3) 自信をつける英語とは。大学の各学部・研究科の期待する英語力とは。その増進策。
 - 自学自習の必要性
 - 外部テスト(TOEIC、TOEFL、IELTS等の利用)
- 4) 具体的なプログラムのアイデア
 - C群科目として導入すべし
 - 理系のプレゼンテーションの一般的な教育は可能か
 - 海外キャンパスの可能性

第3分科会

第3分科会 初年次教育について

本日の討論について

- 目的
 - 初年次教育の重要性をご理解いただくこと
 - 本学としての取り組みについてひろく意見交換すること
- 議論概要
 - 今年度実施内容への追加項目
 - 本学独自の初年次教育のあり方
 - 現在利用可能な情報技術の紹介（同質な教育コンテンツの配信が必要とされる場合に有効）

質疑応答

カルトの教育をもっと早めに

- → 経験上連休明けがよいという意見がある
- →
全学生が参加できる工夫を
- →
特別セミナー以外の初年次教育について
- →
情報探索について
- → 図書と論文との違いを習得させる必要がある
- → 電子百科事典活用法
- → 剽窃防止のための引用法

質疑応答

- 不祥事（薬物・猥褻等）対策についての大学の責任について・・・具体的な取り組みは？ 正しい男女交際法まで教える必要あるのか？
- → 精神的な未熟さをどう考えるのか？
- → 高大連携
- → 動機づけ 出口を意識させる キャリア教育につなげて考える必要がある
- → 京大とこれまで関係がないと考えられてきた初年次教育
- → 日々の実践につなげていく
- → 学生の変化の数値化について（自殺率）
- → → 処分前に退学させていたので数字にならないケースもあるが
- → → 悪質さが増している・教育的な処分

質疑応答

薬物乱用による放学・すべてオープンにしている本学の方針・「学生処分」で検索

- → 懲戒処分前の自主退学
- → 学生部に寄せられる苦情数の増加
- → コンプライアンス教育30分では不足剽窃防止のための引用法

第5分科会

第5分科会「学生の就学支援について」

加藤立久
(高等教育研究開発推進機構教授)

趣旨

- ・調査アンケート報告から本学の現状把握。
- ・各部局のフォローアップ策の報告。
- ・全学的に実施可能な効果的の就学支援策を模索する。

全学在籍学生の数%に満たない特殊例(休学・退学)ですが、「**在籍学生は全てその予備軍である**」と捉えれば、本学組織の安全ネット整備は、本学組織の”質”の向上につながる。

11:00 ～	「平成20年度休学・退学実施調査結果集計」 田平亜美子主任（教育推進部） 質疑応答
11:35 ～	「理学部における就学支援策と問題点」 福村輝美専門職員（理学部教務担当） 質疑応答
12:10 ～	休憩・昼食
13:00 ～	「情報学研究科における就学支援策」 上田隆専門職員（情報学研究科） 質疑応答
13:35 ～	「発達障害学生への就学支援策」 村田淳身体障害学生支援室員 （教育推進部） 質疑応答
14:10 ～	意見交換・ディスカッション

- ・各部局で就学支援は始まっている。
少人数クラス担任制など・・・効果あり
「先輩相談室」
- ・クラス担任制の効果を高めるための試案
ポートフォリオシステム、カルテシステム
保護者(学費出資者)への成績送付
- ・特に新入生への対人ネットワーク作りへの支援
ポケットゼミ
一泊での歓迎ゼミ
学内にバーベキュー場の開設

連番	部局名等	職名	氏名
1	高等教育研究開発推進機構	教授	加藤 立久
2	人間・環境学研究科	教授	山口 良平
3	文学研究科	准教授	金澤 周作
4	法学研究科	准教授	曾我部 真裕
5	理学研究科	教授	里村 雄彦
6	医学研究科	助教	臼井 香苗
7	工学研究科	教授	岸 和郎
8	工学研究科	准教授	幸田 武久
9	農学研究科	教授	澤山 茂樹
10	農学研究科	教授	廣岡 博之
11	情報学研究科	教授	守屋 和幸
12	生命科学研究科	講師	堀 清次
13	公共政策連携研究部(公共政策大学院)	准教授	菊谷 達弥
14	高等教育研究開発推進センター	特定准教授	及川 恵
15	保健管理センター	助教	上床 輝久
16	カウンセリングセンター	教授(センター長)	青木 健次

17	学生部	部長	富田 靖博
18	教育推進部	専門職員	清水 克哉
19	教育推進部	主任	田平 亜美子
20	教育推進部	一般職員	森 優子
21	教育推進部	身体障害学生支援室員	村田 淳
22	研究推進部	一般職員	室谷 沙織
23	総務部	一般職員	谷口 大介
24	情報環境部	専門職員	横井 邦夫
25	キャリアサポートセンター	特定職員	松尾 寛子
26	理学研究科	専門職員	福村 輝美
27	工学研究科	一般職員	飛田 絢子
28	情報学研究科	専門職員	上田 隆

9. 閉会挨拶

高等教育研究開発推進機構長 山本行男

本日は、非常にタイトなスケジュールでこのような企画をやることになりました。初めからこれがいい、という形でやったわけではないのです。諸般の事情で今日1日という形で、従来の2日というケースを1日というやり方でやりました。実はここに登壇いただいた先生方は、分科会を司会進行していただいて、ごくごく短い時間のあいだにそれをまとめていただいて、ここでまた発表していただくという、非常にハードなことをやっていたきました。それは非常に気の毒かなと思うのですが、全体の流れとしましては、私は分科会での議論がそのままこの形で全体会に流れ込んできたという今日のスタイルはなかなかよかったのではないかなと、自画自賛しているところです。

もう1つ、この場所ですが、実は私は化学研究所に長くいた関係がありまして、このことをよく知っておりました。昨年10月にオープニングがありまして、ここに寄せていただいて、非常にいい設備ができたことを知りまして、今回は京都大学の中で、なおかつ少しは非日常性のあるところがいいでしょうと考えました。時計台でやりますと、いつもの会議みたいな感じになりますので、そのようなことでここを使わせていただく形にしたのですが、非常にいい施設を使わせていただきまして、感謝しております。

それから、今日お忙しい中参加いただき、熱心に議論いただきました先生方にお礼を申し上げて、私のあいさつとさせていただきます。どうもありがとうございました。

(拍手)

鈴木 それでは、これもちまして第14回全学共通シンポジウムを終了させていただきます。どうもありがとうございました。

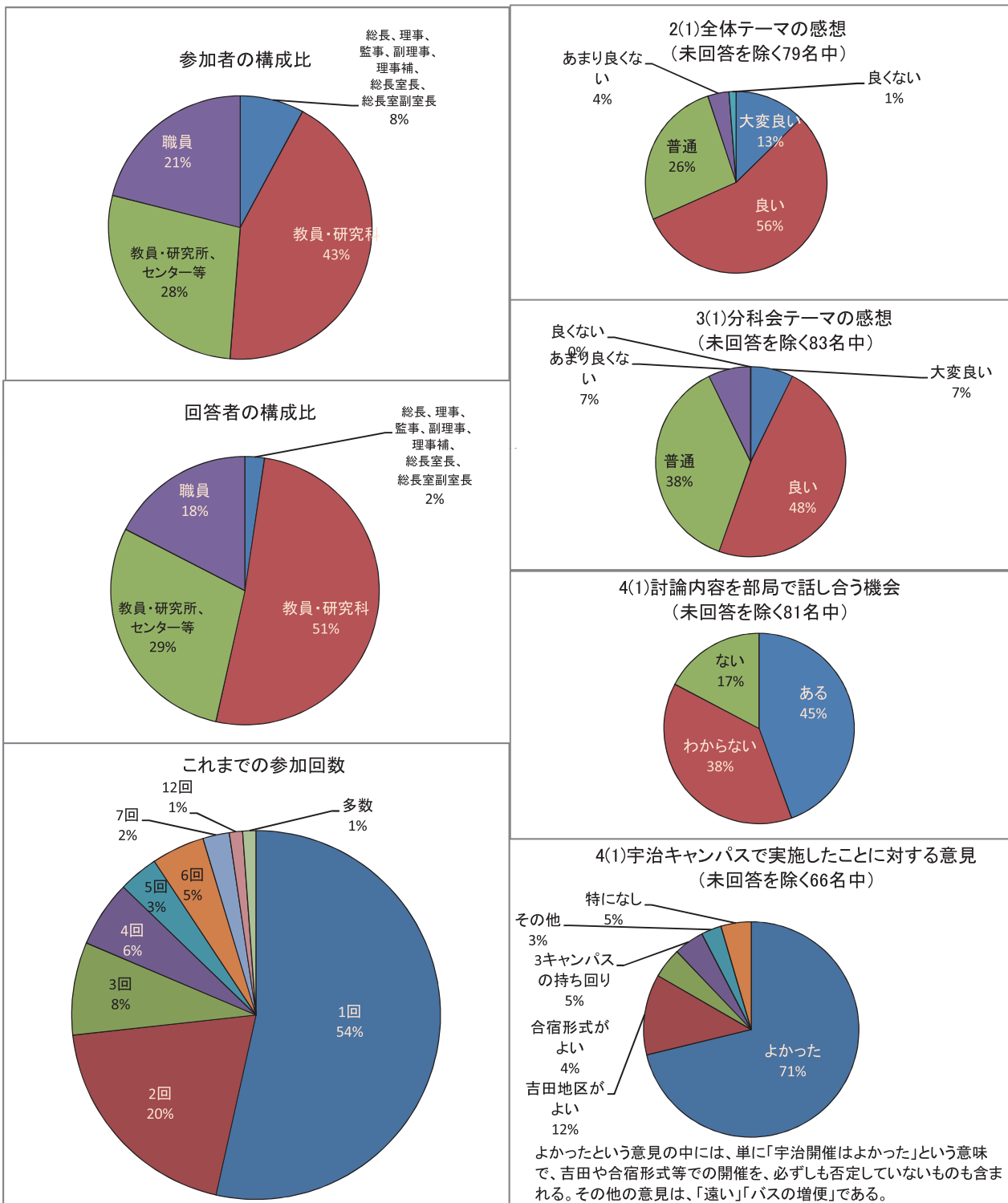
(拍手)

10. アンケート結果について

今後の改善に資するため、参加者全員にアンケート(内容は次ページ参照)を実施した。

○ 参加人数 242名

○ アンケート回答数 86名(スタッフを除くアンケート対象者224名、回収率38.4%)



平成22（2010）年度京都大学全学教育シンポジウムに関するアンケート

今後のシンポジウムの在り方を検討するために、例年アンケート調査を行っております。忌憚のないご意見・ご感想をお聞かせ願いたく、ご協力方よろしくお願ひいたします。

なお、ご提出は、会場出口の回収箱にお入れいただくか、後日、教育推進部共通教育推進課（内線：6513、FAX：6691）あてにご送付願ひます。（勝手ながら、集計作業の都合上、9/17までにお願ひいたします。）

選択式の回答の場合には、該当部分の に をつけて下さい。

- 総長・理事・監事・副理事・理事補
- 教員（研究科所属）
- 教員（研究所・センター所属）
- 職員

1. このシンポジウムへの参加は何回目ですか。（これまでに今回を含め、1～4回開催されています。）
 _____ 回目
2. 全体会議（1日目の総長基調講演、問題提起、パネルディスカッション）についてお尋ねします。
 (1) 今回の全体テーマ（京都大学の直面する教育課題について～第2期中期目標・中期計画のスタートに当たって～）についてどう思われますか。
 大変良い 良い 普通 あまり良くない 良くない
- (2) 全体会議についての感想をお聞かせ下さい。

[]

3. 分科会についてお尋ねします。 → 分科会に参加できなかった場合は4に進んで下さい。

- (1) 今回の5つのテーマ設定についてどう思われますか。
 大変良い 良い 普通 あまり良くない 良くない

- (2) どの分科会に参加されましたか。
 第1分科会 第2分科会 第3分科会 第4分科会 第5分科会

- (3) 参加された分科会についての感想をお聞かせ下さい。

[]

裏面に続く

4. シンポジウム全体についてお尋ねします。

- (1) 今回の討論内容をあなたの部局で話合う機会がありますか。
 ある わからない ない

「ある」と答えられた方にお尋ねします。それはどのような機会ですか。

[]

- (2) 今回は宇治キャンパスにおいて1日で開催いたしましたが、開催時期、会場等について、ご意見を聞かせ下さい。

[]

- (3) シンポジウムについて、ご自由にご意見をお願いいたします。

また、今後このようなシンポジウムを開催する場に取り上げるべき討論テーマについてもご提案があればお書き下さい。

[]

ご協力ありがとうございました。

整理番号	2-(2)全体会議の感想	3-(2)参加分科会	3-(3)分科会の感想	4-(1)話し合う機会		4-(2)開催時期、会場について	4-(3)自由意見
				1:ある 2:わからない 3:ない	機会		
14		4	様々意見を聞くことができ良かった。外部からの様々な評価の内容、それらに伝えるということと、教育の品質とは必ずしも一致していない。単位の実質化、標準化についての様々な学部・研究科、及び大学執行部の先生の意見が聞けていろいろ考えさせられた。	3	機会		
15	テーマに直接関係する議論ではなかったように感じた。	1		1	教授会、教授懇談会、専攻会議。	1日で十分と思う。時期も適当。確かに日常と違う雰囲気での会合は楽しかった。	
16	全体会議の目的が旨えない、方針をだすためか、教員の意識を高めるためか、執行部が教職員の意見を聞くためか中途半端。	2	成果が出る方向で、議事進行をまとめて欲しかった。	3		近い方がよい。	
17	いろいろな情報について聞いて良かった。多方面からの多様な意見があって、興味深かった。このような意見がどのような形で「実行」に反映されるかも話し合っほしい。	2	いろいろな情報が収集できてよかった。初年次だけに集中させることと、初年次以降にも続けるべきことを分けて話し合うとより多様な意見がでるかもしれない。	2		吉田で半日やるので充分。	良かった。
18		3		1	教室会の報告。	良い。	
19	京都大学の教育に関する内外の課題・問題に及び、これに対する本学執行部の考え・方向は良く理解できてよかった。	1	何を課題として議論するかがやや漠然としていた。教育に関する自学自習の多様性の理念は良いが、多様な全学共通科目の提供と学生の自立的選択の運営・質の保証をするための方法や解にいたるヒントも出なかった。	1		時間が不足。やはり合宿形式が望ましい。	分科会で討議するテーマ及び分科会として求められるアウトプットを事前に明確に構成員に示し、あらかじめ参加者に準備させるべき。テーマによるが、学生や卒業生、企業からの参加があつていいのでは？
20	基調講演で総長からは東大・早大に比べて京大の外部評価が低いというお話がありましたが、全体会議では学内学生と教員の評価に基づく議論が多く、アンバランスな印象を受けた。	4	少人数ゼミの効果は十分ありとの印象をうけたが、学内外に対する「次の一手」として、少人数ゼミをどう生かしていくのか、全体的戦略がより必要。	1	学科会議などにおいて概要と報告。	適切。	総合科学会議からは「見える化」を求められており、関西経済界からも同様のリクエストがありながら、教育の活動度・質の学外へのアピールが全くこの場で議論されないのは少し疑問である。学内での活動は在学生・教員・職員しか知りえず、卒業生ですら情報を得難い状況なので？
21		5		2			まず教育について論じるのだから、教職員だけでなく、学生の生の声を聞きながらするのがよい。次回から学生の参加を強く希望します。次に大学本部の主導でこうしたシンポジウムが開催されるのではなく、各部署の中から自発的に京大の教育について、分野を越えて話し合う場を持つべきである。中期計画とか、対文科省、対社会的な「戦略」という枠組みで教育について議論しても、本当に根本的な議論にはならないと思う。
22	基調講演では高校生のアンケートで京大のイメージが弱いという実例から始まったが、これが象徴しているように、本シンポジウムでは「京大の教育をいかに良くするか」という重要問題が「京大の教育の評価をいかに高めるか」という課題にするかえらられている。大きな誤りです。	3	初年次教育についてはもっと根本的な議論が必要と痛感した。1年次学生と接する機会を増えた方がいい。「初年次」という名称はよくないので「教養(教育)」という名を使うべきだ。	2			
23	総長の講演は大変分かりやすく、時節をよく踏まえたものであった。	1	議論が平行線。	1	講座会議。	適当である。	教員の人材確保とか、東大と比較するのであれば、東京大学駒場のスタッフ、人材と京都大学の全学共通科目実施体制を比較しなければならぬ。

整理番号	2-2)全体会議の感想	3-2)参加分科会	3-3)分科会の感想	4-1)話し合う機会		4-2)開催時期、会場について	4-3)自由意見
				1:ある 2:わからない 3:ない	機会		
24	西村副学長の熱意が伝わった。	3	日頃の関心ごとと全く異なったテーマが多かった。初めて聞くようなこともあり、刺激になったが、医学系教育ではすでに組み込まれているのではないかと感じることも多かった。	3		特にない。	
25	副題の中期目標計画の話が全く出ていなかった。	1	問題の所在について共有されず、午前中の討論が全く噛み合わなかった。	1	リーディング大学の部局対応。	阪急沿線から通勤するものからは非常に遠かった。	大くりのテーマで良いが、当日はなすべき問題などについて、分科会の冒頭で十分に明らかにしてほしい。教員個人の体験談を話し合っても、なかなか京都大学の教育システムの改善には結びつきにくいと思われる。
26		1	成績評価の方法に関する議論が参考になった。	3		手狭である。本部キャンパスの方がよい。	
27	危機的状況についての認識が得られていたようだが、あまり振り回されず、京大の特性(評価も含めて)を見失わないことも重要である。	1	各部局それぞれの対応や方針が聞けて良かった。	2		特に問題はない。1日で終了するのがよいと思う。	「京大らしさの確認」をテーマにしてほしい。
28	教員になつて1年未満なので、教育について再考する良い機会となった。	5	休学、退学調査、発達障害は参考になった。	2			新入さんにできるだけ参加して頂ければ、勉強になると思います。
29							
30		2	大変面白いディスカッションでしたが、フォーカスがもう少し絞れていると有意義だったと思います。	3		ちょうど良いと思う。	
31		4	先生方の教育研究や人間性に根差した初年次教育の在り方にとっても刺激を受けました。ありがとうございました。	2			とても有意義なシンポジウムで、特に分科会担当の先生方には深く感謝申し上げます。全体的な取り組みの中で見出せた個々の課題にも継続的に取り組むことができれば、双方方向性に意見交換できる機会があれば幸いです。本来は教員が自発的に行うべきかもしれませんが。。。シンポジウムの参加にあたって、事前に資料を集めようとしたが、着任早々とのこともあり、かなりの困難を極めました。教員間から情報を得ることがまずは優先されますが、報告書などはホームページ上か、部局毎で見られるようにして頂けると助かります。
32	時間は守ってプレゼンしてください。	1	議論が必ずしも噛み合わない。今後の方向性ははっきりしない。	1	コース会議。教務教育委員会。	京大本部で開催して欲しい。	
33	勉強になりました。京大の教育の問題点の一端がわかりました。	1	勉強になりました。今までなされたシンポジウムでの語らいのサマリーをはじめにして頂くことができれば、もっと討論が進んだかもしれません。	1	コース会議で報告する予定。	開催時期は夏期休講中でよい。会場は、宇治キャンパスは初めての訪問で良かった。	米国の大学では、“入学は容易、在学中の勉強はきびしく、卒業するバーセーションは低い”と認識しています。わが国の“入試が難しく、在学中の勉強、進級は容易、卒業も容易”という今までのやり方で、欧米の大学卒業生に互して世界で活躍していけるのか？という議論を希望します。

整理番号	2-(2)全体会議の感想	3-(2)参加分科会	3-(3)分科会の感想	4-(1)話し合う機会		4-(2)開催時期、会場について	4-(3)自由意見
				1:ある 2:わから ない 3:ない	機会		
34		3		1	工、教育シンポジウムにて。		
35		2	全学教育の国際化と専門教育での国際化とのつながりが分かりにくかった。教員自身の国際化のために必要な素養を上げさせる機会もいつようでないか？	2		よいと思います。ただ、分科会での議論時間はもう少し長くてもよかったです。	全学教育について考える良い機会を与えていただきました。
36	京大もずいぶん変わったものだ、と思いました。	3	いろいろ工夫されていることが分かりました。	2		特に問題ありませんが、本部構内だとより良いです。	教育は小中高の枠組みからの影響も大きい。そこに働きかけるために、入試の形式の変わるべきではないかと思えます。また、卒業時の成績評価も大事です。以上2つ ①入試形式 ②卒業時の成績評価・保証を提案します。
37		3	●議論に偏りがあり、本質的な部分の議論が皆目に近かった。不祥事とカルトに議論が集中。	2			昔に比べると形は整っているが、意見交換が散漫になっている。焦点を絞って、学校側の最も問題を感じているテーマを中心をすべきである。 変革を本気で実行していくつもりなのか疑問である。全学共通教育は、必須単位数を減らすこと、1年間で取得できる単位数を制限すること、この2つを実行する以外にないことは明らかである。これは反対もあることは承知している。しかし総長・運営陣が決断するだけである。そして実行してゆけば、必ず、前期2年間は向学心を継続させることが可能になると思われる。細かな部分では、受講生の数の制限も行う必要もあるだろうし、レポートなどの評価についてもホームページからの切り貼りやいい加減な内容のものは「指導」して改善させるような方法もとる必要があるだろう。 1回生の頃から各学部が学生を把握する方策もかんがえなければならぬ。 国際化については、英語教育の講師をTOEFLなどのテストで何点以上、留学経験3カ月(又は6カ月以上)というような限定をつけるべきである。英文科の教員は細かく読むことだけを重視するので「話す」「聞く」ができなくなるのは当然のことである。つまり英語教育を英米文教員から取り上げてしまうのである。 さまざまな意見が出ていたが、年寄りの理屈ばかりで、こまごま意見をいくらか出し合っても仕方ない。松本、西村両名が決意するかどうかである。

整理番号	2-(2)全体会議の感想	3-(2)参加分科会	3-(3)分科会の感想	4-(1)話し合う機会		4-(2)開催時期、会場について	4-(3)自由意見
				1:ある 2:わからない 3:ない	機会		
38		2	学術段階が対象だからなのかもしれないが英語に関する議論に偏りすぎのようと思う。	1	研究科会議	適切(1泊2日でもよい)	国際交流について論じる際、あまりに英語関係に集中しているの、より広い視野で取り上げてほしい。留学生の受け入れ態勢について
39	時間がタイト。	1	論点の整理が大切だが、当日にならないうと論点が出てこないのが難しい。	2		十分	事前に学生側の意見を収集しておくことでギャップが埋まる気がします
40	論点が多岐にわたっている為、議論が表面的で抜本的。全体会議(パネルディスカッション)は、テーマをひとつに絞って、それを多角的・多面的に議論する方が内実あるように思う。	1	前半は成績の標準化という論点をめぐって活発な意見交換があったが、後半は焦点が定かなく、議論も拡散してしまっただけのように思う。今、何が問題であり、何が持論すべき点か明確にしたうえで議論できればよかったと思う。	1	話し合おうとすれば、講座の教員たちに。ただし、そこで話し合うべき内容かは疑問。	遠方で1泊となるとなかなか参加しづらいが、宇治で1日というのはハードルも低いように思う。会場は大変よかった。	準備に携わられた教職員の皆さま、お疲れ様でした。他、部局の方々のご意見や情報をお知らせいただき、ありがとうございました。また、分科会でも個々の発言に関する議論は大変参考になる示唆的なものもありましたが、全般的に議論としては断片的でとりとめがないように思います。全学で問題を共有し合う場は大切だと思いました。
41		5	質がよかったです。発言者とそのテーマのレジュメがあればよかった。	3		場所については適当だったと思う。問題があるとすれば、分科会会場のトイレに苦勞しました。	
42		1	散漫だった。	2		適当だと思う。	
43	パネルディスカッションにおける諸報告はどの方もとても有益でした。	1		2			
44		3	●まとめている先生と参加している先生の意見が噛み合っていない。取りまわし、参加者の意見が取りあげられずに進んでいるようだった。 ●参加者の意見は勉強になった。 ●字部のある先生と事務の人の問題意識とまとめている先生、学部を持たない先生で問題意識に差がある。	2		懇親会に参加させるためには、以前のようには1泊にすべきだと思う。	全学共通教育/初年次教育/少人数教育の区別がよくわからない。初年次教育の中に、全学共通、少人数用幾の話題が入っており、論点がはつきりしていない。取りまとめるの先生によりすぎ。
45	事前に全体テーマについての資料などの配布があった方が良かった。	1	具体的なテーマの提示を事前に配布してほしい。	2			こういうシンポジウムがなければ、おそらく絶対に顔を合わす機会などない他部局、センター、研究所の先生方と「教育」という共通の話題で語り合えるのはこのシンポジウムの大きな意義の1つと思う。また京大は美に多彩で個性的な教員が大勢おられること分分かるのも魅力の1つです。分科会の司会進行役にはその分科会テーマについて情報を持った方があつたのが、分科会を建設的に成功に導く鍵だと分かった。各部局の教育システムについて知る機会が少ないうえ、たとえば理学部の少人数教育やセンター制度など参加者になる取り組みを知ることができたのは収穫であった。
46	数値をあげて京大の教育を客観的に見せられるのは効果的で危機感や緊張感をもたせさせる導入講演としては成功したように思う。「理念をどう実践に結びつけるか」という明確な議論の方向性が示されたのは後の分科会で役に立った。	4	小さなグループでの分科会だったのでも、いろいろ本音や問題がフェイストウフェイスで聞けた。野田先生の司会進行も建設的な意見を出すのに役立ち、提示された問題点にはほぼ全て何らかの答えがだされたのではないかと。特にホケゼミに受講希望を出しなから抽選でもれてしまい受講できなかった学生をいかに救済するか、他のゼミに収容するなどの方が、開講数を増やすより重要であるかが分かった。	2		多大な予算を使って1泊2日で京大外で行うより、ずっと効率的だったと思う。開催時期はもう少し早めてもよい。この時期より少し遅いと、科研費申請の時期や学会等と重なり参加は難しいかもしれない。会場は、吉田、宇治、桂キャンパスの持ち回りにすればよい。	

整理番号	2-2)全体会議の感想	3-2)参加分科会	3-3)分科会の感想	4-1)話し合う機会		4-2)開催時期、会場について	4-3)自由意見
				1:ある 2:わからない 3:ない	機会		
47		1	まとまりがない。	3	良い。	教育用の経費配分について実状にあった(教育用の時間配分や必要教材など)制度を考えて欲しい。	
48	全体論と分科トピックには距離あり?	4	コンパクトでよかった。	2	毎回別の施設で。		
49	幅広い課題を認識できてよかった。	2	難しい議論だったが勉強になった。	2	よい。	毎年多くの問題が発生すると思う。教員、部局相互の理解のために適宜取り上げて欲しい。	
50	様々なことを知る機会になり、良かったと思います。しかし全体のテーマについてより具体的な紹介があれば、良かったのではないだろうか。課題の切実さが伝わらなかつた上、解決の方向性の具体的な必要性などについてももう少し伝わる形になればよかったと思います。	2	もう少し本質的な問題についても取り上げて欲しい。	1	部局(センター)がすべき役割の関係で、関心を持っていない数名で話し合った。教員会議で紹介された。	準備などが大変だったのでではないかと思えます。ありがとうございました。様々なことを知り、考える機会になりました。今後取り上げて欲しいテーマ ・新入生のニーズにどこまで応えられているのか ・近年の大学生の変化 ・可能性の場としての大学の在り方 ・授業形態の様々なモデル(学生主体の教育を実施するための形態) ・日本人学生と留学生の共学の在り方	
51		5	面白かった。	2	近くて良い。		
52	議論が明確で分かりやすかった。	1	「共通」教育の理念の難しさを感じた。	1	教員会議で報告と議論。	きれいな所でよかったです。	
53		5	意外に活発な意見あり。	1			
54		3		1	会議など。	美しい会場で、良い居心地でした。	
55		3	テーマと内容が合致していなかった。	1		吉田で。	
56		1	北大の総合選抜、口振りの例示、成績の正類分布化など京大の教育とかけ離れたトピックがかえってディスカッションを活性化させた。ただ京大らしさを常に追求してほしい。	1			Localityを大切にすることをコンセンサスをもてればと思う。そのLocalityにこもるのではなく、対話の場が必要。その意味でも「対話を根幹」が原則ではと改めて感じた。
57	総長の話には初めて聞くことが多く、執行部の危機感がよく理解できた。	4	京人数教育をボケゼミと理解し参加された方がおられたので、分科会の選択に際して、簡単な説明があるとうよい。ただし、分科会全体は非常に中身の濃いものであり、多様な部局の教員から建設的な意見が出された。	1		開催時期、会場ともよかった。以前のよう、豪華ホテルで泊2日の合宿研修を必要はないし(予算の問題)、昨年のように吉田キャンパスでやると、途中で抜ける人が生まれやすい。	全体会における、各分科会の報告は10分程度でよいのでは? 20分取るのであればスライドが欲しい。

整理番号	2-(2)全体会議の感想	3-(2)参加分科会	3-(3)分科会の感想	4-(1)話し合う機会		4-(2)開催時期、会場について	4-(3)自由意見
				1:ある 2:わからない 3:ない	機会		
58	<ul style="list-style-type: none"> ●京大の相対的な外部からの評価は興味深かった。 ●明言は難しいと思うが、京大の教育の方向性が不明確。一握りの天才、スーパードクターを作りたいのか？ドロップアウトをゼロにして全体的底上げを行うのか？どちらを指す？ ●総長のカレッジ構想(リーディング大学院)は同意しかねる。スーパードクター養成は困難で薄っぺらい人間が生産されると思う。 	3	<ul style="list-style-type: none"> ●京大の方向性が不透明。オナーズ型を指すのか、ドロップアウト型を指すのか。個人的には全社が京大らしい。 ●ポケゼミは充実すべき。土曜開講を可能にしてほしい。各学部には、学生数と同数の定員のゼミを提供させるべき。プラス附置研やセンターにも提供してもらおう。 	2	よい。	<p>バーベキュー場大賛成です。各地区ごとに。ポケゼミあるいは少人数担任制でもよいのですが、「全員で運営する」ための経費や機会を設けるべき。本当は飲み会がよいけど。</p> <p>学生の孤立化を絶つことが重要と意見がでていました。孤立化は初年次のみ起こることではないので、ポケゼミ・初年次教育のみに頼るのは危険です。私は体育会に属していましたが、新入部員勧誘は夏休み明けや2年次春も有効かと思っていました。それはその時期に寂しい学生が出てくるからです。</p> <p>文理融合型大学院について、京大は総合人間でトータルに成功していますか？その総括は必要です。</p>	
59	総長のプレゼンはよく作られていた。	5	もう少し具体的な話ができればよかったです。	1	学部間直接関係している。	宇治キャンパスは良いと思います。	温故知新
60	教育改革への取り組みへの早急な対応が迫られていることを認識した。			1	全教育が集まる拡大大教授会。	適当であった。	
61	踏み込んだ内容で刺激になりました。	4	知らないことが多く、参考になった。	1	普段の会話の中や会議で。	バスの便をもう少し増やして欲しい。	
62		1		2		大変良い。	<p>全学教育シンポジウムで学生の教育だけを議論するのは片手落ちである。教員・職員の教育トレーニングがなくては学生に対する「良い」教育は不可能である。</p> <p>教職員間のトレーニングシステムも構築すべき。ただし、教職員間・教職員間の切磋琢磨と各自の自己研鑽の支援を主とすべき。教職員の「自学自習」を支援すべし。評価システムの確立も急務。全学共通科目を、全学生、全教員、全職員に！</p>
63	問題点の提起は適切であった。	2	教育(特に学部)の国際化の意味について有意義な議論があった。特に文系、理系のスタンスの差が明らかになり学部教育の問題に集中できた。	1	教授会、部局間の連絡会。	結構だと思います。	
64	議論のテーマがいまいちわからない。	1	議論の前にテーマを絞るべき。	2		できれば時計台記念館でやっていただきたい。	
65		1	熱意はあったが議論は噛み合っていないかった。	2		今回のとおりでよい。	<p>分科会の内容について、事前にもう少し詳しい説明が欲しかった。私は今回、第一分科会に参加したが、「少人数制教育」がポケゼミのことだと知っていれば、そちらに参加した。「就学支援」というのも経済問題をとり上げるものだったと思う。</p>

整理番号	2-②全体会議の感想	3-②参加分科会	3-③分科会の感想	4-(1)話し合う機会		4-(2)開催時期、会場について	4-(3)自由意見
				1:ある 2:わからない 3:ない	機会		
74		3	貴重な意見が出されたが、後半に用意されていたプレゼンテーションと重なっておらず、議論を深めることができなかった。	3		開催時期はよい。たまに宇治に来ることも良いが、次回は吉田で開催してもらえると有り難い。	職員の参加が少ないのが残念です。テーマ設定も含め、もっと参加するように促してはどうか？
75	総長のパワーポイントの資料はよくわかりました。	5	学生が休学・退学になるまでの予防措置として、学生が「京大さばく」で迷わないように教員と学生、職員と学生、学生と学生とのコミュニケーションの場をいろいろな形で設けていく必要性を感じました。	3		適当だと思います。	初年次教育の必要性が議論されていますが、新入生のサポートは非常に必要です。新入生のためのアドバイザーを吉田南構内に設置し、上級生にアドバイザーがもらえる様にスタッフとしてTAやOAAとしていつでも対応できる場を設けてはいかがでしょうか？
76	総長の講演での「次世代リーダー育成」については非常に感銘を受けましたが、その話とそれに続く問題提起、その後の分科会での講演、議論が繋がっていないからでしょうか？それぞれが言いたいことを言いました、感がありました。	5	テーマの設定が大きすぎて、焦点が定まらなかった。第五分科会「就学支援」に出ましたが、「就学支援」という言葉の捉え方が、各教員、職員がばらばらで話が拡散しすぎました。また進行役も、あとの発表のことが気になって細部の確認が多く、議論が盛り上がりつつも冷ましてしまう場面も多かったです。また発言を教員にばかりもためており、やはり教員と職員の協働は期待できないと思います。	3		宇治キャンパスで開催されたのはとてもよかったです。日頃の業務からさちんと離れて集中して、議論ができた場があるのは有意義だと思います。あまり改革につなげるような気がしません。議論だけ感があります。	総長が「次世代リーダーのための大学にしたい」という問題提起をされたのだから、その後の問題提起や分科会も含めて「次世代リーダー育成」について議論したかったです。総長はじめ、東大を非常に「マイルド」視されていたようですが、東大は「官僚育成」と「偏差値No.1」という特徴があります。これに対して京都大学に明確な特徴がないのが、高校生のランキングの順位に下がる原因ではないでしょうか？「次世代リーダー、民間の企業界やアカデミアでもリーダーになる者は京大卒」という特徴がつかれたらものすごくワクワクします。そのためには「次世代リーダー」についてのご論を全学で深めていけたらと思います。日本の企業も10年ほど前から次世代リーダーの育成を研修や選抜とともに行ってはいますが、ほとんどがうまくいっていません。大学の英知を集結してぜひ、実現してほしいです。議論が全体に後れた子、未熟な子に偏っていたように感じます。休憩時間の舟橋先生のお話は大変非常に面白かったです。金2の授業に毎週出たいくらいです。このセッションが一番良かったです。いつか市民大生と報告は既定路線のままのように感じます。やはり議論や報告は既定路線のままのように感じました。より自由で活発な討論にしたいです。
77	西村理事が「職員力を信じよう」と提起して頂けたことが事務職者としてうれしく思いました。「教職協同」はぜひ「教職協働」に進めることが学生のためにも重要だと思っていましたので、これも京大の中で進められたらいいなと思います。私学ではどこもされていませんので。	5	進行の先生が上手に参加者の意見をひきだして下さった。教員と職員が一緒に考えることに意義深く新鮮な気がしました。				

整理番号	2-(2)全体会議の感想	3-(2)参加分科会	3-(3)分科会の感想	4-(1)話し合う機会		4-(2)開催時期、会場について	4-(3)自由意見
				1:ある 2:わからない 3:ない	機会		
78	導入として適切。	2	●平凡、つまこみが不足している。 ●テーマに対して発言内容がマッチしている。 ●議論のためのたたき台としての内容を持っている 以上より議論が充実しない。	1	教授会、各種委員会、日常業務中	宇治勤務のため有り難かった。	分科会について研究的内容が多く、実践から程遠い。今回は教育改革を「実行」している人たちの発表を聞きた。統計ばかりでフィールドの生データが全くないのは教育に直接携わっているはずの発表者であるはずだが不自然に感じる。全般に「授ける」ことに未だとらわれている傾向が強く、教育を学習という能動的側面から取り組んでみる視点(学習者の視点)が全く欠けている。発表者の性差の偏りも異常に感じた。醸成研究者に役目を押し付けているように思われなにか心配になるほどであった。
79		5		1	各種委員会、会議	丁度良い。	
80		3	意見交換会としても良いが、明日から一歩でも踏み出すために、1つでもいいから提言を出すべき。	1	掛長会議で意見交換	1日で、学内でよい。	学生の海外派遣/留学生の受入れの目的、教員の本音、サポート。国際化を含めて。
81		2	想定していたテーマから少し離れていたので、議論についていけないところもあったが、「国際化とは」について基本的な部分から考えるよい機会になった。	2			留学生のサポート。G30での留学生増加に伴う日本人学生のサポート、英語力の底上げ。
82	大学職員の一員として、現状における当大学の位置付け、更にはこれからの方向性といったものを改めて確認できた。	3	学生に対する効果を上げる取り組みとして、「身近な」先輩による「実」体験に基づいた話が有効であると実感しました。	1	まずは課内において、情報や今日の貴重な意見の教々を紹介しませす。	1日で集中した時間にやっつけていただいたことはとてもよかったです。	教員と職員の関わり方の現状とこれからについて検討してもいいと思う。
83	分科会と違えば全体的な話しがあり、大学全体で何をすべきかが明らかになったように思う。総長が言っていたように、分科会で議論されたことを実行すただと思う。	2	教育の国際化という今後避けては通れないことを討論できたのは大変有意義であった。色々な意見が出ていたので、早くそれを実行していかねければいけないと思う。英語をはなせるようになるには、強制的に海外へ留学させる必要があると思うが、財政的支援や単位認定についても同時に進めていくべき。	2		開催時期については、良い時期だと思う。会場については、本部(吉田)キャンパスでもいいと思う。	
84	全体会議での問題提起の方向性は整合がとれていて、良く理解できたが、もう少し論点を絞り込んだ方がよい。	1	第一分科会での論点、分科会として目指すものを明確に示し、その上で各論を議論し、結論を出すべきであった。			宇治、桂など、本部以外の会場の方が「シンポジウム」らしさが出されて良いのではないですか。	もっと職員も参加するような工夫が必要。職員の学習の場としてシンポジウムを捉えることも必要では？

整理番号	2-(2)全体会議の感想	3-(2)参加分科会	3-(3)分科会の感想	4-(1)話し合う機会		4-(2)開催時期、会場について	4-(3)自由意見
				1:ある 2:わからない 3:ない	機会		
85	<p>総長、理事の先生の方針が分かってよかった。西村理事からの問題提起によって分科会で議論すべきことが明らかになり良かったと思う。</p>	1	<p>全学共通科目の評価について議論がなされたが、正規分布するような成績評価は難しいと感じた。一人ひとりの先生が一人でも多くの学生に理解してもらいたい、すべての人に「優」をとってもらいたいという形の教育を目指しておられるのを再確認するとともに、これが京大らしい教育の在り方かと思うと、世論が要求する相対評価は全学共通科目にはなじまないように感じる。全体として多くの教員の全学共通科目の捉え方を興味深く聞かせていただいた。</p>	3	<p>教授会で報告はするが、討論内容まで及ぶかどうかは分からない。</p>	<p>淡路島で1泊2日より今回の方がかえってよかったように思う。開催時期も良かった。</p>	<p>大学入試の在り方について分科会で取り上げてはどうか？</p>
86	<p>バックに哲学のない研究は本当の研究でないと思う。いろいろな考え方、ものの方には大変重要ではないか。専門的な部分を磨くだけではどどんどん文化し、木を見て森を見なくなってしまう。</p>	1	<p>総合大学の利点をフルに生かすような全学教育ができることを主眼に議論がほしい。各学部の都合やエゴでは問題解決にならない。</p>	1	<p>今回の日程はなかなか良いと思う。場所も問題は無い。ただ参加者をどういう基準で選ぶかは部局に任されているが、それでよいのか？</p>	<p>「教育をしないのが京大の教育」これはこれでよい。センター入試からは外れないか。新入生のレベル低下は社会・課程の問題であろう。より教養のある人を受け入れるためにもかつての入試(理系は理科2科目、社会1科目。文系は理科1科目、社会2科目。すべての学部とも900点満点。法学部、数学0点でも合格)でもいじやないですか？</p> <p>総長の話で、教育で一番にならなくても良いのでは。他の大学学長からすればらしいといっている研究をキープしていくべき。ただ、このような教育へ意識を持ち続けていくことが非常に重要だと考える。</p>	

11. 参加者名簿

部局名等	職名	氏名	分科会	部局名等	職名	氏名	分科会
総長	総長	松本 敏	指定なし	医学研究科	准教授	小川 正	4
理事	理事(総務・人事・産官学連携担当)	塩田 浩平	1	医学研究科	准教授	石崎 敏理	4
理事	理事(企画・評価担当)	江崎 信芳	1	医学研究科	准教授	石崎 達郎	4
理事	理事(財務・広報担当)	西阪 昇	1	医学研究科	講師	金岡 緑	4
理事	理事(外部戦略・情報・安全管理担当)	大西 有三	2	医学研究科	助教	内海 桃絵	1
理事	理事(教育・学生担当)	西村 周三	指定なし	医学研究科	助教	臼井 香苗	5
理事	理事(施設担当)	藤井 信孝	1	薬学研究科	准教授	高須 清誠	3
監事	監事	平井 紀夫	1	薬学研究科	講師	川上 茂	1
副理事	高等教育研究開発推進機構長	山本 行男	1	工学研究科	教授	中部 主敏	1
副理事	国際交流推進機構長	森 純一	2	工学研究科	教授	琵琶 志朗	1
副理事	環境安全保健機構長	大馬 幸一郎	1	工学研究科	教授	白川 昌宏	1
副理事	副理事(宇治・遠隔地キャンパス担当)	川井 秀一	1	工学研究科	教授	高橋 大武	3
理事補	理事補(企画・評価担当)	淡路 敏之	1	工学研究科	教授	土居 伸二	3
理事補	理事補(教育・学生担当)	南川 高志	1	工学研究科	教授	伊藤 紳三郎	3
理事補	理事補(教育・学生担当)	高見 茂	3	工学研究科	教授	松原 誠二郎	2
理事補	理事補(施設担当)	石原 和弘	1	工学研究科	教授	米田 隆	2
文学研究科	教授	吉岡 洋	3	工学研究科	教授	岸 和郎	5
文学研究科	教授	木田 章義	3	工学研究科	教授	北野 正雄	1
文学研究科	教授	櫻井 芳雄	4	工学研究科	教授	跡見 晴幸	1
文学研究科	教授	伊藤 和行	4	工学研究科	准教授	西山 哲	1
文学研究科	准教授	金澤 周作	5	工学研究科	准教授	船戸 充	1
文学研究科	准教授	家入 葉子	2	工学研究科	准教授	福塚 友和	1
文学研究科	事務長	中山 圭史	3	工学研究科	准教授	西藤 潤	3
教育学研究科	教授(研究科長)	辻本 雅史	1	工学研究科	准教授	牧 泰輔	3
教育学研究科	教授	鈴木 晶子	指定なし	工学研究科	准教授	後藤 忠徳	4
教育学研究科	教授	前平 泰志	3	工学研究科	准教授	村上 定義	2
法学研究科	教授(研究科長)	林 信夫	1	工学研究科	准教授	幸田 武久	5
法学研究科	教授	寺田 浩明	1	工学研究科	助教	寺田 大特	3
法学研究科	教授	洲崎 博史	3	工学研究科	助教	佐藤 喬章	2
法学研究科	教授	船越 資晶	4	工学研究科	主任	中村 教朝	2
法学研究科	准教授	曾我部 真裕	5	工学研究科	一般職員	飛田 絢子	5
法学研究科	事務長	二塚 伸和	1	農学研究科	教授	稲村 達也	1
経済学研究科	教授	小島 専孝	1	農学研究科	教授	栗山 浩一	1
経済学研究科	准教授	敦賀 貴之	4	農学研究科	教授	村上 章	1
経済学研究科	准教授	神事 直人	2	農学研究科	教授	小川 順	3
理学研究科	教授	上田 哲生	1	農学研究科	教授	野田 公夫	4
理学研究科	教授	泉 正己	1	農学研究科	教授	宮川 恒	4
理学研究科	教授	太田 耕司	1	農学研究科	教授	木村 恒久	2
理学研究科	教授	上 正明	3	農学研究科	教授	澤山 茂樹	5
理学研究科	教授	丸岡 啓二	4	農学研究科	教授	廣岡 博之	5
理学研究科	教授	加藤 毅	2	農学研究科	准教授	谷 史人	3
理学研究科	教授	高橋 義朗	2	農学研究科	助教	真常 仁志	2
理学研究科	教授	中家 剛	2	農学研究科	教育・研究協力課長	原田 健二	1
理学研究科	教授	里村 雄彦	5	農学研究科	主任	松本 宗一郎	3
理学研究科	准教授	藤本 聡	1	農学研究科	一般職員	小暮 聡子	2
理学研究科	准教授	菅沼 秀夫	1	人間・環境学研究科	教授(研究科長)	富田 恭彦	1
理学研究科	准教授	渡邊 一也	1	人間・環境学研究科	教授	森本 芳則	1
理学研究科	准教授	三宅 亮	3	人間・環境学研究科	教授	岡 真理	1
理学研究科	准教授	小山 時隆	3	人間・環境学研究科	教授	川島 昭夫	1
理学研究科	助教	井上 武	2	人間・環境学研究科	教授	内田 賢徳	1
理学研究科	専門職員	福村 輝美	5	人間・環境学研究科	教授	宮本 嘉久	1
医学研究科	教授	今中 雄一	1	人間・環境学研究科	教授	石川 尚人	4
医学研究科	教授	足立 壯一	1	人間・環境学研究科	教授	山口 良平	5
医学研究科	教授	中泉 明彦	1	エネルギー科学研究科	教授	塩路 昌宏	1
医学研究科	教授	萩原 正敏	2	エネルギー科学研究科	教授	手塚 哲央	2
医学研究科	教授	岩田 想	2	アジア・アフリカ地域研究研究科	教授	玉田 哲史	1
医学研究科	教授	坂田 隆造	3	アジア・アフリカ地域研究研究科	准教授	東長 靖	2
医学研究科	教授	二木 淑子	3	情報学研究科	教授(研究科長)	中村 佳正	1
医学研究科	教授	玉木 敬二	4	情報学研究科	教授	田中 克己	1

部局名等	職名	氏名	分科会	部局名等	職名	氏名	分科会
情報学研究科	教授	岩井 敏洋	2	高等教育研究開発推進センター	教授（センター長）	田中 每夷	3
情報学研究科	教授	山本 章博	3	高等教育研究開発推進センター	教授	吉田 純	1
情報学研究科	教授	守屋 和幸	5	高等教育研究開発推進センター	教授	大塚 雄作	1
情報学研究科	特任准教授	中村 聡史	3	高等教育研究開発推進センター	教授	赤松 紀彦	1
情報学研究科	特任助教	辻 高明	4	高等教育研究開発推進センター	教授	小山田 耕二	3
情報学研究科	特定職員	椋勢 久恵	3	高等教育研究開発推進センター	教授	松下 佳代	4
情報学研究科	専門員	上田 隆	5	高等教育研究開発推進センター	准教授	桂山 康司	2
生命科学研究科	准教授	千坂 修	3	高等教育研究開発推進センター	准教授	田口 真奈	4
生命科学研究科	講師	堀 清次	5	高等教育研究開発推進センター	准教授	田中 真介	4
地球環境学堂	教授	藤井 滋徳	2	高等教育研究開発推進センター	助教	坂本 尚久	3
地球環境学堂	准教授	西前 出	3	高等教育研究開発推進センター	特定准教授	酒井 博之	2
地球環境学堂	主任	廣瀬 泰子	2	高等教育研究開発推進センター	特定准教授	及川 恵	5
公共政策連携研究部 （公共政策大学院）	准教授	菊谷 達弥	5	高等教育研究開発推進センター	特定助教	半澤 礼之	3
経営管理研究部 （経営管理大学院）	教授	原 良憲	2	総合博物館	准教授	塩瀬 隆之	1
化学研究所	教授（副所長）	渡辺 宏	2	低温物質科学センター	准教授	松原 明	1
化学研究所	教授	佐藤 直樹	1	フィールド科学教育センター	講師	中島 皇	1
化学研究所	教授	中村 正浩	1	福井謙一記念研究センター	准教授	佐藤 徹	3
化学研究所	教授	平竹 潤	4	ころの未来研究センター	教授	船橋 新太郎	1
化学研究所	教授	辻井 敬亘	1	高等教育研究開発推進機構	教授	舟橋 春彦	1
人文科学研究所	教授	稲葉 穰	1	高等教育研究開発推進機構	教授	加藤 立久	5
人文科学研究所	事務長	岡田 智恵美	3	高等教育研究開発推進機構	准教授	高橋 幸	2
再生医学研究所	准教授	角 昭一郎	1	高等教育研究開発推進機構	特任准教授	ステューブ トレンソン	2
エネルギー理工学研究所	教授（所長）	尾形 幸生	1	附属図書館	准教授	古賀 崇	3
エネルギー理工学研究所	教授	片平 正人	2	産官学連携本部	准教授	金多 隆	2
エネルギー理工学研究所	教授	坂口 浩司	2	保健管理センター	助教	上床 輝久	5
生存圏研究所	教授	矢野 浩之	2	カウンセリングセンター	教授（センター長）	青木 健次	5
生存圏研究所	准教授	高橋 けんし	1	大学文書館	助教	福家 崇洋	1
生存圏研究所	准教授	橋口 浩之	1	学際融合教育研究推進センター	特定職員	益田 岳	1
生存圏研究所	助教	鈴木 史朗	1	学生部	部長	富田 靖博	5
防災研究所	教授（所長）	岡田 憲夫	1	学生部	学生課長	水野 晴史	3
防災研究所	教授（副所長）	寶 馨	2	学生部	専門員	小島 光明	1
防災研究所	教授	戸田 圭一	1	教育推進部	部長	中崎 光明	指定なし
防災研究所	准教授	林 泰一	4	教育推進部	教務企画課長	藤咲 仁一	指定なし
防災研究所	准教授	畑山 満則	1	教育推進部	専門員	清水 克哉	5
基礎物理学研究所	准教授	村瀬 雅俊	1	教育推進部	主任	田平 亜美子	5
ウイルス研究所	教授	眞貝 洋一	2	教育推進部	一般職員	森 優子	5
経済研究所	教授	西山 慶彦	2	教育推進部	事務補佐員	村田 淳	5
経済研究所	教授	今井 晴雄	4	教育推進部	共通教育推進課長	山本 淳司	指定なし
数理解析研究所	教授	中島 啓	1	研究推進部	部長（総長室副室長）	浅野 敏行	1
原子炉実験所	教授	大久保 嘉高	2	研究推進部	一般職員	室谷 沙織	5
原子炉実験所	准教授	田野 恵三	4	国際部	部長	戸倉 照雄	2
霊長類研究所	准教授	宮地 重弘	1	総務部	広報課長	高見 純子	3
東南アジア研究所	教授	河野 泰之	2	総務部	一般職員	谷口 大介	5
東南アジア研究所	一般職員	田代 隆之	2	情報環境部	部長	寺中 哲雄	2
iPS細胞研究所	教授	木村 貴文	2	情報環境部	情報企画課長	上條 春毅	2
学術情報メディアセンター	教授（総長室副室長）	美濃 導彦	1	情報環境部	専門職員	横井 邦夫	5
学術情報メディアセンター	教授	河原 達也	2	情報環境部	専門職員	植木 徹	1
放射線生物研究センター	助教	土生 敏行	3	学生センター	センター長	畑 勝	3
生態学研究センター	准教授	大園 享司	1	キャリアサポートセンター	特定職員	松尾 寛子	5
地域研究統合情報センター	教授	貴志 俊彦	2				
放射性同位元素総合センター	教授（センター長）	川本 卓男	1				
環境保全センター	助教	浅利 美鈴	1				
国際交流センター	教授	バリハワダナ ルチヲ	2				
国際交流センター	准教授	河青 正愛	2				
国際交流センター	准教授	河合 淳子	2				
国際交流センター	助教	渡部 由紀	2				
国際交流センター	特定助教	西川 美香子	2				

第1分科会	:	69名
第2分科会	:	50名
第3分科会	:	37名
第4分科会	:	22名
第5分科会	:	28名
指定なし	:	6名
全体会議のみ参加	:	12名
スタッフ	:	18名
合計	:	242名

部局・役職別参加者数

部局名等	役員等	教授	准教授	講師	助教	特任 准教授	特任 助教	特定 准教授	特定 助教	特定 職員	その他 (事務職員、技術 職員等)	総計
総長	1											1
理事	6											6
監事	1											1
高等教育研究開発推進機構		2	1					1				4
環境安全保健機構										1		1
産官学連携本部			1									1
附属図書館			1									1
文学研究科		5	2								1	8
教育学研究科		4										4
法学研究科		4	1								1	6
経済学研究科		1	2									3
理学研究科		10	5		1						1	17
医学研究科		8	3	1	2							14
薬学研究科			1	1								2
工学研究科		11	8		2						2	23
農学研究科		9	1		1						3	14
人間・環境学研究科		8										8
エネルギー科学研究科		2										2
アジア・アフリカ地域研究研究科		1	1									2
情報学研究科		5				1	1				1	9
生命科学研究科			1	1								2
地球環境学堂		1	1								1	3
公共政策連携研究部(公共政策大学院)			1									1
経営管理研究部(経営管理大学院)		1										1
化学研究所		5										5
人文科学研究所		1									1	2
再生医科学研究所			1									1
エネルギー理工学研究所		3										3
生存圏研究所		2	2		1							5
防災研究所		4	2									6
基礎物理学研究所			1									1
ウイルス研究所		1										1
経済研究所		2										2
数理解析研究所		1										1
原子炉実験所		1	1									2
霊長類研究所			1									1
東南アジア研究所		1									1	2
iPS細胞研究所		1										1
学術情報メディアセンター		2										2
放射線生物研究センター					1							1
生態学研究センター			1									1
地域研究統合情報センター		1										1
放射性同位元素総合センター		1										1
環境保全センター					1							1
国際交流センター		2	2		1				1			6
高等教育研究開発推進センター		7	3		1			2	1			14
総合博物館			1									1
低温物質科学研究センター			1									1
フィールド科学教育研究センター				1								1
福井謙一記念研究センター			1									1
こころの未来研究センター		1										1
保健管理センター					1							1
カウンセリングセンター		1										1
大学文書館					1							1
学際融合教育研究推進センター										1		1
学生部											3	3
研究推進部											2	2
国際部											1	1
総務部											2	2
情報環境部											4	4
学生センター											1	1
キャリアサポートセンター										1		1
教育推進部											25	25
総計	8	109	47	4	13	1	1	3	2	4	50	242



第14回京都大学全学教育シンポジウム
京都大学の直面する教育課題について
—第2期中期目標・中期計画のスタートに当たって—
報告書

平成23年3月発行

編集・発行 京都大学教育推進部共通教育推進課

〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

Tel 075-753-6513
